地名研究会報

第６１号

平成１０年１２月６日

鹿児島地名研究会

Ⅰ.第６１回例会　　平成１０年６月７日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　大田照夫・打越和郎・小川秀直・尾寄一治・納　栄蔵・小山田　稔・上赤一豊・坂本　誠・下野敏見・永坂芳彦・平田信芳・二見剛史・村山謙一・米原正晃（計１４名）

Ⅱ.『大日本地名辞書』読会　PP.1808　～　1809

〔問題となった地名および事項〕　七島の所属・トカラの語源・ニガゴリ・立神（たてがみ・たちがみ）・平氏の落人伝説

七島の所属

平田　七島についての問題点・疑問点などがありましたら出してください。

二見　今、此処は鹿児島郡なんですかね。

平田　現在は鹿児島郡です。

二見　そしたら、明治２９年に大島郡に入って、また変わったのですか。

平田　その前は川辺郡です。

二見　川辺郡。それはいつからなのですか。

平田　川辺郡に入るのがですか？

二見　いや、鹿児島郡になったのは。

米原　私が宝島に居ましたから。昭和５０年ぐらいでしたか、その時に大島郡から鹿児島郡に変わりました。

二見　それは昭和何年？

米原　昭和５０年ぐらいだったと思います。５０年より前ですね。４８年か４９年の頃です（後記：４８年が正しい）。

納　北緯２８度線だったかな。日本とアメリカの境界になったでしょう。２８度線といえば、どの辺になるのですかね（後記：北緯３０度で区切られた）。

尾寄　島尾さんが名を付けて琉球弧といわれるけれども、琉球弧の中に入るわけですね。

米原　そうですね。三つの島はね。

尾寄　三つの島が入るわけですね。

米原　屋久島までは本土だったわけです。その南からが境界線です。

二見　川辺から行ったということが、もう一つよく判らない。

納　三島は、昔は川辺郡だったわけですね。現在は鹿児島郡ですか。

平田　鹿児島郡です。地名辞典などに書いてあるはずです。

トカラの語源

米原　下野先生。トカラというのは、アイヌ語で読めば何とかといわれます。これはどう考えられますか。トカラの語源というのは。

下野　それは大問題ですね。今まで何度も議論して来ました。一番最後の方に近い宝島のことだと『七島問答』に書いてあるように普通はいわれます。「トカラは“乳房のアイヌ語なり”という説はあまりのも有名ですが、アイヌ語があったかということが問題で、屋久島・種子島のアイヌ語説も同時に検討せねばいかんと思います。アイヌ語説というのは一概に否定出来ないと私は思うのです。というのは人類学的な立場から研究されている東大の植原先生などは、アイヌというのは縄文人に近いと云っ

ておられます。オホーツク文化が入っていても縄文人が主体となっているということです。私はこれは間違いないと思います。縄文人の核になって変わって来ているわけです。縄文人即アイヌではないけれども、近いという意味ではアイヌ説も検討すべきだと思います。それをアイヌ語と云ってよいか、縄文語と云ってよいか、その辺は問題ですけど共通性はあると思います。それは後におくとしまして問題はトカラですが、トカラというのは宝島であるのは皆が認めるわけです。ただトカラ列島全体がトカラであって後に宝島に残ったという説と、宝島が最初にあってそれを全体に敷延したという説とがあります。それからトカラというのは、串良・岸良など「良（ラ）」が付くものと語源は同じではないか。一体これは何なのか。知覧のランもありますし、沖永良部の後蘭のランもあります。「ラ」に「ン」が付いたのは室蘭、南は台湾の宜蘭とあるわけですが、ランなどは最も響きが日本語らしくない地名です。ラとランは違うかも知れません。それは兎も角としても、あちらこちらの「ら」というのは、その辺という場所を示すものです。沖縄のニライカナイのライというのも、あちらの「ら」に近い感じです。

では、トカラのラは何でしょうか。だいぶ難しいのですけれどもそういう部分と、もう一つ、そこにあるようにトカラの文字は書物によっていろいろ違って書かれていますが、これらはすべて現在のトカラではないのじゃなかろうか、という説が有力です。そして舎衛国というのは諏訪之瀬島じゃなかろうかという人もいますが、これもちょっと語呂合わせみたいなところがあります。「月氏の南、万里」というところが左側のページの３行目にあります。月氏というのは有名な国がインドの北にありますから中国から見ると西国です。これは時代を追って定説化します。しかし奄美が歴史に登場し、トカラが出て来ると従来の解釈のインドの北でよいのか、という疑問も出て来るわけです。この地名研究会で議論を重ねて真相に近寄ってという期待があり、いろいろな意見を聞こう思って今日は来ました。

平田　月氏云々は、史記とか漢書とか後漢書などに出て来るトカラのことです。トカラ：トハラという国が中央アジアにあったのです。舎衛国もそれと同類です。それらをこっちに持って来たのは意味があるということなんでしょうが。

話は変わりますが、県教委が歴史の道調査を始めて５～６年になります。報告書も５～６冊出ています。その中の一つに「海の道」を扱ったものがあります。その中に維新史料室の徳永和喜氏がトカラ＝七島＝宝島だと書いています。薩摩と琉球の関係の中での一つの隠語であって、トカラ・七島・宝島は薩摩および日本を指す、と。それはどういうことかというと、琉球が薩摩と清国の両方の支配下にあったために薩摩の役人と清国の使節が同じ時期に来ることがあるわけで、それを誤魔化さなければならない。そこでトカラの人だと云った。薩摩の人じゃない、と。中国の西域に出て来るトカラという名前を持ち出して清国の人たちに誤魔化したんだ、と。今日読んだ箇所の左側の真ん中辺に「琉球国の属地で未だこれは国人をたぶらかすのみ」とあります。清国の使節は気付いていたけど、事を大きくしなかっただけのことです。トカラという名前は琉球が清国の役人：冊封使を誤魔化すために作りあげた虚構の呼び名であると徳永氏は分析しています。

下野　それと関連して1429年に琉球国の第一王朝：尚氏王朝が開基するわけです。始まったその年に宝島の島主平田家の者が琉球に行って布と酒を買って帰ったという史料があります。布は琉球の綿絣です。酒は泡盛です。それを買って帰って、さらにそれを鹿児島に転送している。鹿児島で商売した。つまりトカラは中継貿易をしたのです。そんな記録が宝島の平田家にあるということは、宝島の人たちが活躍したことを意味するのです。周煌の資料なんかと一致するのです。宝島の人たちが活躍したからトカラ＝宝島という解釈が出来上がったということが一つ考えられるわけです。しかし先にも出しましたが、トカラ全体を宝島と云ったのか、逆に宝島がそういうふうになってしまったのか、そこからなかなか進めないのです。

平田　右側の一番下に孝徳天皇紀とか斉明紀などにトカラの人々が流れ着き、それを丁寧にもてなして送り返したという記録もあるわけです。地名を調べていることは知られているので、西域史に出て来る吐葛喇というのが何故鹿児島県の地名に出て来るのかと東洋史の人たちから問い詰められてお手上げなんです。

下野　実は昨日のことです。沖縄放送・沖縄テレビから私のところに二人来まして逢ってくれないかというのです。忙しかったのですが一時間だけ逢いました。そしたら、トカラは琉球ですか日本ですかと、いきなり尋ねる。で、答えた。あなたは沖縄県民でしょう。あなた達の立場で云えば琉球ですよ。本当ですか。私の立場では日本ですよ。トカラはそういう所なんです。両方に通じているところがあります。それで琉球では琉球と見るわけです。ところがトカラの民俗から行きますと、古い民俗は琉球の民俗があるのです。これは米原先生の守備範囲ですが、宝島の山田家はその家のある屋敷をとるということから「トンチュ」という云い方をします。沖縄では今でもそう云うています。有力者の屋敷をとるというて、そこに住む人を「トンジュ」と云います。宝島でも「トンチュ」と云います。「当主」という云い方にもなります。宮古島でもトンジュと云います。だから同じですよ。ただし宮古島やトカラがちょっと違うだけです。沖縄のトンチュは屋敷という神様を祀る神社になっています。そこが違います。飛行機にたとえれば、右のエンジンは先島・宮古・八重山で、左のエンジンはトカラ。沖縄本島は胴体の真ん中で操縦室があって、そこは常に新しい文化が起こって来て変わる。トカラと先島の方は古い文化が残っている形になっている。したがってトカラは琉球である。沖縄の人がトカラに来てよく見ると、様相はヤマト的に見えるけれども、よく見れば琉球文化が、しかも琉球で失った古い文化があったりして懐かしいのじゃないですかね。そういう具合に、トカラというのは面白い所です。見方によっては琉球でもあるしヤマトでもある。しかし問題はトカラの語源でしたが、一体これは何ですか。

平田　難しいですね。

下野　小川先生も確か解けないと云っておられた。

平田　解けないでしょうね。日本書紀にトカラの人が流れ着いたという記事があり、しかも史記とか漢書に出て来る吐葛喇と同じ文字が使われているわけですからね。西域の人が日本に流れ着いて来たのか。それとも何なのか、ということ。こんがらがってますからね。今後解明しなければならない問題でしょうが、先程紹介した徳永和喜氏の説も一つの説でしょうし、もっと古く遡れるのではという考え方もあり得るわけです。

話は別ですですけれども、現在県立図書館で各県の大百科事典を見ていますが、面白いと思ったものに『沖縄大百科事典』があります。千ページぐらいのものが３冊ですが、これを見ると沖縄だけでなくトカラ・奄美まで立項してあるのです。南島のことを調べる場合、沖縄百科大事典でまず当たるのが手っ取り早いと思いました。沖縄百科大事典を見直すべきだなと思います。もっとも３冊で５万５千円という値段ですから、大きな図書館で利用されたらと思います。例を挙げると、沖縄・琉球の人たちは倭寇を見る眼でも違った見方をしていますし、平田増宗という人物についても、彼は琉球遠征の副将として行くのですが、こちらでは島津家久に斬られて

いますから、ほとんどの辞書にも歴史書にも書いてありません。書いてあっても簡単に斬られたとある程度です。沖縄百科大事典では琉球遠征の副将ということで詳しく書いてあります。沖縄から鹿児島を見る視点を知る上でも沖縄百科大事典を鹿児島の人たちは活用すべきだなと思います。

下野　15・16世紀に、薩摩で作った藩内の地図があります。種子島・屋久島は種子島氏が支配しているわけですから種子島領になっております。時代によって地図は何枚もあるのですが、三島は地図の中にブランク：空白の場合がある。三島は大体帰属がはっきりしていますが、トカラはずーっと空白：真っ白なんです。どこの領有でもないのです。これは面白いことです。トカラは島津氏の領地ではないのです。

二見　その地図はどこに行けば見られますか。

下野　これは県立図書館にあると思います。トカラは島津氏の藩外です。

平田　沖縄百科大事典を見ると、奄美と琉球の関係は詳しく書いてあります。例えば『仕遠征記』を引用して、琉球の王家が喜界島に遠征軍を送ったのは1466年だと、はっきり書いてあります。そうすると1177年に俊寛が喜界島に流されるということは考えられないことになります。結局硫黄島に落ち着くことになります。

ニガゴイ

二見　話はちょっと変わりますが、ニガウリの歴史を調べてみました。鹿児島でいうニガゴリですが。普通はツルレイシとか云いますが、沖縄ではゴーヤと云います。国語辞典の説明に「鹿児島・奄美大島・沖縄ではまだ生のうちから食べる」と。普通は赤くなってから甘くして食べる、と。したがって季語としては「秋」だというのです。ところが鹿児島あたりでは「夏」で充分なのだというようなことを云っていました。ニガゴリの説明に鹿児島・奄美大島・沖縄と書いてあるのが面白いなと思ったのです。

下野　ゴーヤというのはゴイですよ。鹿児島ではゴイと言いますね。ニガゴイ・ニガウリ、それが語源です。

二見　あゝ、ニガゴイ。ゴーヤとゴイ。

下野　同じ言葉ですね。ゴーヤとゴイは語源は一緒です。

二見　苦いからニガゴイというのですね（笑い）。鹿児島・奄美大島・沖縄と書いてあるところが面白いと思います。連続性があるということです。誰が書いたのか知りませんけど。奄美大島という概念を一度調べる必要があると考えます。

平田　こちらから見たら奄美大島は琉球方言群の北の方だと思うけども、琉球方言では奄美は別だと規定していますね。

下野　トカラにはグスクという所があります。中之島でも私は見ました。グスクというのは奄美・沖縄にはいっぱいあります。山城のことですから、これも共通します。その場合も細かく見ると、沖縄色が沢山出て来ます。しかし言葉は一見して鹿児島弁の感じです。もっとも口之島と宝島は南端と北端ですから、だいぶ言葉が違いますけど。北の方が鹿児島弁に近いわけです。しかし、よく聞いていると鹿児島弁でもないのです。語感は似ています。それでも鹿児島弁は使えないのでは。

米原　えゝ、使えません。

下野　そうですか。何年おられましたか？

米原　三年いました。

下野　トカラ弁は奄美と鹿児島弁を混ぜくったような言葉ですか。

米原　奄美とも言葉が全然違うと思います。

下野　そうですか。

米原　鹿児島弁ともまた違いますね。

下野　いずれにしても違いますね。

米原　はい。

下野　どこか似ている？

米原　単語は似ているところがある。

下野　同じ単語をもって来たところがありますね。例えば島語という。これは奄美的表現です。私も大概記録しましたが。

平田　日本本土に近い所ほど本土の影響が濃厚にある。琉球に近づけば近づくほどそれが薄れて行くという度合いの違いがあるのでしょうね。

下野　そうですね。ある人が云っていますけど、トカラを見ると日本が見える。同じく沖縄が見えると。逆に言えばトカラを見ないと沖縄も見えないし日本も見えない、ということになるのです。両方が混じり合っている非常に大事な島です。

立神（たてがみ・たちがみ）

下野　トカラには立神（たちがみ）というのが沢山あります。これ（大日本地名辞書）にも書いてありますが、立神です。

平田　こっちで有名なのは枕崎の立神（たてがみ）でしょう。

下野　こちらではタテガミです。ところがトカラではタチガミです。それは奄美方言と同じです。奄美はタチガミです。沖縄に行くと、タチガンと云います。さらに南下して行くと「トン」という。トンは奄美大島では笠利沖にもありますが、笠利沖の立神は「トン」と云います。そして「トンバラ」という所もあります。徳之島の山（さん）の沖にあるのも「トン」です。立神の名称は沖縄ではトン、九州では立神。それが奄美・トカラではミックスしたものになる。タテガミは南下しながらトカラでタチガミ、奄美でもタチガミ、沖縄はタチガン。一方、トンの方は沖縄。奄美もトン。九州を北上して行くと立石あるいは尖石になる。長野県に尖石遺跡というのがありますね。それと立神の北限というのは淡路島です。対馬にも立神があります。豆酘（つつ）にあります。立神が多いのは九州です。中でも鹿児島県です。

平田　ふーん、なるほど。

下野　これは何故か。恐らく修験者の持って来た文化じゃないか。トカラにも修験道が入り込みますから。要するに、タチガミ・タテガミは同じものです。トンも同じです。その島乃至は集落を守る自衛的な神ということです。タチガミ・トンの地名を追って行くと面白い。

平田　それは鹿児島県に多い花立・柴立などの「立」地名とも結び付く。それから「立山」。実は母の実家が立山（たちやま）です。タッチャマどんと云いますが。

下野　どこですか。

平田　鹿児島です。加治木にもタテヤマとタチヤマがあります。タチヤマは少数です。以前からタテとタチの違いに何故かと、不思議に思っていたのですが。今、下野先生の話を聞いて、タチとタテとは地名からも整理の必要があると感じました。

下野　もともと地名です。しかも修験者が介在している。

二見　立神が立石になるのですか。

下野　立石が古いようです。

二見　立石？自然現象の立石というのがありますか？

下野　立石は自然的な名称です。そして、全国にあります。南限は種子島です。そして薩摩が最も多いのです。九州の中では。立神、九州では石が神として祀られる。トンというのも古いと思います。尖石もつまりはトンだと思います。

平田　今、話に出た立石は古代の道路とも関係があるようです。重要な所に立石という地名があります。立石の地名を拾っていくことによって古代の道路の復元に役立つ面もあります。「立」という地名を追求するだけでも結構地名の研究は広く展開して

いくと思います。例えば溝辺には「馬立」があるでしょう。馬立という地名も意味ありげな地名です。

下野　立神は九州の場合陰陽石と結び付きます。大島の立神はまさに陰陽石の陽石です。陰石の方は200m ～ 300m離れた所にあるのですが、陰石の方はフッドンと云います。不動さんのことで不動明王を祀っている。立神の方は大きな自然の石がありまして、その前が拝殿になります。本殿は石、それが立神です。その後に山伏らしい小さな石像が置かれています。石像と云っても３寸ぐらいのものです。今でも拝んでおります。そこからも立神には山伏が介在していることが考えられるのです。陰陽石と立神が結び付くのが面白い。加世田の内山田の陰陽石と立神の場合もそうですね。枕崎の火之神、これも立神と結び付きます。根占の立神もそうです。

平田　なるほど。陰陽石と結び付くとなると全国各地にある道祖神はほとんどが陰陽石ですよね。

下野　そうです。上白木の場合は道祖神的な役割をする。村はずれにあります。悪霊が村に入って来ないように、村を守るためのものです。立神も島に悪霊が入って来ないように島を守る存在です。悪石島の場合もそうです。悪石島には高い山があり、御岳を中心に千メートルぐらい（高く感じるが実際は584m.中之島の御岳ならば827m.）あります。その直下に、海岸に立神があります。まさに島を守っている護衛の神様という感じです。屋久島に立神は一つですが、トカラには二・三十あります。

平田　七島の名前も悪石とか臥蛇とか。そういう名前の付け方も、自分の島を守るためにわざと悪い名前を付けたのでしょうね。

下野　恐らくそういう知恵が働いていると思います。好んで採用したのでしょう。非常に霊に対す恐れがあり、今でも強いです。悪霊に対するお祓い、そんなものが多い。七島正月というのがあります。旧暦の12月1日から7日までです。島によっては6日までと7日までの違いがあります。七島正月には面白い行事が多い。私も参加しましたが、悪霊払いの行事です。まず門松を立てます。門松は笹竹とシメ縄を飾りますが、口之島の門松は笹竹を立て、シメ縄を張るために竹を渡してあり、北の方を弓で射るように作ってあります。弓矢の構造に作ってあります。それにシメ縄を張り大麻を垂らしてあります。そして夕方。島によって違いますが、ある島では、夕方主人が正装して御膳を持って、御神酒・御馳走を持って、門松の所に来て、そして門松に上げる。これはよく考えてみると、門松に上げるのではなくて門松の所で、そこまで来て、後はシャットアウトして中に入って来ないようにして、悪霊に対して御馳走している。ヤクザに対するやり方と同じで、此処でお引き取りください、と。

そして今度は、七島正月が済みまして、その晩のことです。巫女さんが、今神様が発ったと宣言します。すると区長さんが鉄砲をズドーンと鳴らすのです。村人は、あゝ今発った、親玉のお立ちと判ってですね、そして御供物を全部収めるのです。鉄砲を鳴らすと云っても、これは追っ払うという意味です。ただの合図だけではないのです。トカラにはそういう悪霊に対する行事が多い。立神を設定するのと同じ気持ちだと思います。私が聞いた限りではシメ飾りを付けるのも同じ神。付けたのは誰が付けたのかは判りませんが、造木の花それに稲ムレをもって飾ります。

平氏の落人伝説

二見　平氏の影響というのはどのように考えたらよいのですか。

平田　さぁー 。

下野　何ですか？

平田　平家の落人伝説ですよ。

二見　今、琉球とか立神とかの問題が出ていますが、平氏が入り込んで来た時のことに結び付くのか。

下野　これはですね、各家に系図があります。その系図は30メートルからあるのです。そして誰にも見せないのです。見るのに十年かかりました。十年間精進して（笑い）、縁側に上がって、そして何度も上がって。それは巫女さんが持っている。最後の時、もうこれっきり、もう頼まんと思って、みそぎをして、そして区長さんに頼んで、お酒を持って、お願いにあがった。やっと見せてくれました。もうあんただけだ、以後は見せない、と。その代わり条件が一つありました。今の家族を書き込んでくれないか、と。字が下手ですよと云ったら、構わない、と。で、下手な字を書き込みました。以後何人か行ったらしいけど、見せられない、と。問題はその系図ですが、桓武平氏から書いてあります。実際に入島した確実なのは、近世初期です。近世初期の頃から判って来ます。つまり近世初期に平家脈と称する者たちが入ったことになります。それは自称ですから、それ以上は判りません。

平田　それは次のこととも符号しますね。硫黄島に安徳天皇の墓と称するものがあります。硫黄島小学校のすぐ近くにあるのですが、どう見ても室町以前には遡らない。まあ、１５～６世紀。あの島で１６世紀と云ったら古い方です。

下野　同じようなことですね。宝島の平田家の平というのも平家の平ですからね。平田先生の平もそうかも知れませんが（笑い）。

平田　そういうところで、前半は終わりにしましょう。

米原　ちょっといいですか。トカラに人が住んだというのはこの日本書紀の記事から考えて非常に古いということが判りますね。『日本残酷物語』の中で忘れられた島と云われながら、相当古くから人々は住んでいた。今でいえば過酷な状況ですね。そういう中で宝島だけは、まあ、人が住めるという感じのですね、田があり、高い山はなし、そして砂丘がある。そういう所であっても、人が何故住んだかということに関して、国分直一先生はトカラに人々が住んだのは飛び魚を求めて来た人々だというようなことを書いておられるのですね。それがうまくいかなかった。しかし飛び魚を求める漁というのは決して古いものではないし、その前から人は住んでいただろう、ということになります。

下野　トカラでは、飛び魚は明治以降から取っている。当然食べなかった。鰹やサワラがよく取れるところですから。

米原　そうですね。飛び魚よりはサワラを好んで食べますね。

下野　市来式土器を用いたのは三千年前の人たちですが、縄文後期の彼らは九州と沖縄の間を頻繁に交流しているでしょう。それ以前から交流があったことを示すいろいろな遺物が出ている。それらを見ると、意識的に航海したと考えられます。その場合、トカラは必ず寄航しなければならない場所になるはずです。ですから三千年はおろか一万年以前からも、あるいはそれ以上前から、あの海峡が出来上がってからも恐らくトカラというのは重要な交通路だったのではないでしょうか。今われわれが考えている以上に頻繁な交流があったとみなければならないのではないか。

米原　そうですね。

下野　平家伝説については、例えば口之島は肥後氏が多い。肥後氏は志布志に今でもあります。あちこちにあるわけで、種子島にも肥後氏があります。これも平家といわれます。だから、平家脈なんですが、肥後氏の勢力圏が大隅・種子・屋久そしてトカラと続く。また、宮崎県に多い日高氏が中之島から平島にみられます。その南はさっき云った平田氏になるわけです。そういうふうに本土の中世の勢力が南下しているわけです。中世の勢力は平家の後裔を名乗っています。そして肥後氏なんかは海賊的な

性格を持っていたとみるのです。海賊を働いたという証拠はないけど、そういう一つの集団とみられます。だから陸だけでなく海の力：水軍力も持っていたと思うのです。それを遡れば熊野水軍になっていきます。実際、熊野信仰もあるわけで、熊野信仰に焦点を当ててもそのことが云えます。諏訪之瀬島で鏡が出て来ます。直径12 ～ 13cmの鏡ですけど、この鏡と瓜二つというか全く同じものが種子島中種子町の古房神社の鏡なんです。古房というのは種子島家第10代幡時という殿様の修行した場所に近い所です。幡時は修験者：修験道をやっていたのです。これはちゃんと記録があります。ですから修験文化を通して諏訪之瀬島・種子島は結び付く。また同じ鏡の背景にあるのは熊野信仰なんですが、それが種子島と硫黄島にあります。硫黄島の伝説と平家伝説の背景には熊野信仰があります。これを洗わないと俊寛伝説も今一つという感じがします。それがトカラを南下しているのです。トカラを調べるには歴史も調べ、民俗も調べ、しかも南の方からの文化も調べる。一つの例をあげます。悪石島に有川という姓があります。代々神官をする人たちです。向こうでは大夫どんというのですが、浜にあるエビスを絶対に拝まない。島民は皆拝むのに絶対に拝まない。エビスは大事な神なんですね。トカラは漁業の島ですから。その漁業の神を拝まないということは何故か。有川姓は実は根神山という山の近くに東村があります。これはアガリ村なのです。今は廃村です。そのアガリ村に住んでおった人たちなのです。そこにある山は小高い山で根神山（ねがみやま）になります。根神というのは沖縄各地に祀られています。根神、それから根人（にっちゅ）ですね。根神はニーガンと云います。ニーガン・ニッチュ。兄さんがニッチュ、妹がニーガンです。本家筋の兄と妹。彼らが祭政一致の政治を中世に行っていた。そして現在もそういう名家は残っているわけです。ノロの制度の原始の形です。そういう古い制度と名称がトカラにはあるわけです。有川姓はそこの主ですから彼らは沖縄から北上して来た勢力とみてよいわけです。そして彼らはニライカナイに通ずる海上他界を沖縄と考えますから、ヤマト的なエビスを拝む必要はないのです。そのように解釈出来ます。それが今も生きているのです。ですから、いろいろな面で面白い所です。

米原　トカラはどこの島も非常に古い土器が一杯出て来ますよね。宝島でも、ここに出て来るイギリス坂に行く所に浜坂貝塚というのがあって、河口貞徳先生が発掘して名付けられた宇宿上層式が出ているのです。また、海岸の砂丘に大池という池があって、そこに大池遺跡というのがあります。これは国分先生と白木原先生が発掘されました。そこからはゴホウラ製の貝輪のいわ製作途中のもの：半製品がものすごく沢山出たのです。だから恐らくそこに製作場所があったとみられます。いわゆる半製品が大量に出て来ました。それらは全部熊本大学に持っていきました。借りる形で持って行ったのですけど、とうとうそのままに返されずになっています。熊本大学に行けば見られると思います。

平田　確かにトカラとか奄美は考古学で注目されているし、また一番早くは民俗学が注目していたのですね。歴史学はおくれているのです。文献は琉球王朝が登場するのは15世紀だから、それ以降しかない。そして島津の征服が17世紀です。その前に活躍するのはと云えば、倭寇を分析しなければならないということですね。海賊というのは、これは世界共通のことで、16世紀の海賊はうまく行けば商人ですからね。商取引がうまく行かなければ海賊に化けるわけです。歴史家が整理しなければならない問題は倭寇にどれだけ関わったかということでしょうね。

下野　広い視野で分析する必要があるテーマです。

平田　前半はこれで終わりましょう。

耳取――地名と民俗ノート

米原正晃

地名の勉強を始めてまだ間がないもんですからこんな所で発表するのは気が引けるのですが、耳の問題を興味があってちょっと調べてみました。今、豊臣の朝鮮出兵というのでしょうか、朝鮮侵略とのかかわりで薩摩焼の問題が注目されています。薩摩焼のことはマスコミで取りあげられていますが、その負の部分というのでしょうか耳を削いだ事実、そう云った歴史というのも私たちはきちっと見据えておく必要があると思うのです。これは秀吉の朝鮮侵略というだけでなくて島津の朝鮮侵略です。何故耳を削いだのか、ということです。そういう問題は今までどういう形でとらえられたのだろうか、ということが出発点になったのです。

そういうものの一つとして耳取という地名に惹かれました。ただ資料を並べただけで、ノートに整理したものをそのまま出しておきました。本田親虎先生が第２回地名研究会で発表されたというのも知らずに調べたものです。本田先生の発表と同じようなことをやる形になってしまいましたが、本田先生ほど深くはやれないので申し訳ないような気がします。そういうことでノートをそのまま書いてみたというようなことでお許し下さい。本田先生の時の名前を見ますと、下野先生を初め多くの方が参加しておられるようです。

本田先生の話は、入来の地名伝説としてのものでした。クマソが攻めて来た。そして、クマソが陣をとったので熊之陣という。そこで食料がなくなったために降りて来た。そこを小陣という。こっちで待ち構えていた者がやっつけて耳を削いで取ってしまった。そこが小豆迫という所だった。小豆飯を食べて戦勝祝いをしたという伝承の紹介です。耳取と小陣と小豆迫ですね。この話はセット：一組のものとして考えられたわけです。これと同じセットになっているものが宮之城にもあるとのことでした。それと三河国にも全く同じセットがある、と。いわゆる古戦場それから小豆・耳取がセットになっている。これは戦勝祝いにまつわる伝説としているけれども諏訪神社などではマナイタゾロエの行事に耳裂鹿が生贄として供えられる。耳を供えるということがあるのでそういう形で考える必要があるのではないか。先日平田先生から資料を頂いて、そう云ったものが本田先生の発表だったと理解したわけです。

私自身は耳取を考えた時に、坊津の耳取峠のことで「九州で南端薩摩の坊津から鹿籠の枕崎に越えて来る境の峯が耳取峠であった。開聞岳をまともに見る風景の地であったが。冬は西北の風がはげしく吹きつけて耳も鼻も吹きちぎれるばかりであったが故にこんな名前を付けたと説明されている。それが初めてこの名を呼んだ人々の心持ちでなかったことは確かであるが、さりとて三河や岩代の妖怪談が全国無数の耳取の由来を説明し得べきものとも思わぬ」という柳田国男『鹿の耳』の説明を思い出しました。

この耳取という地名はやはり西海岸に多い。それから寒い東北地方が多い。これらを考えてもやはり風の寒さに関係がある。耳を削がれるように寒い。耳が切れるほど寒い所、そう云った気候地名というのでしょうか。それであることは間違いないと思うのです。ただ何故に耳という形で呼ぶのか。そして何故耳取という所がすべて峠とか峰とかになるのかというようなことになると、ただ寒いというだけではなくもう一つその奥に耳というものに対して人々がもっている一つの観念というのでしょうか、民族心理というのでしょうか、そう云ったものがあるのではなかろうか。そういうこと考えてみてはどうだろうか、ということです。

それで耳取の「取」というのを辞典で見てみました。耳を切る：捕虜や捕獲した動物を数えるためにその耳を切り取り首級の代わりに集めたことから捕らえるの意味を表す。自分のものにする」という意味です。これは会意文字で又というのは手です。手（又）と耳。昔は戦争で殺した敵の左耳を切り取り首級の代わりに集めたところから、捕らえるの意味となったということです。

左耳、何故左耳であったのか、という問題も一つ出て来るわけです。左と右との観念が民俗の中ではよく問題にされます。神に供える時は何故「右」でなくて「左」でするのか。あるいは日常生活の中で何故左手で渡してはいけない、というようなことを私たちはよく云われるわけです。ところが葬式の時とか神祭りの時とか、いわゆるハレの日には左胸にするとか、左にどうするとか逆なことをします。そう云った意味で左耳を切るといようことがあるのだろうと思ったりしました。（編集者後記：左耳が実際に切り易いのでは？）

それから『字通』には「戦場で討ち取った者の左耳を切取る意。これを馘(がく)といいその馘数によって戦功を定めた。凱旋してその馘を廟に献じ論功した」と書かれています。

そうすると歴史の中で耳を切り取るということが実際にあるのではないのか。そう云ったものが文書の中にあるのではないか、といろいろ見てみましたがなかなかそれはないのです。これは一つの伝承という形で考えた方がいいのじゃないかと思ったりしました。人の耳を削ぐということも実際あったのかも知れないけれども、それに近いものとしてとらえておったのじゃないか。

文献はなかなか見付かりませんが『タイ民族誌』の中に、カミにささげる耳ということで「普通、背中の肉・心臓または耳・・・という動物の体の中にとくに重要な部分の肉がカミへの供え物として捧げられる。中でも耳の肉は特に重要なものとして考えられている。だから、もし供え物の中にそれが欠けていればカミの怒りにふれ、身に思わぬ危険や災厄を招きかねない。６人の姉婿たちが、森のカミすなわちプラ・サントンに耳をもぎ取られたという寓話もこれと無関係ではない。」「アッサム西北地方の森や山に住むナーガ族は、かつて戦いに勝利をあさめると、捕虜にした敵兵の舌の先・鼻の先などを勝利の祝いとして」えー、耳もそうなんですね。そして彼らの山のカミへ供えた。その時、一番尊敬したのが、書き漏らしていますが、耳だったということです。タイは、行ってみますと、例えば鶏などの飼育法とかその他にしても日本のかつての姿と全く同じような形で、日本との共通性もあるのではないのかと思ったりします。

耳というものをどうとらええていたのか。谷川健一『耳族幻想』に書かれていることをいくつか拾いあげてみました。聖徳太子は耳が大きかったので豊聡耳（とよとみみ）と呼ばれ、老子は象のように大きい耳をしていたので老聃(たん)と呼ばれた、と。天照大神の子の天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）にも耳が付いているし、多芸志美美（たぎしみみ）・岐須美美（いけすみみ）の美美も耳のことだ、と。これらは神武天皇と阿多隼人のあいら津ひめとの間に生まれた子になります。神武天皇の本妻の子にも神八井耳・神沼河耳があり、それにも耳が付いている。それから五島列島の大耳・垂耳の問題、ヒコホホデミのミ、わだつみのミ、オオヤマツミのミ、安曇族のミ、などは耳と同じだと、谷川健一さんは述べています。

別の辞典をみると、ミというのは単なる「神霊を表す尊称」であって耳とは関係ない。ただその尊称を重ねたためにミミとなって耳の字になっている、と書かれています。

だから、そのあたりをどう考えるか。ただ名前に耳が付く問題に限定すると、谷川さんが云っているように髪の結い方などが阿多の問題・隼人族の問題と

関係して来るだろうなと思うのです。

それから福耳ということを私たちは有難かったりします。仏像の耳・恵比須・大黒・福助など。耳の働きに対する期待があるわけです。

それと耳というのは音声を聞くということだけでなくて、この世のものでないもの、この世の世界とは別なものを聞くのも耳の働きにあるわけです。例えばネズミの浄土。穴の中の音に耳を傾けると、この世のものでない世界の音が聞こえて来る。また同じ年齢の者が死んだというのを聞くことによって自分にも同じような悪霊が付く。それを防ぐために耳ふさぎ餅を耳に当てる風習もあります。同じように正月の十四日・十五日などにも葬式と同じことをするわけです。悪いことは聞くな、いいことを聞けと云ったようなことですね。そのようにいろんな形で民俗の中には耳というのが出て来ます。耳はあの世とこの世、あるいはこの世界と別な世界をつなぐものととらえられていたわけです。そう云った中で耳なし芳一の話もあるし、耳飾りの問題も出て来ます。上野原遺跡では大きな耳飾りが出て来ましたが耳の問題として考えてみてもいいかなと思います。

そこで地名の問題として、耳取・耳切を拾いあげてみました。これは『角川日本地名大辞典』の中のものです。本田先生は17ほど例をあげておられますが、私が拾ったのは25例です。これでも拾い残しがあるかなとも思います。本田先生があげておられる入来の耳取坂と坊津の耳取峠は小字の中には入っていませんでした。

熊本県の例も同じように調べてみました。耳取というのは鹿児島県の半分もありません。宮崎県になると、もうほんの僅かです。何故、鹿児島県に耳取・耳切という地名が多いのかが、一つの課題になります。耳切も耳取と同様な思います。これなどからみてもやはり気象地名であり、北西の風が吹く地帯に耳取・耳切の地名が起こるのだろうな、と思います。そのように考えると耳取・耳切が多いわけを理解出来るのじゃないかと思ったりします。

その他に、参考のために「耳」の付く地名をあげてみました。耳落とか耳仏、耳原、耳宇都。その他、鼻切（はなきれ）などというのもあります。この鼻切は地名としては一番突き出た所、それが切れている所：端切というのでしょうか、突端。そう云った意味だろうと思います。耳切というのも同じような名前で風による気象地名というだけでなく、地形的な耳：突き出たものの一番切れ端、あるいは地形的に浸食された所などがこの耳切に入るのだろうとおもいますが、どうなんでしょうか。

それから参考のために首塚をあげてみました。４カ所：鹿児島県に２カ所、それから宮崎県と熊本県。私の見落としがあるかも知れませんけど、そういうことです。

それと『新日本地名索引』、これは２万５千分１図に出て来る地名をまとめたものです。それに出ている「耳取」を拾いあげてみました。地名索引に出ているのは数としては非常に少ないのです。鹿児島県の地名では坊津町と財部町の耳取峠が入っています。

それから本田先生がいわれた「小陣」も拾い出してみました。国分市上小川、それから加治木町反土、福山町福地、高尾野町柴引、入来の浦之名。これは本田先生があげられたものです。それから加世田市唐仁原に小陣という集落があります。集落名として今もあります。

そこで、耳の意味について「耳の意から、物の端、隅の地を言う地名と見られる」というようなこと、あるいは人間・動物などの耳の形にちなむ：耳の形に似ているとか、あるいは崩壊・丘陵・堤防、つまり突き出てもの、いわゆる端の方が切れているような所を耳と云い、そこが切られているから耳切という。勿論、耳ですから端っこ、縁のことになる。頴娃町の耳原などもそういうことではないかなと思います。

また、富山あたりでは「田のミミを切る」つまり「耳切」と云えば「畦切」のことなんです。そういうことが『日本の民俗（富山）』の中に出ています。耳切というのは必ずしも風だけはでなしに崩壊地名やここに書かれているのもそうだろうし、畦のミミ、端っこ、そう云ったものも入っているだろうなということが想像出来るわけです。しかし、何故鹿児島に耳取・耳切が多いのかということになる。これだけではやっぱし解釈出来ない。そうすると風の問題というのを考えんといかんだろうなと考えました。

耳取では、1.東日本に散見される地名。台地・丘陵地の端を切り取って耕地を開発した所とみられる。2.ミドリ。下部を切り取られた台地。耳が取れるほど風の激しい所。3.ミミはヘリ（縁）の意、取は占めるの意で、耳取はムラの端っこ。パンの耳と云ったりするのも同じことだろうと思います。

耳取峠のことに関して、名称については“耳を取られるように冷たい”という「気象説」と坊津の密貿易にからまる「罪人追放説」とがある（坊津郷土誌）。

この地で罪人の耳を切り取ったという説と、この峠に来た人々が眼下に広がる眺望のすばらしさに見ほれ立ちつくしたことから、見ほれが訛って耳取になったという説がある。これは現地の看板に出ていることです。

当峠に吹き上げてくる寒風が、耳がちぎれるほど痛いので、この名がついたという気象説が一般的である（角川日本地名大辞典）。一般的であるということですので、その他いろんな説というのもさっき並べたような形で書かれているのだろうなと思います。

思わず、その絶景に“見とれ”てしまったという耳取峠（鹿児島県広域道路地図）。

『薩隅日地理纂考』の中では「ソモソモ此勝地ニカクモ怪シキ名ヲ負ワセタルハ如何ニト云フニ此峠冬ニ至レハ大洋ヨリ西北ノ風烈シク吹上ケテ行人ノ耳鼻ヲモ吹キ切ル許リナレハナリトソ」とあります。

そういうことで、これ（耳取）自体は風のことだろうと考えるわけですが、鼻もやはり冷たいわけなのに何故「鼻切」の形にならずに耳切・耳取という形になるのか。これは一つの偏見みたいな形での感想です。

「枕崎市から坊津町に行く途中、耳取峠があるが、ここは風が激しいという言い伝えはないらしい」。これはこの筆者の間違いだろうと思います。「ところが獅子と獅子とが咬み合って、負けた獅子が耳を食い切られたとか、それを埋めた塚だという話は、秋田県に広く分布している」と。それから秋田県には獅子の頭を埋めた場所とか、山形県には耳取・見取という地名もある。それから耳取堤（なわて）という所です。次のページ。「ヘンゲェ（変化？）の者が出て人の耳を切り取って去るというが、実は寒風が強く吹いて耳が凍え切れるばかりにおぼえる故というのから西根村のも恐らくこれか」というようなこともあります。

牛島盛満『肥後の伝説』に中には、八代の海岸の話が出ています。「八代の竜峰の西川田に耳取という所がある。昔、この近くは海で深い沼地があり、ここに入り込んだが最後、足を取られて沈んでしまう。ある時、部落の者がこの底なし沼に落ち込み、とうとう首まで入り込んでしまった。その叫び声を聞いて駆けつけた人々は助けようとするが、首だけしか出て来ないので、仕方なく耳をひっぱりあげようとしたところ、耳が取れてしまった。それ以来、この辺りを耳取というようになった」と。

同じ熊本県の話。宇都市と不知火町の境界に耳取山というのがあり、昔、山賊がいて通行人の耳を切り取ったという言い伝えが残っている。これなどは坊津の耳取峠のそれと同じ話です。

次に耳取坂のことに関しては、風が烈しい土地のことを云い、雲仙にも同じように耳取というのがあって

風が烈しく吹いて耳が取れるぐらいだという。大分の津久見の耳取坂は、尾根と尾根との間の低くなった坂道で、冬は北風が激しく、ススキの葉がささくれるほどであったということです。

そこで「多く村端れにあり、恐らく信仰・生贄に関する耳取行事のあった地名であろう」（柳田国男『開拓と地名』）と云っておられるわけですが、柳田先生自身も耳取というのはそういう耳が切れるような寒い風によるものであるのだけども、ただそれだけでは解決出来ないのじゃないかとされるのです。そういうことだと思います。

民俗学では生贄ということから考えると、それの名残として何かないのかということになる。そこでいわゆる耳印というのが出て来ます。耳印というのは放牧の牛馬などの家畜を見分けるために耳の一部に刻み込む目印を付けます。集落によってあるいは家ごとによって、耳にいろいろな形を刻み込むわけです。耳を切るわけです。これは隠岐・佐渡・伊豆大島・八丈島・石垣島などでも、つい最近まで行っていたと云います。

何故そういうことをしたか。佐渡では、もともと村の山の神祭りの時に、2月9日ですね、その時に供える物として耳を切っていたのだ。ということはかつてはかつてはそういう形で山の神に供える習俗があったのだろうと思います。

これと同じようなことを鹿児島民俗学会で報告したことがあったのですが、その時に姶良町の方が、この話で判ったのだが自分が子供の時に家の近くに牛を放し飼いにしてあった、と。小さい子供と時だから、なんで耳を切るのかねと不思議に思っていたが、それがそう云った耳印の名残としてあったのかな、と云われたことがあります。

大塚民俗学会『日本民族辞典』には「上古からの風習で、発生起源については私有財産という家畜占有の喜びを表すという心理的要因を重視する見解もあるが、獣類の耳がもっとも敏感な心の表現と考えられたために野獣の狩で耳を切り、山の神に奉謝したと同様、印を施すことによって所有者への完全な帰依・帰属を願ったものであろうか」と。結論としては出ていないのですけど、あろうか、という形でこの耳印の問題を説明しています。

これと同じような問題として耳塚のことがあるわけです。三国名勝図会なんかにも、耳塚の記述があったと思います。また苗代川に耳塚があると書かれたのを見たことがあるのですけど、伊集院町史を見てもそんな記事はないのです。耳を持って来てこっちに築いたのか、それとも向こうで耳塚を作ったということなのか、ちょっと判りません。

（3）は世大界百科事典の記述です。「戦争で敵の耳を切って埋めたなどという各地の耳塚は、いけにえにするための動物の耳に印をつけたものが、伝説化するときに、もっともらしくつくりかえられたものであろう」というようなことなんですね。鹿児島県の小字に何カ所か耳塚というのがありますが、耳塚というのは山の神に動物を供える場所として考えられないのかなと思います。「実際のところはそれほど確かな話でなかった」これは人の耳を切って、そう云ったものを作ったなどということはなかったのだと柳田先生は云っておられるのです。「唯最新の一つが多数市民の眼頭において如何にしてもかくも物々しい発達を見たかという疑問が残るばかりである」「これらの伝説は明らかに後世の付与なのであって、もとは神祭に際して供儀となる動物の片耳をそいで他の動物と区別することから起こったものなのである・・・片耳の供儀を連れて来て神祭をした霊地が耳塚と名付けられたのであった」：柳田国男『耳塚の由来について』。私はそう云った場所として峠あるいは峰に、いわゆる耳取峠というものがあったのではないかと思います。「また耳塚という如き小さな名称・・が独立して永く記念せられるにはたりなかった。これにはやはり獅子

舞の獅子が耳を咬み切られた類の古い神話が来て助けたのである。即ち耳取が境の大切なる条件であることを記憶する人々が、この口碑の成長にも参与していたのである。或は、これに基づいて鹿よりも今一つ以前の大昔の生贄慣習を尋ねることが出来るかも知れぬ」。そしてまた「耳は贄の変形であり、境に祀られた耳塚はよそから侵入する悪霊や病魔を遮る呪力があると信じられていた」。耳そのものが悪霊や病魔を遮る呪力があると考えられていた。まぁ、そういうことです。

鹿児島県には耳取というのが非常に多いわけですが、それは気象地名から起こったものでしょうけどそこにはやはり峠の民俗というのでしょうか、道祖神的なもの、道祖神に供える習俗として、それが耳取という形で人々に意識されて来たものではなかったのかな、と思うのです。大急ぎで話しましたが、まぁ、そういうことです。引用文から考え付くことを話しました。いろいろと教えて下さい。

〔質疑応答〕

平田　２ページの神武天皇に関係する地名に、今一つ、東征の時に船出する「美々津」というのがありますね。

米原　美々津もそうなんです。

平田　それからもう一つ。谷川さんの説ですが、彦火々出見のミ、大山祇のミ、安曇のミ。そうしたら、奄美のミ、平見のミ、全部ミが付きますが、ミは眺めるの見（ミ）が多いと思うのですが。

米原　眺めるでしょうね。宮崎の美々津は日本地名辞典には九州山地を浸食しながら流れて来ることから浸食地名の一つとして書かれていました。そうかなと思いましたが、今云われた神武東征の地名を考えていいかも知れません。

平田　地名研究で問題になるのは、普通耳取とか耳切というのは北風が強くて耳が切れそうな所という気象地名を考えるのですが、民俗学では猟の時に耳を神に捧げる、そういう習俗から付いた地名だとか戦国時代に敵を倒した数を示すために首を持って来るのは重たいので耳だけ持って来て自分の手柄の証拠にした、と。その後で耳を埋めて耳塚と名付けたと解釈する。いろんな要素が入ってるだろうとは思うのですが、そう云った伝説とかそういうものを嫌う人たちはやはり比喩的な端っこの耳とかの地名解釈をします。そしてそれぞれが自分の解釈に満足しています。そんなことで日本の地名学がまとまらない状態になっているわけです。地名にはいろんな要素があるとは思うのですけど。

二見　これはほとんど小字ですか？

米原　はい、そうです。ここに出て来るのは小字です。

平田　２ページは小字でしょうね。『角川日本大地名辞典・鹿児島県』というのがありますが、終わりの方に「小字一覧」がありますから、それから丹念に小字を拾うのが基本的作業になります。手っ取り早いのはアポック社の『日本地名索引』です。１５年ほど前に５万分１図に出て来る地名を全部拾いあげ、独特の座標軸を考え出して位置も見いだせる索引が刊行されました。

二見　小字というのを付けた努力というのは大したものだと思うのですけど、これがどれくらいの年月を経て、どこでどういうふうにして始まって、日本全国に付けたもんか。基本的な小字の歴史みたいなものはどうなんですか？

平田　結局はそうですね。昔はよく検地をしています。豊臣秀吉の時もですが、それ以前から土地台帳を作る時には誰の土地とかが判るように地名を付けて報告させています。そういう時の史料に小字が出て来ます。入来文書に出て来る「平松水田坪付帳」などは西暦1500年頃の土地台帳ですから、そのころには既に小字はあったことになります。文禄検地、そして江戸時代は数回検地をしていますから、その度に検地名寄帳が作られ地名がリストアップされています。

二見　さっき、有川という人の名前が出て来ましたが、溝辺に有川という地名があります。最初は在河となっているのですね。耳学問の域を出ないのだけど、文字を後で付けるというようなことは。

平田　アリカワ（在河・有川）も、初めは土地の人は「川」と云っていたのですよ。それを奈良時代に地名は二字にせよということで「在河」になったと思うのです。田圃があれば有田ですし、山があれば有山となるのでしょうが、そう云った中で有川は溝辺から広まって行った苗字だと思います。

さっきの話ですが、明治22年に市制町村制が施行されますが、その時、各市町村は土地台帳を作るように命じられて、きちんとした土地台帳がつくられたのです。ところがそれも古くなったので、現在日本全国各市町村で、一万分一図と千分一図にするよう地籍調査をやっています。各市町村は大体25年ぐらいかかって取り組んでいます。ぼつぼつ出来上がって来るのじゃないでしょうか。

地名を調べる場合、小字を調べるのが普通ですが小字を全国集めるのはちょっと不可能です（明治政府は集めたが関東大震災で焼失）。角川の地名大辞典も最初はそのつもりだったのでしょうが、同和問題とからんで大阪・奈良・福岡などが県単位で小字の掲載を拒否したわけです。ですから日本全国の小字はちょっと集められません。日本全国の地名を眺める場合、３ページに『新日本地名索引』というのが出てますが、これが５年ほど前に出来た索引です。これは２万５千分１図に出て来る地名を集約したものです。『日本地名索引』の姉妹編で、これも各県の大学、おそらく生物学の方々が植物採集や昆虫採集で地図を使い慣れている関係からだと思いますが、生物学の先生が中心になって各県の地名を調べたのだろうと思います。日本全国の地名を集めて、アポック社という会社がコンピューターでインプットしているわけです。一月ぐらい前も案内が来たのですが、５万分１図の『日本地名索引』、２万５千分１図の『新日本地名索引』、それと昔の地名で現在消滅した地名をまとめた『地名レッドブックス』それらを全部ＣＤロームにインプットしてウインドウ９５を使ったら引っ張り出せるようにして、しかも地図上でもすぐ判るように整理されています。カタログも送って来ましたが、全部で約２８万円ぐらい。

『日本地名索引』を持っていますが、鹿児島県は神奈川・和歌山・北海道などとともに３文字の県ですから目に付くわけです。調べ易いので鹿児島県だけを引き抜いて調べたら、大体百分の一ぐらい読みが間違っています。おそらく大学生をアルバイトに使って役場などから集めたデーターが検討されずにまとめられ、それがそのままインプットされたと思われます。『新日本地名索引』は北緯〇〇度〇〇分・東経〇〇度〇〇分とあり、便利なんです。どういう地名がどこにあるかがわかる点で利用価値が高い。ただ小字は出ていません。２万５千分１図に出ている地名だということです。

それと角川が最後に出した『日本地名総覧』、角川の地名大辞典に立項した地名の索引です。これも利用し易い。小字を全部拾い出したら、もっと詳しいのでしょうが、日本全国の小字をリストアップした人はいません、大変な作業ですから。鹿児島県の小字のリストを作るだけでも、私はばたばたしています。すぐには出来ませんけど。『新日本地名索引』、便利な本だと思いますが値段が高くて二の足を踏んでいます。県立図書館にはあります。

二見　全国にわたる耳を調べるような場合は？

平田　これは２万５千分１図に出て来る地名しか出てませんから。それだけでは地名分析をするには、ちょっと足りない。大体の傾向は判りますよ。しかし耳取が出て来るのは鹿児島県は２例でしょう。

尾寄　小字のことですが、鹿児島にも枝ケ迫とか

慶賀迫とかいう地名があって、それが壬申戸籍と同じような、そんな状況もあります。調べれば出て来るわけですね。壬申戸籍はご存知のとおり元穢多とか新平民とか公簿に書いてあるわけでしょう。そして小字を兼ねた所もあります。加世田の堅固坂いわゆる慶賀。現在は表現を変えています。差別的な小字を全く変えた所もあるし消えてしまった所もあるのが、鹿児島の現状ではないかと思うのです。

下野　話題が変わりますが、耳というのは何かということですね。普通は半月形に近い形で、なんとなくふんわりしているわけです。ところが一方、似ているわけです。穀物をふるう箕が、耳と同じ形をしている。穀物をふるう箕というのは、これを調べてみるとアジアの中ではトカラを境にして、そしてシベリアまで入る、そういう地域の箕が半月形。トカラから南の箕は、これは円形。まるい箕です。もっとも沖縄本島では箕のことをミンバーラと云います。そうすると、バラというのは鹿児島にもあるわけで、これはまるい。

＝＝ 以下録音不良、要約をインプット ＝＝

ミというのは古い言葉。箕のことからも耳取峠のことを考える必要があるのではないか。

米原　谷川先生は、実が付く、実が成る。ミは植物の実（み）から出て来たのだろうと云われる。

平田　随分話が多岐にわたっていますが、最後にまだ意見を述べていないことに若干触れて終わりにします。最初に出たアイヌとの関連。ATL（成人T細胞白血病）の遺伝子を研究する人々が北海道のアイヌと沖縄の人々に共通するものがあると云っています。そういうことで医学関係の人々が関心を持っているようです。

それから地名を調べる時に避けて通れないのが同和の問題ですが、私は敢えて逃げる必要はないと、避けてごまかす方が悪いと思うのです。というのは、鹿児島県の被差別部落の場合、古代集落の跡というか古代に成立した集落が多い。中世の争いに敗れたためにそう云った境遇に落とされたともみられます。もとはと云えば被差別部落の方が歴史が古い。そういう誇りを持って欲しいと思うのです。後から来た新参者がよかぶって由緒の古い人々を差別する方がおかしいのです。歴史の古さを知ることによって、正しい理解をすることが大事だろうと思います。

それではこれで終わります。

鹿児島地名研究会　　１９９８・６・７　　米原正晃

「耳取ー地名と民俗」ノート

１、はじめに

第２回地名研究会　本田親虎氏の発表

・入来の地名伝説・・・クマソ、古戦場、熊陣、小陣（古陣）、小豆迫、耳取坂
三河の耳取・・古戦場、小豆坂、夜になると化け物が現われて人の耳を切る
いずれも戦勝祝いにまつわる伝説

・耳割鹿（ミミサケジカ）・・諏訪神社の祭り、オマナイタゾロエ

・生贄の耳

２、「九州では南端薩摩の坊の津から鹿籠の枕崎に越えて来る境の嶺が耳取峠であった。開聞岳をまともに見る好風景の地であったが、冬は西北の寒風が烈しく吹きつけて、耳も鼻も吹き切るばかりであった故に、こんな名前をつけたと説明されている。それが初めてこの名を呼んだ人々の心持でなかったことは確かであるが、さりとて三河や岩代の妖怪談が全国無数の耳取の由来を説明し得べしとも思はれぬ。」

（柳田国男「鹿の耳」全集第５巻）

３、「取」・・ア、耳を切る。捕虜や捕獲した動物を数えるためにその耳を切り取り、首級の代わりに集めた所から、捕らえるの意味を表わす。

イ、自分のものにする。手に入れる。

会意文字又＋耳昔戦争で殺した敵の左耳を切り取り、首級の代わりに集めたところから、とらえる、とるの意味を表す。　　鎌田・米山「漢語林」

「取」・・戦場で討ち取った者の左耳を切り取る意。これを聝（ガク）といい、その聝数によって戦功を定めた。凱旋してその聝を廟に献じ論功した。

白川静「字通」

４、タイ・・・カミにささげる耳

「普通、背中の肉、心臓、または耳・・・という動物の体の中でとくに重要な部分の肉が、カミへの供え物として捧げられる。中でも耳の肉は特に重要なものと考えられている。だからもし、供え物の中にそれが欠けていれば、カミの怒りにふれ、身に思わぬ危険や災厄を招きかねない。６人の姉婿たちが、森のカミ、すなわちプラ・サントンに耳をもぎ取られたという寓話もこれと無関係ではない。」

「アッサム西北地方の森や山に住むナーガ族は、かつて戦いに勝利をおさめると、捕虜にした敵兵の舌の先、鼻の先などを勝利の祝いとして、彼らの山のカミへ供え物として進呈し、その加護に感謝することをした。

プラヤー・アヌマーンラーチャトン「タイ民衆生活誌１」

５、耳族

(1)　・豊聡耳（とよとみみ）の皇子・・聖徳太子

・老聃（ろうたん）・・老子・・像のように大きい耳をしていた。

天忍穂耳（あめのおしほみみのみこと）・・天照大神の子

多芸志美美（たぎしみみ）、岐須美美・・神武天皇とあいら津ひめとの子

神八井耳（かむやいみみ）、神沼河耳（かむぬながかわみみ）・・神武天皇の子

大耳、垂耳・・肥前国風土記・五島列島

ヒコホホデミのミ、わだつみのミ、オオヤマツミのミ、安曇族・あずみのミ

ミは耳と同じ　　谷川健一「耳族幻想」

・「神霊を表す語であるミを重ねた尊称「耳」

「日本の神々の事典」（学研）

・福耳。仏像の耳。恵比寿・大黒・福助・・耳の働きに対する期待。

(2)　耳・・前兆を感得

親しい者の死、同年令の者の死。・・耳ふさぎ餅、耳につけるこより。

正月の行事

ねずみの浄土、聞き耳頭巾

耳がかゆい・・・悪口。

耳たぶの穴・・（柳田国男「耳たぶの穴」全集第１５巻）

(3)　耳なし芳一

(4)　耳飾り

６、耳取・耳切の小字・所在地

(1)　耳取（小字名）

＜鹿児島＞

阿久根市波留
薩摩町永野
鶴田町柏原
宮之城町田原
菱刈町川北
国分市上之段
姶良町深水
加治木町西別府
吉松町川北
末吉町二之方
末吉町諏訪方
財部町南俣
鹿屋市大浦町（耳取尾）
伊集院町麦生田
市来町湊町
加世田田市川畑
加世田市内山田
川辺町上山田（耳取岡）
知覧町西元（耳取風）
喜入町前ノ浜（耳取ヶ鼻）
鹿児島市坂元
鹿児島市吉野
鹿児島市田上
鹿児島市下福元町
西之表市（耳取頭）

＜熊本＞

阿蘇郡一宮町三野
菊池郡菊鹿町大田
菊池郡七城町橋田
飽託郡合志町幾久富
熊本市北部町釜尾
上益城郡砥用町三和
下益城郡小川町北海東
下益城郡城南町陣内
球磨郡多良木町久米
球磨郡山江村山田

＜宮崎＞

えびの市浦

(2)　耳切（小字名）

＜鹿児島＞

山川町成川
山川町大山（耳切レ）
笠沙町片浦（耳切り瀬戸）
川辺町平山
頴娃町　（耳切レ）
国分市西方

＜熊本＞

阿蘇郡小国町西里

＜宮崎＞

笠沙町片浦（耳切迫）　東郷町斧淵（耳切ヶ迫）　日南市楠原
笠沙町赤生木　西之表市西之表（耳切頭）　高鍋町上江
笠沙町赤生木（耳切ノ山）　西之表市現和　（耳切ヶ頭）
市来町大里（耳切ヶ迫）
垂水市柊原

(3) 耳のつく地名（小字名）

耳落　芦北郡田浦町
耳仏　祁答院町上手　東郷町斧淵
耳田原　松元町上谷口、
耳田原（ミミダバイ）大口市里
耳ヶ平　笠沙町赤生木
耳原　松元町上谷口
小耳原園　頴娃町上別府
耳付　伊仙町阿三、
伊仙町伊仙（西耳付）
耳宇都　川辺町平山
祁答院町

(4) その他（小字名）

鼻切（ハナキレ）　喜入町瀬瀬串　隼人町内　宮崎市新名爪　西都市鹿野田
鹿屋市名貫町

首塚（小字名）
枕崎市東鹿籠　日南市板敷　天草郡苓北町富岡
宮之城町田原

(5)「新日本地名索引」より）

・耳取峠　財部町（財部）、坊津町（坊津）、愛媛県五十崎町（内子）、
愛媛県長浜町（花巻温泉）
・耳取　新潟県見附市、長野県小諸市、宮城県古川市
・耳取大塚古墳　長野県小諸市、　・耳取古墳　山口県徳山市
・耳取川　岩手県石鳥谷町（石鳥谷）
・耳取池　北九州市（岩屋）
・耳切　長崎県佐世保市（佐世保北）、岩手県陸前高田（今泉）
・耳切山　岩手県大東町（陸中大原）、岩手県陸前高田
・耳原　鹿児島県頴娃町（石垣）　・耳原町　大阪府堺市
・耳除（ミミヨケ）秋田県田沢湖町（田沢）　・耳付池　鹿児島県和町（冲永良部）
・耳鼻（ニビ）京都府伊根町（亀島）　・耳岳　鹿児島県屋久町（尾之間）
・耳塚町　京都市東山区　・耳荘（ミミノショウ）　岡山県、
・耳川（美美津）・・美弥　・耳成山　奈良県橿原市
（　）は地図区分名

7、小陣　国分市上小川、加治木町反土、福山町福地、高尾野町柴引
入来浦之名、　加世田市唐仁原

9、耳・美弥、美美

(1) 人体語の「ミミ（耳）」の意から、物の端、隅の地を言う地名と見られる。
「日本地名事典」吉田茂樹著　新人物往来社

(2) ア、人間、動物などの聴覚器官ミミ（耳）にちなむか。
イ、ママの転で、崩壊、傾斜面、堤防、洞穴などの「崩壊地形、侵食地形」をいうか。
ウ、「端、縁」をいう語か。
「地名用語語源辞典」楠原祐介、溝手理太郎著東京堂
「田のミミを切る」

10、耳取

(1) 東日本に散見される地名。台地・丘陵地の端を切り取って、耕地を開発した所とみられる。　（「日本地名事典」）

(2) ア、ミドリの転　イ、下部を切り取られた台地など。
ウ、耳が取れるほど風の激しい所。　（「地名の語源」鏡味完二・明克、角川）

(3) ミミはヘリ（縁）の冑、取は占めるの意、耳取はムラの端っこ
（上村重次「字図で見る球磨の地名」）

11、耳取峠

(1) 名勝については、”耳を取られるように冷たい”という「気象説」と、坊津の密貿易にからまる「罪人追放説」とがある。
（「坊津郷土誌・下」）

(2) この地で罪人の耳を切り取っていたという説と、この峠に来た人々が眼下に広がる眺望のすばらしさに見ほれて立ちつくしたことから、見ほれが訛って耳取りになったという説がある。　（現地の説明板）

(3) 当峠に吹き上げてくる寒風が耳がちぎれるほど痛いので、この名がついたという気象説が一般的である。
（「鹿児島県地名大辞典」　角川）

(4) 思わずその絶景に”見とれ”てしまったといわれる耳取峠。
（鹿児島県広域道路地図）

(5) ソモソモ此勝地ニカクモ怪シキ名ヲ負ワセタルハ如何ニト云フニ此峠冬ニ至レハ大洋ヨリ西北ノ風烈シク吹上ケテ行人ノ耳鼻ヲモ吹キ切ル許リナレハナリトソ
（「薩隅日地理纂考」）

(6) 枕崎市から坊津町に行く途中にも耳取峠があるが、ここは風が激しいという言い伝えはないらしい。
ところが、獅子と獅子とが咬み合って、負けた獅子が耳を食い切られたとか、それを埋めた塚だという話は秋田県に広く分布している。
平鹿郡造山村に耳取という所がある。獅子頭を埋めた場所だという。同郡東里村、耳取谷地にも同じ伝説がある。
山形県にも耳取、見取という地名もあるが、秋田県仙北郡金沢西根村耳取がある。三河国額田郡乙川荘小豆坂の近くの耳取堤（ナワテ）は、日暮れに通ると耳取という

ヘングェ（変化？）の者が出て、人の耳を引き切って去るというが、実は寒風が強く吹いて耳が凍え切れるばかりにおぼえる故というから、西根村のもおそらくこれかという。（日本民俗文化資料集成「民俗と地名Ⅱ」）

(7) 八代市の竜峰の西川田に耳取という所がある。昔、この近くは海で深い沼地がありここに入り込んだが最後、足を取られて沈んでしまったという。ある時、部落の者がこの底なし沼に落ち込み、とうとう首まで入り込んでしまった。その叫び声を聞いて駆けつけた人々が助けようとするが、首だけしか出ていないので、仕方なく耳をひっぱてあげようとしたところ、耳が取れてしまった。それ以来、この辺りを「耳取」というようになったという。

牛島盛光「肥後の伝説」第一法規

12、耳取山

(1) 宇土市と不知火町との境界にある山。標高４１６ｍ．２万分の１、５万分の１の地図には山の名がなく、南東側は長い尾根を残す。一帯は、昔、山賊がいて通行人の耳を切り取ったと云う言い伝え。（熊本県地名大辞典）

13、耳取坂

(1) 大分県北海部郡四浦村（現津久見市）風の烈しい土地だからだと云う。長崎県小浜から雲仙に行く処にも耳取と云うところがり。風が烈しくて寒く、耳が取れるくらいだからと云っている。（「日本伝説名彙」日本放送出版協会）

(2) 大分県津久見市の海岸近くのオネとオネとの間の低くなった坂道で、冬は北風が激しく、ススキの葉が風でささささくれるほどであるという。

（日本民俗文化資料集成「民俗と地名Ⅱ」）

14、多く村端れにあり、恐らく信仰、生贄に関する耳取り行事のあった地名であらう。

柳田国男「開拓と地名」

15、耳印

放牧の牛馬などの家畜を見分けるために、耳の一部に刻み込む目印。

(1) 隠岐、佐渡、伊豆大島、八丈島、石垣島。佐渡ではもともとむらの山の神祭りの２月９日）、今では生後３０日から５０日までの間に切るという。

（東京堂「民俗学辞典」）

(2) 上古からの風習で、発生起源については、私有財産という家畜占有の喜びを表わすという心理的要因を重視する見解もあるが、獣類の耳がもっとも敏感な心の表現と考えられたため、野獣の狩りで耳を切り、山の神に奉謝したと同様、印を施すことによって所有者への完全な帰依、帰属を願ったものであろうか。

（大塚民俗学会「日本民俗辞典」）

16、耳塚

(1) 日置郡苗代川の耳塚は豊公征韓の役に松齢公、慈眼公が細川新塞にて大いに戦ひ、敵軍を撃殺し、首を得ること三萬八千百十七級、其耳を切て本朝に送り築いたものである。（中山太郎編「日本民俗学辞典」）

(2) 三国名勝図会

(3) 戦争で敵の耳を切って埋めたなどという各地の耳塚は、いけにえにするための動物の耳に印をつけていたものが、伝説化する時にもっともらしくつくりかえられたものであろう。（平凡社「世界大百科事典」）

(4) 「実際の処はそれほど確かな話ではなかった。・・・唯其最新の１つが、多数市民の眼頭において如何にしてかくも物々しい発達を見たかという疑問が残るばかりである。」「これらの伝説は、明らかに後世の付与なのであって、もとは神祭に際して供儀となる動物の片耳をそいで、他の動物と区別することから起こったものなである。・・片耳の供儀を連れてきて神祭をした霊地が耳塚と名づけられたのであった。」

（柳田国男「耳塚の由来に就いて」第１２巻）

まだ耳塚という如き小さな名称・・が、独立して永く記念せられるにはたりなかった。これにはやはり、獅子舞のお獅子が耳を咬み切られたという類の、古い神話が来て助けたのである。即ち耳取りが境の大切なる条件であることを記憶する人々がこの口碑の成長にも参与していたのである。或はこれに基づいて鹿よりも今一つの以前の大昔の生贄慣習を尋ねることが出来るかも知れぬ。

（柳田国男「鹿の耳」第５巻）

(5) 耳は贄の変形であり、境に祀られた耳塚は、よそから侵入する悪霊や病魔を遮る呪力があると信じられた。

（日本民俗文化資料集成「民俗と地名Ⅱ」）

１７、おわりに

地名研究会報

第 62 号　　平成10年3月7日

鹿児島地名研究会

Ⅰ.第62回例会　　平成10年9月6日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　上野堯史・納　栄蔵・小山田　稔・永坂芳彦・永田典男・西田春人・肥後芳尚・肱岡修一郎・平田信芳・福元忠良・村山謙一・米原正晃

Ⅱ.『大日本地名辞書　』読会　p.1809 ～ p.1810　（計12名）

〔問題となった地名および事項〕　奄美の地名のよみ、平（デラ・ヒラ）、桜島の語源城：グスクの向き、喜界島・鬼界島と俊寛

奄美の地名のよみ

平田　上野さん、あんたは奄美に居られたのだが、コメントはありませんか。

上野　そうですね、大島にいた間、加計呂麻にも行ったことがありませんでした。瀬戸内湾の方はよく行ったのですけど。加計呂麻のところでは加計呂麻だけじゃなくて笠利湾とか名瀬港とありますから、全部のことが書いてあるのでしょうね。

平田　水路志ですから水深とか水取場とかこういう所があるという説明が主でしょう。

上野　水路志の記事を採っているわけですね。大熊は、向こうの人は「デ--クマ」というような言い方をします。

平田　あゝ、デークマ。

上野　今も漁港として栄え、鰹類が水揚げされたりします。

平田　徳之島の亀津も「カムツ」ですか。

上野　あれは「カメツ」でしょう。地元でなんと云われるかは、ちょっと。あるいは、これに書いてるとおりかも知れません。

平田　住用は「リウヨウ」というの？

上野　これは「スミヨウ」です。

平田　「リウヨウ」の読みは、吉田東伍の独断か偏見かも知れませんね。

納　音韻の変化で、われわれは普通母音を5つ使っていますね。a・i・u・e・o。奄美の場合は3母音（a・i・u）になりますから、こうなるのじゃないですか。o は uに変わって、e は i に入って来ますから。エの場合はちょうどイとエの中間の音が出るようです。

平田　だけど住用の場合、e 音はないじゃないですか。リウヨウとルビが振ってあるのが判らない。

納　亀津の場合、土地の人に云わすればカミツ。極端に云えば、カミツ。

平田　カミツですか。

納　はい、一般的に云えば。

上野　さっきのデ--クマも、そうですね。

エとうのはイとエの中間みたいな感じです。

納　鹿児島方言全体では大（ダイ）はデーになって来ます。奄美では大根もディークンとかいうのではないですか。

平田　大熊：デークモとルビが振ってある

上野　やっぱり「ディエ」というような表現です。

平田　どの島をみても、その地名の語源というのは難問ですね。奄美というのはアマ：海を見るということでしょうけど、喜界にせよ与論にせよ、その語源となるとちょっと難しい。判らないものは無理な解釈をしても、しょうがないので、判らないものは判らないで置くのが正しかろうと思います。

平（デラ・ヒラ）

上野　奄美本島の有屋、例の一村がいた所ですが、私は一村が死んで三年ぐらいの時にその付近の調査に行ってるわけですが、土地の人々はまだ誰ひとり一村のことは触れなかったようです。何回か有名な人と一緒に行ったのですが、一村のことは一回も聞かなかったのです。すぐ側を動き回ったのですけどね。その有屋に山城があり、ＮＨｋのアンテナがあり、その向かい側に神社があります。神社のある所は神社だけども「テラ」という地名があるのです。テラというのは平（タイラ）なのか、それとも平家の平と関係があるのか判りませんが、あちこちに上のテラとか下のテラなどと使われています。その地が何故、テラなのか？

平田　それは、こちらでいう「デラ」でしょう。

上野　あゝ、そういう言い方

平田　こっちでは平をデラとかヒラという

上野　それを向こうではテラ・デラという私は「デラ」と聞いたのですね。

平田　ヒラとデラでしょう。

上野　ちょっと聞いた感じでは神社の所に何故寺があるのかと、そういう誤解をします

平田　あゝ、なるほど。今話に出たことは鹿児島では平（ヒラ）と云いますね。上之平（ウエンヒラ）とか中之平（ナンカンヒラ）これが奄美では平（デラ）になるのでしょうこっちでデラというのはあまり聞かない。皆無ではないけど。

西田　こちらでは○○ビラという。ヒラですね。

平田　そうです。そういう所に設けられる神社は歴史が古い。小字を見ると、天神平とか権現平とか諏訪之平とか、そういう地名が目に付きます。古い神社は山の中腹のちょっとした平らな所に造られた　その次は山上に上がっていきます。時代が新しくなると麓に下りて来ます。どういう所に神社が立地するかによって時代が大体決まります。中腹にあるのは歴史が古く、山頂はその次で山麓にあるのは新しい、と。神社が何故テラにあるのかは、その上に考えたら理解出来るでしょう。

奄美は方言からいうと、琉球方言群に属します　薩摩方言群とはまるっきり違っており断絶がありますから、地名を調べる場合も琉球・奄美の言葉を知らなければ全然理解出来ない面が多分にあります　沖縄も奄美も島という単位ですから地名研究はわりに進んでいますが、そこから全体には広がらないのです　島独特の解釈をしてしまって一般的にはならない面もあるのです　そのことが今まで制約になっていました　またその解釈もこちらの方には伝わって来ないという面もあります。こちらからも向こうの方に手を伸ばさなきゃいけないのでしょうけど、こちら側の薩摩半島・大隅半島の地名を調べるのに手一杯というのが実状です。全県的に鹿児島県の地名を眺める場合、奄美の地名がこちらから見ると手薄になっているのは事実です

桜島の語源

納　先週読んだ本の中で、桜島の昔の名は、えーと。

平田　向島（むこうじま）。

納　向島のことで、琉球大のなんとかという先生が、名前は忘れたけど、面白いことを書いとったのです。桜島は桜がないのに、ないごて桜か、と。その先生は鹿児島の向えにあったから向島だ、と。そして東西南北から云った場合、鹿児島の東側になる、と陰陽五行説によると東側は色で表せば「青」になる。グリーンか、ブルーかはわかりませんけど

平田　青：ブルーですね

納　琉球方言では青：アオはオウになるのだ、と。さらにそのオウが桜の読みオウと一致する。それで桜島だ、と。そんな説。

平田　ちょっと強引ですよ。

納　面白いことをいうと思って

平田　面白いけども、地名をそのように分析したら自己満足の解釈になってしまう一般の人はそっぽを向きますよ。

納　いろんなことを寄せ集めて云うとったです　面白いことを云うなと思ってみました

平田　地名は誰でも取り組めてどのようにでも解釈出来ますからね　しかし皆が納得するものでなきゃね、そっぽを向かれると思うのです

納　私はそれを笑い話として受け取っておるのですけどね

平田　桜島の名前は平安時代の大隅守桜島忠信を想い浮かべながら「桜島」と文人達が呼んだというのが正しいでしょうね

上野　桜島を大島と云った時代もあるわけですか？

平田　それは知らない。

上野　大島とは云わないのですか　向島だけですか？

平田　大島という表現は知らない

上野　大島と書いたものを見たような気もするのですけど

平田　桜島という名前が出て来るのは桂庵禅師の弟子になるのかな、巣松という坊さん

あたりからです。桜島忠信の故事を思い出して詩とか和歌に桜島という用語を、いわゆる文人墨客たちが用い始める。鹿児島の知識人の中での洒落た表現として「桜島」という言い方があった。そして島ミカンを桜島ミカンと名付けて、それを幕府に献上する。正式に命名するしたのは 300年前です。将軍綱吉に献上するのに向島ミカンじゃいかんから桜島ミカンにしろとのことで、以後桜島を名乗れとの命令が出て桜島となってしまった。

城の向き

平田　奄美・屋久・喜界・永良部・与論そして徳之島、どの島も地名の由来を考えると面白そうですが判らないことばかりです。

上野　私が大島で城の調査をした時に一つ面白いことに気づきました。城がどっちを向いとるかということです。ある地域に行った時に、それまでの城が北から東：ヤマト方面に向いていたのが、ある所で逆を向いているわけです。私は、そこがちょうど両方の勢力圏の境目かなと思いました。当時おつき合い頂いた有名な先生が奄美のいろんな歌の言葉の中に二つの流れがあると云われたのです。そこが、そういう意味では当たっていると今でも考えているのです　奄美の中でも皆同じじゃなくて、そこに一つ・二つの流れがあるのじゃないか。

平田　いつ頃、城：グスクが現れるか、ということですが、大体１５世紀でしょう。そんなに古くはないでしょう。

上野　要するに琉球の支配でもないヤマトの支配でもない時期が中心でしょうから。

平田　琉球の支配にせよ薩摩の支配にせよ１５世紀の中頃にその勢力が伸びて来るわけでしょう。

上野　山城というのが、ほんとに山の上にある特殊なのがありますけども、大体は集落の近い所、見渡せる所に同じような形態であります。中身はそっくりです。向きを変えれば全く同じじゃないか、というようなのがあります。

平田　その頃は倭寇が暴れる時期。倭寇がねらうのは人的資源ですよね。ですから村人が安全に避難出来るようにとの目的で造るのが城でしょうからね。こちらでも、本土でも同じだと思います。

上野　山城を見ていくと全部うしろの方が狭い谷になっており、橋みたいな感じの細い１ｍぐらいの道が20～30ｍ続いて、その後は島のどこへでも行けるようにつながっているのです。ですから造る時に考えることは逃げ道とか他とのつながりなど一番のポイントになることは抑えて造っているみたいです。時期的なものが想定出来ればいゝのだけども、何も発掘がされてないので。

平田　あゝ、発掘調査がなされていない。

納　　最近云われ出している風水学。陰陽の風水、あれに則って向きが変わっとるというようなことはないわけですね。前の方に特別な山があってそこは駄目とか、高い建物があると悪いとかと風水学ではいうのですかね。俗に云った時に鬼門、北東ですか。あすこは悪いとか、そういうことから来たというのはないのでしょうね。

上野　私が見た範囲では全く地形的なものあるいは地勢的な、というのでしょうか。

納　　風水の場合でも地形を使いますからね。

平田　島のことですからね、そんな風水的なことまでは考えんでもいゝのじゃないでしょうか。入江があって、攻めて来られるとすると、そこでしょうからね。それを見張りさえすれば、いゝわけです。

上野　最後に皆を連れて逃げる時は、必ずどこか島の中に逃げられるような所になります。そういう場所的なものです。だから孤立した城であれば攻められて終わりですから、そういうのはよく考えて選んであります。

平田　そこに住んでいる人が一番よく知っているわけだから、要するに島民の避難場所という性格が強いのでしょうね。そして避難しなければならなかった時代というのが１４～１５世紀の頃。喜界島が琉球に征服されるのが1460年頃、それと同じ頃、もうちょっと前になるかな、島津忠国の時代(1441年)に大覚寺義昭が串間に逃げて来ていたのを将軍義教の意を受けた忠国が斬り、その手柄によって琉球を与えられるということがありますから、島津氏が琉球を手に入れるのはその事件以後です。１５世紀中頃に、薩摩・琉球両方からの勢力が伸びて来て、どちらかに付かざるを得なかったというのが奄美の境遇だったでしょうからね。それまでは自由な立場だったわけです。

上野　それと私たちが見た城からすると、この地区はこっち側に付いた。あの城はあっちに付いた。それが城の向きと関係があり、城が意外と向き合った感じになっているのがあります。やはり向きによって、こっち側：海側から来た場合は全然見えんわけです。こちらはこちらでまた、見えない。明らかに城の向きは敵を想定している。だから言葉の境目というのとどこかでつながって来るのではと考えるのです。

平田　なるほど。

上野　大和浜の手前の根瀬部という所ですが、そこと大和浜との間に境界線があったと感じているのです。

平田　そんな話がどんどん出て来なきゃいけないね。そうでなきゃ奄美の歴史は手がかりがない。

喜界島・鬼界島と俊寛

永田　話はかわりますけど俊寛が流されたという喜界島と鬼界島。その根拠はどこにあるのですかね。

平田　喜界島に流されたというのは、ただ「音」だけのことでしょう。「キカイ」という名前だけのこと。

永田　あそこにも俊寛の墓があるのです。そして発掘されたこともあって、それはある

貴人だろうということになり、刀傷のある逞しい骨が出た。

平田　新聞に出たことがありますね。

永田　私はその時、居ったもんだから。

平田　喜界島に？

永田　はい。それとこっちの鬼界島は何かそういう考古学的な根拠があるのか。

平田　こちらの方は『長門本平家物語』に流されて行った順路が書いてあります。今日配った会報６０号にも書いてあります。「俊寛配流のみち」というもの。やっぱり『長門本平家物語』の記述が一番大きな論拠になるでしょうね。

永田　俊寛が流されてから、それは何年してから書かれたわけですか。

平田　平家物語が書かれたのは鎌倉時代の初めで、半世紀とは離れていない。

上野　今云われている硫黄島については、平安末期には輸出品として硫黄が重要なものになっています。硫黄島はよく知られています。

永田　そこに流人がどんどん流されたような島だったのか。向こう（喜界島）も平家の落人である苗字も沢山あるのですよ。平とか

平田　その平家伝説だけど、何というかな

村山　大和朝廷の勢力範囲は、大体屋久島から硫黄島のあたりまででしょう。

平田　トカラ列島から向こうはまだほとんど知られていなかった。遣唐使が行っての知識だったと思うのです。

永田　こっちの硫黄島を発掘でもして俊寛の遺跡でも出て来たのか、どうか。

平田　いや、それはない。

村山　俊寛堂というのがある。

平田　あゝ、俊寛堂。

村山　肥後先生、あそこに俊寛堂がありましたね。

平田　硫黄島に行って来やったばかりですね。

永田　伝承と伝説というのは歴史的な事実とは違う。いわゆる仮説の仮説があるかも知れんし、仮説が定説になったかどうかも判らんわけですが私はそこが判らんのです。

平田　硫黄島と喜界島は、伝説の範囲では五分五分ですよね。ただ硫黄島が有力であるのは長門本平家物語に記述があること。しかもそんなに離れていない時期の記述です。記されている流されて来たルートを辿って見ると、硫黄島に落ち着くのです。喜界島に行って比べてはいないのですが、硫黄島での伝説をあげると、俊寛堂もあるし足摺石というのもあります。島の北の方にある見晴らしのよい所では俊寛が此処に来て、いつも海を見ていたと伝えられています。そこから見ると開聞岳がよく見えるのです。大隅半島の山々も見えます。罪人を流すのだったら、やっぱり本土が見えるような所というのが一番身にこたえるでしょうからね。

永田　向こうの喜界島も罪人が流されとったわけですからね。ちょっと下るかも知れませんけど。

平田　それは時代が下る話。喜界島が琉球の尚氏に征服されるのが1460年、島津家久の軍勢が琉球を支配するのが1609年。奄美全体が琉球の歴史に登場するのが15世紀中頃、そして島津の勢力に組み込まれるのが17世紀初め。そういう中で12世紀まで遡って喜界島がこちらの影響下にあったと飛躍する方が無理な話だと思います。

永田　今一つ伝説・伝承として見た場合、島民の気持としてどっちに軍配をあげるか。先日イベントをやったこと（中村勘九郎の歌舞伎）から大きくクローズアップされて、あっちが定説というふうになってしまったものか、どうか。私は発掘でもして考古学的に確かめなければ、まだまだ納得はいかんのです。

平田　結局、『長門本平家物語』の記述を頭から否定するか、しないかのことです。

永田　その本がどの時代に書かれたのか、また何年後に書かれたのか、どういう意図で書かれたのか。そういうような事まで吟味してみて、初めて信憑性のある問題になって来る。やっぱり歴史というのは疑ってかからなきゃならんと思います。

平田　平家物語なんていうのは盲僧が語り伝えて、いろんな話が出て来るわけですから極端に歴史から離れていないと思います。それを否定してしまったら大鏡・水鏡などの歴史物、源平盛衰記などの戦記物に書かれていることは、すべて意味がないということになる。

永田　否定するわけじゃないけど、ちょっとでもですね、いろんなことがあればそれを追求していかねばならんと思うのです。例えば島津の話であっても太平洋戦争以前に書かれたのがそのまま信じられている現状ですからね。

平田　そうですね、歴史の書き直しというのは大変ですよ。

永田　だから一旦固定化したものは容易にくつがえせない。定説に近いようになったものを確認するには相当な根拠がなければ受け入れられないのです。

平田　平家伝説も沢山ありますけどね。例えば硫黄島に安徳天皇の墓とか、付いて来た人々の墓なんてのがありますが、どう見ても１５世紀を遡らないのです。

永田　谷山にも豊臣秀頼の墓がありますからね。しかも市の史跡になっています。

平田　何ですか？

永田　市の表示が付いています。もっとも「伝」というのが付いていますが。「伝」を付ければ何とでも云えるのでしょうが。

平田　その地域の人々が付けたら社会教育的にはそのようになるでしょうね。

上野　先程出て来た平家伝説ですが、グスクのことを調べたいろいろな本を見ると本当じゃないかと思うぐらいにその構成が非常に精密です。私が調べた有屋の山城の場合も、

城の形が全く違うのです。こっちは完全に日本流ではないのか、こっちは島流ではないのか、と。そう考えると、案外、平家伝説なんていうのは有名な方ではなかったかも知れんが、その流れを汲む人が流れ着いて来たという伝説があるのではないかと考えます。そこら辺から喜界の伝説あたりも作られて来たことも考えられます。奄美の場合、史料が全然ないわけですので、伝説の中から歴史を汲み取る以外に方法はない。何も残ってないのです。俊寛なんかについても文書の類は何も残されていない。

永田　文書の類は残らない。墓があって、大学の調査で発掘されたことがあったのです昭和５０年前後ですかね。その時に骨が出て来たのです。刀傷があったことから武人の骨ではないか、ということでした。俊寛の体格は当時どれくらいあったのか測ってはありませんので判りませんけど。

平田　わりに若い人ですからね。

永田　それと比較して、こっち（硫黄島）の方で俊寛の骨でも出て来たのかなぁ、と。どこかに埋葬されているはずですから。

村山　俊寛の弟子が俊寛の死ぬ前に行って看取ったという話は残っていますね。

永田　それは、どっち？

平田　有王が（俊寛の骨を）持って帰ったという話でしょう。

村山　その人が持って帰って、娘さんに渡した、と。

永田　ここで論議してもしょうがないですな（笑い）。喜界島と鬼界島と両方出て来たから試しに云うてみただけです（笑い）。

平田　避けては通れないでしょうから。

納　その話を方言で見た場合、私はこういうことを考えるのです。奄美列島の言葉も無理して鹿児島方言の中に入れて考えた場合十島村を境にして言語が変わって来るわけです。十島村の一番南と喜界島とは距離がどれくらい離れているか知りませんが、喜界島とこっちの方は方言が違って来る。さっき話が出た16～17世紀以降は別としても、それ以前はほとんど往来はなかったのじゃなかろうかと思うのです。そのために俊寛を喜界島までやったのだろうか、と考えるのです。それでこっちの硫黄島じゃなかろかい、と。それともう一つ、源の。

平田　為朝。

納　鎮西八郎為朝ですか。あれは鎌倉以降ですから、まぁまぁと思うのですよ。俊寛の場合はそれ以前でしょう。

平田　たいして変わらない。為朝の方が早いのです。

納　為朝が早い？

平田　はい、俊寛よりも。

村山　一緒に流されたのは三人でしたね。そして二人が帰ったわけですから、その人達が書いた硫黄島の地形がそのままだということを考えたら、火山の話や硫黄を採掘する話など。

平田　描写としては長門本に書いてある通りです。

永田　どちらも「キカイジマ」と云いますからね。歌でも「キカイジマ」と言ってますから、どこであるかということは変わらないのです。今度イベントがあったために皆が硫黄島に軍配をあげたので喜界島の方はしゅんとなっているのではと考えて。

村山　硫黄島というのは、いつから？

平田　何ですか？

村山　島の名前が硫黄島になるのは？

平田　昔から硫黄島です。別名、鬼界島ともいうとの理解です。

上野　硫黄島の硫黄は平安時代に立派な商品になっていたわけですから、それからすれば硫黄島の方が都にはっきり知られていたというのは事実です。

平田　日宋貿易の商品は硫黄・屋久杉それから刀剣ですね。

永田　考古学の上からいうと交流は盛んであったわけですよね。歴史的には。

平田　歴史的には交流は盛んにあったと。例えば貝輪とか奄美の土器が相当広がっていることから、しょちゅう往来があったと遺物の上から考えられると考古学は針小棒大に話をしますが、私はそんなに活発とは思いません。今でも鹿児島から沖縄に行く船は５千トン級でも一昼夜かかるわけでしょう。

永田　そうですね。大島本島まで十時間以上かかりますね。

平田　相当かかりますからね。帆船で流されて行くのは大変な冒険です。喜界島論議はこの辺で止めましょう。５分ほど休憩にしましょう。

十二支に因む地名

肥後芳尚

これは以前から何回も流産しましてやっと発表の段階まで漕ぎつけたわけです。平成６年１２月例会で「動物に因んだ地名（１）」ということで話題提供のつもりでいたのですが、ちょうどその時南日本新聞のくらしのシリーズで人気があったとのことで「続かごしま地名ものがたり」を書くことになりました。私には動物地名をとのことで原稿を書いたのですが、なにせ薄っぺらなシリーズですからページ数が限られておりまして、これをどうまとめていいのか判らずに作文と資料を一まとめにして平田先生に送って適当にまとめて下さいと頼みました。その時は分量が多いので資料のみとして動物名の方は後の機会を待ちましょうということで承知したようなわけでした。

平成６年の例会で動物地名について発表ということで一応その前に提出した資料にもとづいて原稿をかいたのですが、平田先生から動物地名の方はその頃話が出ていた地名研究

会の研究報告の方に回しますからとのことで急遽発表題「水神」に切り替えました。動物地名のつもりでいたもんですから材料が不足して、花薗先生に相談して「亀の甲」の話で時間をつなぐことが出来ました。その当時は十二支についてはよく判らないので勉強してから次の機会を見てということで今日まで及んだ次第です。その間に平田先生が「みなみの手帖」でしたね。

平田　これは「朱欒」。

肥後　その前に「みなみの手帖」に書かれなかったですかね。

平田　記憶にありません。

肥後　平田先生が会報と一緒にB５１ページの地名ものがたりを例会で配られます。いつも会報と一緒に見せてもらっているのですが、植物・動物・十二支の動物、いろんな分野にわたって興味ある解説を判り易い文章で書いておられます。朱欒の会員にも評判がよく、われわれも拝読してさすがに先生だなと感心しております。今回そろそろ発表してはどうかという話がありましたので、十二支の話はどうでしょうかということで引き受けたのですが、何分だいぶ以前から原稿を暖めていましたので・・・（つなぎのテープ録音ミス）。私のこの数字は角川の小字一覧から拾い出したものです。また手法は平田先生と同じです。材料は同じでも蓄積が違うので、平田先生のこの文章を見ると補うところもないし、さて、どうしたものかとここ数日頭を痛めていました。

動物地名で一番研究が多いのはやはりここにあげた「馬」です。その中でも他の動物に見られないのが「早馬」と「馬場」になります。「馬」という字が入っているからというわけでもないのですが、早馬と馬場を取り上げることにしました。動物地名として取り上げていいのかどうかの迷いはありましたが。

馬場の名前の付いているのは馬の訓練・調練所とみられます。早馬の方は馬の病気の神様ということです。両方とも馬に関係の深い地名ですので取り上げてみました。数量的にも大体平田先生の統計数字とも合うのですが幾分違うところもあります。もう一度詳しく見たいと思って数の計算なんかもしたんですが数だけ当たってみてもうまく合いません。もう一回、小字一覧から読み直してしっかりした数字を残し、それをお配りする予定でいたのですが果たせませんでした。今回は早馬と馬場の数にしぼってお話したいと思います。

その前に平成６年ですか、研究報告集を作るという話が出て、もう何人かの先生が原稿を出されたと思うのです。今から考えますともうだいぶ見方も違いますし、あのままではどうにもしようもないので書き直すから原稿を返して貰いたいという声もあります。動物地名の原稿も平田先生の報告を見ますと根本的に書き直さなければいけないなとつくづく感じる次第です。それで根本的に手を入れてまたの機会があれば取り上げたいと思っているのですが、平田先生、このことはどうなんでしょうか。

平田　原稿は全部江ノ口氏にあずけたままなんです。私のところにコピーはとってあります。不義理をして申し訳ないと思います。

肥後　もう何年も経ちましたからね。

平田　書き直さなきゃいかんですね。

肥後　えゝ、私のものはとくに書き直さなきゃいかんし、根本的に見直さなきゃいけないということを感じています。

早馬はご存じのように牛馬の神様：早馬大明神として知られています。牛牧・馬牧がある所の後方に早馬様を祀ってあるわけです。私の集計では大島地方と十島村は今回除きました。先程話が出ましたが、やはり苦労してでも入れるべきだなと思っているところです。私の集計では早馬が９７です。早馬のほとんどが神社の周辺近くの土地の名前です。特別変わった理由はないようです。リストアップしたものを付けるつもりでしたが、もう一度チェックしてからお配りします。

もう一つの馬場は藩政時代の仮屋とかその地方の役所、そういう所の前の広い通りを馬場と言っています。それが今日までずーっと残っているわけです。御仮屋とかそれに類する役所の周辺にあった広い通りで、元々馬の調練所に使ったから幅も広いし、そういうことで馬場の名前が付けられたそうです。いわゆる麓に多く付けられているわけです。鹿児島は勿論城下町ですし、馬場も多いはずなんですが、都市計画で昔の地名は変えられて消えたと思うのです。国分あたりはとくに馬場が多い所です。県下では大口・川内・根占・鹿屋など昔の御仮屋のあった所に沢山残っています。

神社の周辺にあったものも多く、諏訪馬場とか八幡馬場、天神馬場などがあります。街路樹によって榎馬場、桜馬場、杉馬場などの名前が付いています。

馬に関しては早馬と馬場、これが他の動物地名に比べて特徴的なものだと思います。集計してみて、よくもこんないろいろな地名が付いたもんだなと関心させらるのです。それも生活の知恵に基づいたものです。やがて、こういう地名もだんだん老人がいなくなって若い世代になるとしだいに消えて行くんじゃないかと思います。

同じ材料で、同じ手法で資料を集めてみても、結局それをどう料理するかで意外なほど非常に味も変わって来るわけです。私は今回そのことを特に感じました。同じ資料、同じ材料を与えられて味付けするのに、どんな手法であればよいかと考えました。このような手法があるんじゃないという皆さんの知恵と指導を頂けたらと思います。「馬」の地名は今言ったようなことなんですが、具体的には平田先生のこの文章を読んでいただければ、そんなに付け加えることはありません。

平成6年の報告の時に十二支のプリントを配りましたが、今回もその中から一部を抜き出してお手元に差し上げました。十二支に結び付けられた動物は本来の意味とは全くかけ離れたもので何のつながりもありません。どうして子・丑・寅の名前を当てたのかはこの文章を読んでいただければ判ると思います。中国で使われていたものをそのまま我が国に取り入れたものであって特別日本に多いからというわけでもなさそうです。十二支がよく使われるのは時間と方位。それは右の図に示してあります。方位は地名に関係がありますが、時刻は地名とはほとんど関係がありません。十二支地名の調査でも方位はあまり出て来ませんでした。二・三ありましたが。

それと参考文献で何か紹介するものはないかと思って調べました。県立図書館で平成5年に図書の展示があり、これはおもに小・中学生を対象に催されたものでしたが、やはりなじみの深い馬・犬・鶏の参考資料が目に付きました。最後のところに十二支に関する本をあげておきました。十二支の一般向け図書、これは平成5年頃の本ですから、今ではちょっと古くなったかも知れません。県立図書館にありますので何かの参考になるのではないかと思ってプリントしておきました。

どうも要を得ない話で申し訳ありません。再度、十二支について数的なチェックをしてみたいと考えています。一番困るのが当て字とか誤字。そういうのが多いので、平田先生の文章を読んで、なるほどそうだったのかと教えられることが沢山ありました。下の方に馬口とありますが、馬の口とはどういう意味かなと頭をひねっていたのですが、博打が出て来ましたから、そうだったのかと納得しました。これに類似した読みが沢山ありますし町村役場に問い合わせるなりして正確を期したいと思っております。ここでバクチに壺振りと書いてありますが、それもあったでしょうが、私が聞いた話ではバクチ穴というのがあってそこでは闘鶏をやっていたという話を聞きました。これも下野先生に聞いたりしていつ頃まで闘鶏が鹿児島県に残っていたのか確かめなきゃいけないと考えています。こういう謎解きのような面白さもあるのです。

「馬」の地名という同じ材料を使って何か違った味付けをしたいと思うのですが、どういう取り上げ方をしたらよいのか、ご意見をお聞かせ下さい。

〔質疑応答〕

平田　質問・意見に移ってもよいでしょうか。以前から十二支に関心をもっておられたのですが、お話を聞く機会がありませんでした。ご説明の通り時刻が地名になるのはごく稀で、ほとんどないと思います。方位は巽：辰巳とか乾：戌亥は、巽御門とか乾門というのがありますから地名としても使われています。艮：丑寅や坤：未申はあまり聞いたことがありません。鹿児島県の地名で十二支が多いのは人名です。例えば辰丸とか鳥丸とかは人名に基づいた名前です。東郷町鳥丸などは鳥丸という人が開発名主となって開いた土地と考えるべきです。辰丸、牛丸という所もあります。それは西の方向にある田圃とか、辰の方角にある田圃とか、方角に結び付くものじゃないと思うのです。

早馬は以前にも取り上げましたが、古代律令の駅伝制の駅馬との関係で注目されています。「早馬」地名で古代の駅路を探すという方法も一つあるのですが、鹿児島県の場合は先程説明があったように牛馬の神としての早馬様：早馬信仰が主体です。牛馬の神の広まりによって早馬という地名は随所にありますから、駅路を探すための材料にはちょっと問題があるようです。しかし古代大隅国の駅路で有名なのは蒲生駅ですが、蒲生駅を探す場合には上久徳に早馬という地名と早馬神社がありますので、これは駅路探しに役立つと思います。一方、駅路として用いられないのもあります。種子島の馬毛島にも早馬という地名がありますから、これは駅路と結び付けることは出来ません。その意味で十二支の中に早馬を取り上げませんでした。

米原　早馬のハヤは古代の駅路から来た早いという文字通りですか？

平田　駅馬：ハユマが訛ったという解釈です。駅馬をハユマと読ませています。

納　よく地図なんかに東経とか西経と書いてあります。小学校の頃は縦の線を子午線と言っていたのですが今でもあるのですか。それと東西の線を卯酉線と言っていました。これはいうなれば十二支と関係がある。

平田　そうですね。子と午を結んだら子午線になりますよね。卯酉線というのは聞いたことがありませんが、卯と酉を結んだから卯酉線なんでしょうね。

納　うちの近所に、今野国道3号のバイパスになっている武岡トンネル。あの裏側を私なんかの小さい時は「ウマンガン」と言っていました。ウマンガン、馬の顔。よく見れば馬の顔に似とるなと思って見てましたけどね。その上に馬の神様がおったからあそこをウマンガンというのだとも聞きました。場所は今の武中、武中学校の桜島側になります。それから竜ケ水、そして加治木の竜門。竜というのは水を呼ぶとか霧を呼ぶとか言われ、水に関係があるわけです。竜はいわゆる辰。崖っぷちに水が出るということで竜ケ水と付いたのじゃなかろうかと思うのですが、そういう説もありますね。

平田　あゝ、そうですか。

納　それから辰の付く地名として細山田にタッバンという所がある。辰喰。それから辰の付いたのには、あれがある。これは話はちょっと別で東京の色街の話にないますが、えーと場所の名は。

平田　辰巳芸者でしょう。

納　あゝ辰巳芸者というのもありますね（笑い）。宮之城に行けば虎居ですか、虎が付くのがある。

平田　虎居は方角でしょうね。虎が居る。

納　　方角の寅ですか。

平田　でしょうね。

納　　国分か隼人に犬走とかいうのがある

平田　犬走？犬追馬場では？（糸走の勘違いか？）

納　　私の勘違いです。家の軒先の呼び名でした。

平田　あれは犬走。実際に犬が走るだけの広さだからです。竜喰：タツバミは、竜が喰ったという発想。その他に鳥喰・猿喰があります。これは浸食崩壊地名で、崩れた時に龍神の使者が、神様の使者の竜が喰ったという意味です。

納　　あすこの地形は、辰喰の地形は面白いなと思ったことがあるのです。

平田　崩壊地名です。

納　　崩壊地名？

平田　昔、洪水などで抉られた所に竜喰・鳥喰・鶴喰などの地名があります。猿喰もあります。それを発表したら小野重朗先生から鳥に実際に食わせる民俗的な信仰があると噛みつかれました。

米原　柳田国男が書いていますね。

平田　喰：ハミという地名はハム・ハブ・噛みつくに由来すると思います。奄美大島のハブはハムの古い言葉でしょうね。波浮の港も同類でしょう。

福元　平田先生の馬の説明で、苙（おち）は「おろ」と読む。

平田　これは苙（おろ）です。原稿を送って校正に全然タッチしないもんですからこんなミスが出ました。

福元　八月に川内歴史資料館にある史料を見たのですが、馬の頭数なんかの統計が楪の下張りから出て来たものです。高江と久見崎と寄田のものです。慶応三年から明治三年ぐらいまでの年度ごとのものです。

平田　それは面白い。

福元　完全じゃないのですけど。、完全に揃っているところもあります。統計も判ります。牡牛・雌牛それから子牛。士族方・百姓方、そういう統計がずーっと掲げてある。もの凄く厳しく調べて札を渡したのですね。

平田　ふーん。

福元　きちんとした馬や牛の数を調べています。札を持っていないと馬や牛を買えない仕組みです。幕末の世の中が騒がしくなった頃に、移出を厳しく制限したのかなと思われます。それで明治の何年でしたかね。

平田　明治十七年。

福元　それ以前の統計ですね。売買も非常に厳しく、どこから買った、どこへ売ったともの凄く厳密な証明になっているのです。

高江には苙に関して苙元：オロンモトとか苙平：オロンヒラとかいう地名が牧の原にあります。苙というのは最初は豚をとじ込める場所と説明してあります。そして高江の苙は牧場で子馬が生まれますよね。年に１回か何回か子馬をつかまえるのですね。追い込む場所が苙。

村山　あすこに殿様湯というのがあったそうです。それで谷山から両棒：ジャンボを持って行ったそうです（笑い）。殿様ジャンボを食べながら苙に追い込んで、とり手を助けたそうです。

福元　牧のあった所を聞いたのですが、東郷にも苙元があった、と。それから長島にもあるということを聞きました。

平田　牧場には大抵苙があります。あれはどこですか、指宿とか新城あたりですか、オロゴメという子供たちがやる行事。

米原　喜入と垂水でやってますね。

平田　小学校の男の子は皆ほうり込まれて上級生からいじめられるのだそうです。新聞記者は楽しそうに記事を書いているけれども

やられる方はけ死ん目に逢うのだと（笑い）恨み骨髄に徹しているらしいです。オロゴメという行事の中にそのまゝ意味が残っているのじゃないでしょうか。駒を苙の中に追い込む行事の変形として。島津藩の場合は殿様が軍事訓練のつもりで家来を集めて馬をつかまえさせたのじゃないですかね。

福元　百姓たちは勢子として集められたのですね。

納　　馬じゃなくて牛の話ですが、出水郡に牡牛：コッテという集落があります。出水郡の、えーと。

平田　野田。

納　　コッテというのは万葉集あたりに、コットイという言葉が出て来る。特牛・特負牛にコトヒと振り仮名を振ってある。あすこは牛が沢山おったからなんでしょうか。

平田　山陰線にもコットイという駅があります。先日萩へ行ったのですが、山陰線というのは不便になりまして特急が朝１本下関を出るだけで、あとは普通列車です。萩に行くまで何本乗り換えましたかね。次から次に乗り換えなんです。そんな乗り方をして行ったのですが、向こうの人に笑われました。萩に来るには新幹線で小郡に来て、小郡からバスに乗った方が早い、と。山陰線を普通列車で乗り継いで来る客なんて珍しい（笑い）。特牛：コットイという駅があるのです。

納　　あすこは昔、北前船の寄港地で遊郭が沢山あったらしいです。

平田　あゝそうですか。角の港とかいう良港がある。コットイが出ましたので山陰線の話も出しました。

永田　私なんか子供の頃はコッテ牛と言った時は牡牛、ベブという時は雌牛だ、と言われました。あれは鹿児島だけのものかな。

米原　大体そう言いますよね、コッテと。

平田　鹿児島だけのことでしょうかね？

納　　大隅半島ではコッチと言いますね。

平田　それは、コットイが訛ってコッテ・コッチになったのでしょうね。他に？

上野　十二支のことで、子・丑・寅と書かれているこれは一月から始まるのですかね。そして子・丑で終わる。順番が二つばかり

ずれているのだけど、これは何か意味がありますか？

納　春・夏・秋・冬の季節に分けているものですか。

上野　１・２・３月が春。

平田　８月は中秋。

納　１１・１２・１月までが冬にみなしてありますね。２月は立春。

平田　２・３・４月が春、５・６・７月が夏、８・９・１０月が秋？

米原　１１月のこの「子」は生命がもえ始めるというようなことが書いてありますね。これが始まりかな。

平田　これは課題にしましょう。どなたか興味のある方は調べて下さい。

永田　播種に関係するのかな。

上野　そうすると、この暦でいうと冬で始まって冬で終わる。最初は冬、最後も冬。１１・１２月も冬、１月も冬。冬が前と後を占める。

平田　子・丑・寅が冬か？

（以下、録音なし）

地名研究会報

第６３号　平成１１年６月１３日

鹿児島地名研究会

Ⅰ.第６３回例会　平成１０年１２月６日　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・納　栄蔵・小山田　稔・大田照夫・川野雄一・小園公雄・小山　更・坂本　誠・鈴木　某・永坂芳彦・永田典男・西田秀人・平田信芳・松浪由安・三善喜一郎・村山謙一　（計１６名）

Ⅱ.『大日本地名辞書』読会　p.1739 ～ p.1740

［問題となった地名および事項］　日向の出現と位置づけ・筑紫富士・日向の語義・南林寺とナンデシ・○○番戸と○○番地

日向の出現と位置づけ

小園　畠山直顕はナオアキでもよいけど足利直冬はタダフユと言った方がよい。

平田　直義の子になるわけだな。

小園　そうです。あれですね。古事記の中に載っている筑紫国に四つの顔があったということ。その中で熊襲のことを建日別というとあるけど、釈紀には佐渡島のことだと書いてある。私は現在古事記を教えているのですけども、佐渡島ともいうことは付け加えませんでした。筑紫と言ったら九州全体を指したし、そして筑紫島を細分して肥前国・肥後国・豊前国・豊後国・日向国などという。いろいろ説がありますね。

平田　佐渡は誤解だと思うけど、建日別は四国じゃないの？（建依別と勘違い）

小園　建日別は熊襲のこと。四国はまた別の言い方がある。愛比売とか。これも四つの面ありと出て来る。

小山　この中に日向は入っていませんね。

平田　日向は入っていません。

小山　古事記の解釈では熊襲の中に入っているわけですか。

小園　肥国は建日向豊久志日泥別という。これに日向も入っている。全然知られていなかった。

小山　全然知られていなかったのですか。

小園　風土記にも日向のことは古事記にあるようなことが書いてありますが。

平田　筑紫国それから豊国、肥国でしょう。その南が熊襲国。そうすると、日向というのはそれに含まれていたことになる。日向国というのはなかったのだ、と。そして後になると日向国から薩摩国と大隅国が分かれて来ることになる。要するに宮崎県の境域と鹿児島県の境域というのは九州山脈の東南部だから、北九州とはちょっと違うということですね。

小園　日向（ヒムカ）と最初は呼ばれた。

そして風土記が出来たのが７１３年。風土記は日向が出来た経緯を景行天皇に結び付けています。だからそれ以前、日向というのは一体全体なんだったのか。日向国は筑紫七国の一つだと書いてありますね。この時未だ薩摩・大隅なし、と。７０２年の時点では。

平田　７０２年の時点では日向国はあるわけです。筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後の六国プラス日向で七国です。その日向から薩摩が分かれ、大隅が分かれて九国：九州になります。

小園　薩摩国が成立したのは７０２年とされていますが、薩摩国の成立ははっきりしないのですね。

平田　そうですね。

小園　唱更国：ハヤヒトノクニというのがあるから・・・

平田　その頃だろうとしている。

小園　その頃僻遠の土地を治めるに当たって夷人雑類というとらえ方をしている。例えばと東北地方の蝦夷と南九州の隼人。その後に薩摩国の成立になる。薩摩国の成立ははっきりせず、７０２年だろう、と。

平田　そのように理解されています。

筑紫富士

納　日向を含んだ九州七国が後に九国になるのですね。ちょっと話しが飛びますが開聞岳を話題にしていた時に、普通は薩摩富士とも言いますが、あれを筑紫富士と言い出したのです。筑紫富士と。

平田　開聞岳をですか？

納　それは何処にあっとかと聞いたら、桜島のことを筑紫富士とも言うぞと言うのです。

永田　それの出所はどこですか？

平田　出典は？

永田　出典とか由来とかは？

納　出典。そこまでは聞きませんでした。広い意味で言えば、鹿児島は九州。元々は筑紫国。それから出たのじゃないかなと想像はしていたのですが。

平田　筑紫富士というのは福岡県にありますよ。それは拡大解釈じゃないかな。

永田　あやしいな。

青柳　筑紫島というのは？

平田　九州の表現として筑紫島という場合はあります。

小山　鹿児島で筑紫とは言わんでしょう。なにせ僻陬の地ですから、南九州は。

青柳　筑紫を代表する島ということで説明があったような気がするのですけど。

小山　しかし上代は。

平田　桜島を筑紫富士と言ったというのは、聞いたことはない。

小山　それは考えられない。

納　私は、こう想像しとるのですよ。方言の中にこういう言葉があるのです。坂東「さ」京が「へ」、筑紫「に」ですね。どこどこに行く：目的地に行くことですね。関東地方が「どこさ行く」、京都を中心にした場合「どこへ行く」、九州の場合は「どこに行く」となります。鹿児島の場合は「どこに」じゃなくて「どこい」とか「どけ」と音韻が変化します。それから考えた場合、鹿児島も昔の筑紫国に入れてもいいのじゃないかなと。そのことから桜島の筑紫富士も成り立つなと考えたのですけど。

小山　昔というのはいつのことですか。

納　それは判らん。話した人の考えていたことは。

小山　それがでなければ。

納　文献的なことは、その人は言っていません。単なる俗説じゃないかなと、その時は思ったのですけどね。

小園　江戸時代・明治時代は薩摩とか鹿児島と明示しますからね。筑紫という表現が薩摩を指すというのはやはり聞いたことがない。

納　祝詞に出て来る「筑紫の小戸の橿原に」の筑紫、これは九州全体を指すと理解してたのですよ。

小園　えゝ、そうです。私たちも・・

納　その筑紫から桜島が筑紫富士になったのじゃなかろかいと。

小園　ある時点では「あなたはどこですか」と聞かれたら、「九州、鹿児島です」というようなものでしょうが。古事記や風土記その他の諸説の中で、九州の中の日向というふうに安麻呂が考えて作ったのじゃないかと思いますけどね。それと橿の原というのは、何も宮崎だけではないのです。

平田　173ﾍﾟｰｼﾞの２段目に出てきますが橘の小戸は今の筑紫国にあり、と。末吉の橿原という説をまだ知らないのですね。

日向の語義

青柳　２段目にいう「日向は即ち向陽の義にして」とありますが、どういうことですか。方向で言えば西ですか。

平田　東ということでしょう。

青柳　西ですよ。

平田　えっ？日に向かうということは、日が上って来る方向に向かっているのでは？

青柳　日が向かっている方向じゃなかったのですか。３段目にある「駒ならば日向の駒」にしても、西の岡にあるということもあって、要するに海外の方にあるということと、若いということからいうと、これはどうもおかしいなと思います。今まで書かれた本はいかにも東の方に日向が向いているみたいな感じで、そういう印象で書いているけど、実際は逆。

平田　あゝ、日向は日が向かっているから西と解釈する。

青柳　はい。だから全体がおかしいような気がするのですね。

平田　今までの解釈は日の出る方に向かうということなんだけど。

青柳　だけど方向が違うでしょう。日本全体から見たら日向は西の方にあるのに、まるで東にあるみたいな解釈をしている。

小園　そこまでは考えていなかったのじゃ

ないかな。

青柳　そうじゃなくて、われわれの誤解じゃないですか。

小園　古事記にも釈紀にもありますが、この国は直に扶桑に向く、と。扶桑というのは中国の故事なんですね。桑の間から日の光が真っ直ぐに入って来る、と。それで景行天皇もこの国は日が真っ直ぐこっちに入って来る。今後は日向と言えと、古事記には出ておったと理解してるのですけど。

平田　風土記もそういう地名説話を載せていたのでしょうけどね。

小園　このあたりが日向：ヒムカの言葉の発祥でしょうね。日向という言葉が出て来た、何か意味づけなきゃいかnわけですからね。

青柳　どっちにしても、なんというか。

小園　日に直に向かっている。光が入って来るのは日に向かっているわけだから。

青柳　日向から筑紫に向かうことは、西から東に行くということでしょう。そうでないと解釈出来ない。

小園　それはどこですか。

青柳　２段目のところです。

小園　神武天皇のところですか。

青柳　はい。イワレヒコノミコトと出て来ます。

小園　日向より筑紫国に。

青柳　日本の建国神話は西から東に向かって行くということでしょう。九州から大和へだったら西から東。

小園　ここではすなおに日向：ヒムカという地名のことと解釈したら。

青柳　行ったり来たりしているわけではないでしょう。

平田　神武東征ではイワレヒコが日向国を出発して北上し、まず筑紫に入るわけです。筑前にね。それから瀬戸内海を東にのぼって行く。

青柳　それは地名にこじつけた話です。南九州から北九州の方に行ったというのは、後から付けた話でしょう。言葉そのものから言えば日向の意味というのはやっぱり西ではないでしょうか。

小園　地図の位置からは西になるけど。

青柳　地図の位置とかいうのはわれわれが日本地図を見てからのことで、昔のひとがどういう地理観をしていたか、日本の国の形をどういうふうに見ていたかというのはわれわれは判らないのです。

小園　こちらは西だから日向は西に位置する

青柳　九州にしても南北に真っ直ぐ立っているような地図とか、だいぶ西に傾いたような地図もあるでしょう。真っ直ぐ立っているような地図はむしろ新しい地図で、古い地図というのは西に傾いているでしょう。

小園　そうですね。日は東から出て果てる方が西ですからおっしゃる通りに西の地であるのですけど、地名としては出る方向を指しているのではないでしょうか。

青柳　それは誤解じゃないかと思うのです。

誤解だというといろいろ説明されるものだから、ますます判らなくなる。

小山　結局、どういう解釈をするの。あなたの解釈を聞かせて下さい。

青柳　要するに日向というのは西のことだ。元々はそういう意味があるのではないかと思うのです。それをわれわれが誤解して、いかにも日が出て来る方向とか、日が当たる方向とか言っている。

小園　本当は西の方から東の方に向かっている。

平田　筑紫の中で、九州全体で考えたら日向は東の方ですよ。

青柳　昔の日向国：今の宮崎県だけでなく、熊本県：肥後国のことにしても建日向○○とあるわけでしょう。

平田　あゝこの場合も建日向、火の国がなくて。それも含まれているのじゃないかな。タケヒムカクシヒジの中に。

小園　風土記は肥後国をヒノミチシリと言っています。そして肥前国をヒノクニと言ったようです。景行天皇の時に火君一族がヒノミチシリの人々を討伐に使っていることが風土記には載っていますから。最初は大きな火の国という考え方があったかも知れませんね。ここは豊の国とか、ここは火の国というふうに。

平田　熊本・宮崎・鹿児島、これを全部ひっくるめた考え方というのはあったと思います。

小園　今みたいに行政として統一されていなかったのではないか。

青柳　言葉だけの意味では、日向はやっぱり「日が向かう」じゃないですか。日に向かう、どっちが正しいか判らないけど、日に向かうでは日を見る方向でしょうけど。日向は日が向かって行く方向じゃないでしょうか。

小園　扶桑の間からという中国の故事にもとづいて日向という国名が出て来た、と。

青柳　その説明が誤解してるのじゃないかと思うのです。扶桑は東の方向ですよ。扶桑は東の方向だけど、向陽と言ったら、やはり西。

平田　日が向かう、向陽ね。それは判る。

青柳　そうでないと、日向国全体が理解出来ない。

小園　当時においてはそれくらいの地理的感覚じゃなかったか、というのもあると思うのですよ。

青柳　いや、どうなのか、ですよ。

平田　それは判らんな。ただね、ヒムカからヒウガに変わったという音便はなかなか理解しにくいのですよ。ヒンガシからヒウガならば理解し易いのですけどね。というのはタムケ：手向からタウゲ・トウゲ：峠に変わったとされるのと同じだからです。ウ・ム相通ずる音便・転訛があるのかなと疑問に思っているからです。

小園　風土記・古事記・日本書紀などに日向：ヒムカ・ヒウガと出ていますから、当時の人たちは宮崎：南九州を日向国と理解しとったのは事実でしょうね。その語源をどうしてだろう

ということになると、昔の人の考え方にもとづかざるを得ない。

平田　宮崎県は昔から海岸部の方が主体だったでしょうから、人々が生活している所は東の方を向いている。西側は山脈ですから。

小園　私は学生にも言うのですけれども いつも太陽は日本全国のみんなに真っ直ぐ当たっているじゃないか。宮崎だけが直線的に太陽が当たるというのはおかしい話だというのです。でも地名となると、例えば薩摩も大隅も地名ですよ。そして「ツマ」という説もあります。そうすると、全国に「ツマ」はあるわけですよ。「隅っこ」はあるわけです。そう言った理論で言えば変なことになりますから、昔の人たちのいうことをそのまま受け取っていいのじゃないかと思います。

平田　他にありませんか。

三善　クシフル峯の前に「釈紀」とありますが、これは何ですか。

平田　釈日本紀の省略です。日本書紀の注釈書。

三善　釈は日本書紀の？

小園　解釈したもの。

平田　「釈日本紀」を略して釈紀。一流の学者たちがいろいろ研究しています。鎌倉時代にもそう言ったものがあります。

南林寺とナンデシ

納　最近、都城の鳥集忠男さんですかあの方が書いた『薩摩の恋歌』か（『南九州の恋歌』が正しい）、その中にショウゲンザン・ナンデシ（松原山南林寺）という寺の名前がある。南林寺にナンデシと振り仮名を振ってあるのです。鹿児島流の発音をすればラ行音はダ行音に変化するのが普通です。鹿児島流に言えば「リ」であれば「ヂ（ジ）」になるべきものを「デ」に書いてあるのです。向こう方面では鹿児島流の発音の仕方があるのだろうかと、それを教えて頂きたいと思って。

平田　さぁ、知りませんね。小山さん、どうですか。

小山　南林寺がナンデシですか。都城ですかあの人は？

納　その人は都城です。

小山　都城であれば鹿児島語は知らんと思いますよ。

納　あの辺では、土地の人は薩摩方言の範囲内だと言いますよ。

小山　ですけどね、明らかに違いますよ。曽於郡は違います。曽於郡から向うは違います。

納　鹿児島弁で「ヂ」となるべきところを「デ」と書いているのです。

小山　ひょっとしたら間違いかもしれませんよ。ただ伝承をまとめたものですから。

納　歌の文句をずーっと書いて、その中に「ナンデシ」という言葉が出て来るのですよ。鹿児島流では「ヂ」じゃないか。ヂとデを書き違ったのか、見間違いか、勘違いか。

小園　南林寺の「ジ」が問題なのですか。

納　ジじゃない。林を「デ」と仮名が振ってある。都城方面は「デ」というのかなと思って。

平田　さぁそれは判らないな。そのルビが正しいかどうかも判らんでしょう。

小山　正しいかも判らんし、正しくないかも判らん。

平田　寺：ジを寺：シと表現するのは、鹿児島ではよくありますが。

納　土地流で言えば慈眼寺：ジガンジ最近では慈眼寺：ジゲンジ。あれをジゲシと言いますからね。平松にある心岳寺をシンガクシ、隼人町では西光寺をセクシと言いますからね。

小山　その傾向はありますよ。例えば、１２時をジュウニシといいますからね。大体国分・隼人あたりからこっちはその傾向があるようです。

○○番戸・○○番地

平田　今私は七高出身者の出身地調べをしているのですが、住居表示で面白いことに気付きました。現在は、日本全国○○町○番○号になっていますが、それ以前は番地でした。その前は番戸、さらにそれ以前は何番屋敷と表現されていました。○○番屋敷→○○番戸→○○番地→○番○号、と変わって来ています。それぞれの本籍を見ていると、その移り変わりがちょうど明治から大正にかけてのころになるのです。九州ではほとんどが「番地」に変わっているのに、鹿児島・宮崎だけは「番戸」なんです。色分けすると、西南之役の影響がもろに地図の上に出て来ます。住居表示の変遷だけでも、西南之役の影響を見ることが出来、鹿児島・宮崎の両県は非常に行政整備が後れたのだなと感じます。もう一つ、番戸から番地に変わる時になかなか変わりにくかったのは先進地です。京都・大阪・名古屋、それに山口・長崎。これらは番戸が続いています。こう言ったものを徹底的に整理するのも面白いなと思いました。

西田　これは明治？

平田　ここら（番戸）あたりは壬申戸籍だろうと思うのです。

西田　番戸ですか。

小山　番屋敷ですか。

西田　番屋敷は封建時代でしょう。

小園　番屋敷は江戸時代の名残ですね。

西田　藩政時代ですよ。

平田　番戸あたりが壬申戸籍だと思う。

西田　番戸がね。

平田　だから一般的に知られていないのですね。番地に変わるのは恐らく大正になってからです。そういう移り変わりの中で鹿児島・宮崎は後れています。西南之役のの影響は大きかったのだなと、そんなことでも感じます。

小園　七高に出られる方はその町でも村でも優秀な方で資産家でもあったとおもうのです。それでは江戸時代はどうであったか。例えば、農地の台帳とかを見てみると、囎唹郡東襲山、後は東襲山村。大字があったかな、門と屋敷の

二つで通している。

西田　門と屋敷ですね。

小園　例えば霧島町の大田という所は駅から上の方なんだけど、あの辺は全部門と屋敷で区分してあります。それを「字」で当たっていくと一つの部落・地番が判って来るわけです。

平田　明治３０年代が鹿児島中学から鹿児島一中に変わる頃で、七高の１回生はまだ中学造士館や鹿児島中学出身です。鹿児島一中は、その後です。鹿児島県出身というのはそんなにいないのです。一学年に指折り数えるぐらい。日本全国から来ています。最初の頃鹿児島県で集まっているのは、鹿児島中学出身が、そうですね。

村山　鹿児島中学は１学年が２０人ぐらいですね。

平田　七高に入って来るのは２～３人。

村山　いや、鹿児島中学の話です。

平田　その次に目につくのが川内中学。

西田　川中ですね。

平田　加治木中学が一人とか川内中学が一人とか。そんなもんです。川辺中学出身でも加世田の人が多い。

小山　川内中学は一中の分校だったのでしょう。

平田　そうです。明治の頃は川内中学出身に優秀な人が多い。昔の中学校の歴史を洗い直すと面白いのが出て来ると思います

西田　日置郡は川内に行ってますね。

小山　そうでしょうね。学区があったのですかね。

西田　学区じゃないけど。

平田　日置郡からは、川内と川辺に分かれて入っています。鹿屋あたりの人が加治木中学に来ています。大口も加治木中学に来ています。

小山　鹿屋中学は新しいのですね。

平田　それは新しい。余計なことを話して、脇道にそれましたが。

納　何だったか憶えていないのですが、公式の文書で番戸と書いて書面を見たことがあります。

平田　鹿児島市あたりでも清水町辺りは番地に変わっていますが、この辺：新町はまだ番戸です。伊敷が番戸から番地に変わるのが、大正２年ぐらいです。

納　私が住んでいるのは武ですが、恐らく武が昭和３０年代に番地制になっているのです

平田　そんなに遅いですか。

納　３０年代。その時に割り振った地図を見たことがあります。全部番地で書いてあるのです。比べてみると、その通りの番地になっています。３０年代の前までが武の辺は番戸じゃなかったか、と思います。番戸というのは昔の門割制度を基にして番号をつけたのではと想像しています。

小山　昭和３０年代ですか？

納　えっ、明治３３年です。（笑い）

平田　鹿児島は明治の後半ですよ。西南之役の後遺症でしょうね。番地に変わるのが後れて

いた。大正になってやっと全国並みに追いつくという状態です。

納　私なんかが学校を卒業する前に履歴書を書かされましたが、履歴書にも番戸で書くのもありました。それから、士族・平民なども書いていました。

平田　前半はこれで終わり、ちょっと休憩しましょう。

タタラ地名とタタラ製鉄

永田典男

この前の例会の時に次は何か話してくれと言われて簡単に引き受けたわけですが、後から「ちょっしもた、数年後であればもちっと良かとが書けたのに」と思いかたでした。地名研究会ですので、地名とどのように結び付けて考えたらいいのだろうとだいぶ悩みました。

タタラと関係がある地名は、全国的に眺めると金糞岳とか金糞塚とか金糞平などがあります。これらは岐阜県や滋賀県にもあります。金糞平は岩手県の遠野市の近くにもあります。その他タタラと関係のある地名についての資料は、鹿児島大学人文学研究室と加世田市教育委員会がまとめた『加世田市の民具』の中に加世田市のものが載っています。ちょっとあげてみます。

「木屋」の付く地名、上木屋とか下木屋。

「藤」の付く地名、藤中島とか藤平。それから「赤」の付く地名、赤坂とか赤谷。これも鉄との関係だというようなことです。

「鉄」の付く地名では、鉄山があります。川辺町の鉄山。加世田市にも鉄山があります。遠い所では、青森県の八戸にもあります。「鍋」の付くものはあっちこっちに、鍋がひっくり返されたようにあります。加治木町の鍋倉、樋脇町にも鍋原という所があります。樋脇町の辺にもタタラ製鉄があったのじゃないかと思います。これについては研究の余地が残されております。

「金」の付く地名では、金具：カナグ。これも樋脇町のすぐ近くにあります。鍋原と金具。それから「藤葛」とか「金葛：カネフジ」。そういうような地名：タタラに関係のある地名を鹿児島県では全県的に調査したものはないようです。部分的にはあります。今後そういう方面からのアクセスも大事だと思います。ということはタタラについての研究があまり進んでいないことを示します。私はタタラについて興味があり、岩手県の方も回りましたし、出雲にも行きました。ついこの前は、北九州の八幡製鉄を訪ねました。そこではまだ未発表の極秘の物を見せてもらいました。

資料の９ﾍﾟｰｼﾞに書いておきましたが、資料として『鉄砲伝来前後』『鑪と刳舟』『鉄の社

会史』『たたら製鉄と日本刀の科学』などがあります。大沢正己という人は新日鉄小倉工場の顧問をされる方で、金属学的な研究：金相学的な研究をされる方です。そしてタタラ研究についてはタタラ学会というのが広島大学を中心に行われておってその会員も相当なもののようです。鹿児島ではタタラ会員というのをまだ聞いたことはありません。タタラについて研究をしているのは鹿大の新田先生と上田耕さん、それから小園先生ぐらいのもんじゃないかと思っているところです。小園先生は此処におられますので、私はどきどきしながら話しております。考古学の方では、掘って出る土器と穴。それでどきどきと言ってるわけです。そういうことの研究は非常に進んで来ているようですが、タタラ研究については全国的な規模ではまだ小学生か中学生の程度じゃないかなと思います。小園先生が今後これに頭を突っ込んで研究なさるということですので、私どもは手足となって仕事が出来るのではと期待しているところです。

一番後ろに地図があります。鹿児島県にはこんな地図はないようです。この前島根県に行きました。二日間ぐらい自動車を借りてあっちこっち回りました。安来：赤い印が付けてある一番右のもの。ここは安来節で有名な所、そしてタタラ製鉄との関係が非常に深い所です。安来のタタラ製鉄の展示館、タタラ製鉄に関心のある方は見に行く必要があると思います。

緑の印も付けておきましたが、羽内谷鉄穴流し跡とか陰地たたら跡、菅谷たたら跡、朝日たたら跡。全国的に有名なタタラで、行ってみたいと思ってましたがそこまでは足を伸ばすことは出来ませんでした。いつかは行ってみようと思っています。

実際に行ったのが松江の辺り、宍道湖の辺りそれと赤印を３つ付けておりますが、神庭荒神谷遺跡、賀茂岩倉遺跡、神原神社古墳、こういう所は詳細に見て来ました。島根で二日間見た資料などもそこに入れてあります。

本論とまではいきませんが、日本の古来の製鉄法：たたら編ということでちょっと話をします。日本の製鉄の開始は一説では５～６世紀、もう一つは弥生時代という説もあるようです。定説になっているのは２の（１）わが国の鉄の歴史の三つの段階、ということで説かれている①輸入鉄器の利用、②輸入鉄素材の加工、③自前の鉄資源による製鉄、この３段階があると思います。これについては斉藤先生や大沢先生など有名な方々が論じておられますから、大体そういうことだろうと思います。

大沢先生の資料は入れてありませんが、種子島総合開発センター編『鉄砲伝来前後』という本に載っております。

まず第一段階として中国や朝鮮半島は弥生時代の頃は既に鉄器文化が栄えていた。そのことについては一番最後に書いてある韓炳三（ハン

・ピョン・サム）『韓国の古代文化 ――金属文明の展開』。この人も述べているようです。そういうようなことで輸入鉄が日本にまず入って来た。その段階までは日本ではまだ製鉄は行われていなかった、とみてよい。日本は大陸から入って来た鉄の使い方のノーハウだけは、まず学んだだろう。朝鮮半島を経て北九州から中国地方、それから日本各地という流れが一つあっただろう。また鉄砲伝来前後には、まず種子島に入って来て、それから日本全国へ伝わって行ったのじゃないかという説もあります。いろんな系統の流れがあったかも知れんけれども、日本の製鉄の全般的傾向はそういうことだったと思います。

自前の鉄の原料になるのは砂鉄ですが、鉄の原料の99ﾊﾟｰｾﾝﾄが輸入鉄だそうです。それを加工するのが日本の鉄工業界ということになっております。そして、後漢書・魏志の記事、日本書紀の記述、中世・近世諸書の話というふうに書いてありますので読んで頂ければ判ると思います。

種子島の島袋盛俊という人がずっと以前に『藩政時代に於ける製鉄業』という本で増田とか現和のことを書いておられます。それ以上には発展してないようです。また鹿児島県全体のことは、今後研究の必要があると思います。

３幕末の頃の日本、に入ります。砂鉄でない厳鉄：岩の鉄の利用については、まだこれを行うことは出来なかった、と。①・②に示した有名な学者の記録を見れば当時の学者がこの程度だったのかなということを感じます。いわゆる外圧によって大砲の必要性に気付き、溶鉱炉：高炉を造る必要に迫られる段階に至るまで、厳鉄も一部分ありましたがほとんどが砂鉄による製鉄だったと考えられています。ただ砂鉄の取り方については古くから、日本は日本なりに相当研究が行われて来たと思います。

Ⅱたたらの語源については、踏鞴→鑪→高殿→鈩、と移り変わりあったようです。最初の足踏みの「踏鞴」という字は、後で当て込んだ字じゃないかと考えております。日本書紀にはそのような記述があります。神代編：２の(2)に「真名鹿の皮を全剥(うつはぎ)はぎて天羽鞴(あまのはふき)につくる」と出て来ますし、鎌倉時代でも江戸時代でも文字が違って出て来ますが、ふいごを中心とした表現です。しかし現代では、「たたら」は製鉄技術そのものを指していると思います。

たたら製鉄の第１段階の定義では「粘土で築いた炉に、原料を砂鉄にし、燃料に木炭を用い、送風動力に鞴を使用して、きわめて純度の高い鉄類を生産する日本古来の製鉄技術」であるとのことですが、種子島の製鉄とか出雲の製鉄とか、諸処方々によって製鉄の違いが出て来ているようです。 14ﾍﾟｰｼﾞに「古代製鉄法の復元」という記事が出ております。種子島の鉄砲館職員と一般市民ら５人が参加して作ったというようなことです。そこで問題点ですが、「内側を粘土で厚さ5ｾﾝﾁに塗った」、どうして

製鉄をするのに内側に粘土を塗ったのか、という問題点が一つ。「不純物が分離し易いように砕いた貝殻を」とあります。砕いた貝殻を入れたのか入れなかったのかという問題点も出て来る。そして「灰の中から鉄の塊２個約 1キロを取り出し製鉄に成功した」とあります。この取り出した鉄の名前を何というのか。恐らくこれを「けら」というのだろうと思います。金扁に母と書いてケラと読みます。

私は 1キロ取り出したというのを計算してみました。明治時代の場合に木炭13.5トン、砂鉄を12.8トンを使って、ケラという鉄が3.6トン生産されたといわれます。この古代製鉄法の復元という記事で計算してみますと、木炭を15トン入れた時に砂鉄を18トン。それから鉄が 3トン出来た。その上に貝殻を1.2トンも入れたことになります。実験の段階ですが、これは効率の悪い製鉄だなと考えています。

もとに帰って「たたら」の語源。冶金のふるさとヒッタイトから製鉄法をタタールが学んだことに語源があるのじゃないだろうかと言われています。またトルコのアンカラ博物館に古い黄金製の鞘に入ったすばらしい剣があります。その剣の鉄は人工の鉄じゃなくて隕鉄だと書いてあります。隕鉄を簡単に説明しておきましたが、小さな天体があってそれが流星となって落ちて来たものです。その真ん中に隕鉄があってそとの方が石鉄、それから石質隕石というふうになっています。日本で一番大きな石質隕石は岩手県の気仙隕石とよばれるもので1850kgの隕石が落ちて来ているようです。石質隕石、これは石の混ざった隕石です。それから田上隕鉄というのが日本最大の隕鉄で、147kg。1885年、滋賀県で発見されたものです。

日本歴史大辞典では、たたらについて下に掲げたことが書いてあります。その精錬法に二つの方法があり、①銑鉄を製する銑押法、②主として鋼を製するけら押法、としています。そこで文献と考古学の両面から眺めてみました。

１記紀・出雲風土記とたたら、と書いてあるところ。出雲風土記は熊本県の細川氏に伝わっておる写本で、慶長元年(1596)、これが写されて出雲の方に行った。そもそもは奈良時代の 713年に書かれたものです。他の風土記は散逸してしまったり、またあっても不完全だったりですが、出雲風土記だけは完全な写本として残っていたわけです。その写しが島根県安来市の和鋼博物館に展示されています。後に付けた地図に鉄の産地が判るようにしておきました。仁多郡横田郷：現在の横田町。陰地たたらと羽内谷鉄穴流しの中間のところに横田というのがあります。出雲国横田、そこの砂鉄のことが書いてあります。８世紀初めの頃、砂鉄を使っての製鉄がこの地で行われていたことが判ります。また鉄に関する記述が他に二つあります。「三刀屋川に入る」と書いたものです。三刀屋川というのは赤い印を付けた神庭荒神谷遺跡・賀茂岩倉遺跡・神原神社古墳、これらの所をのぼって行ったところに三刀屋があります。三刀屋で松本１号墳やらいろんな古墳を見ましたが、山の中のたたらまでは見ることは出来ませんでした。

和鋼博物館の資料によって模型図を載せておきました。古代製鉄の模型図。こんなのが飾ってありました。これは６世紀後半のものだと思います。ここでは種子島のように貝殻は投入していなかったようです。

たたら製鉄では、鉄穴流しをして砂鉄がとれる所、木炭がよくとれる所、良質の粘土がある所。これは焼いていくうちに粘土が熔けて媒熔剤の役目をする：粘土が貝殻の役目をしているわけです。良質の粘土が出雲では取れたので、貝殻を投入しない方法で製鉄が行われたのだろうと考えます。

種子島の場合の貝殻を入れるということは石灰石を入れるのと同じですので、石灰分を投入して媒熔剤としての役目を果たさせて製鉄したことになります。島根の方のやり方と種子島のやり方は若干違うのじゃないかとも思います。そこのところは今後小園先生が研究なさるでしょうからお任せしたいと思います。

砂鉄には二通りあるそうです。真砂鉄と赤目砂鉄。真砂鉄というのは磁鉄鉱で花崗岩を母岩としてそれが風化したもの。赤目砂鉄というのは閃緑岩を母胎として出来たものです。最初は赤目砂鉄を入れ、しばらくしてから真砂鉄を入れ、後はずーっと真砂鉄を入れて製鉄するのだそうです。赤目砂鉄だけで製鉄すると、銑（ずく）というのが出来、真砂鉄だけですると「けら」というのが出来るということです。

その次、5ﾍﾟｰｼﾞ・6ﾍﾟｰｼﾞの金屋子神話。これは後の方に神話が書いてあります。これは島根県のものをそっくり持って来ました。１行目に播磨国岩鍋：今の兵庫県と岡山県の境からこの神様は来た、と。神様の名は金山彦天目一個神とよばれる。後の方の５～６行に「山や川でとれる砂鉄と、鉄を溶かすのに必要な大量の木炭と、炉を作るのにふさわしい粘土がなくてはなりません。」この三つの条件が出雲では整っておったということで、この金屋子神が出雲の方に飛んで行ったという話のようです。そして桂の木の根元のところに鎮座したというようなことです。

たたら遺跡を探そうとすれば、山の中にある祠を探すか、桂の木を探すか、それから鉄滓：鉄の屑、これがずーっとある所を調べるとよいことになる。そういう所を調べれば、まだ鹿児島県内に相当数あるのじゃないかと思います。そして鉄滓の中に貝殻でも混ざっとったような場合は貝殻を投入した製鉄法というようなことが判ると考えます。

鉄穴流しの風景。鉄穴流しというのはご存知のように風化しかけた山の所を切り崩して、それを川に流し、図にあるように仕切ったりしながら比重の大きい砂鉄だけ取り、あとは川に

流すやり方のことです。その用具は、種々あるようです。

たたら炭の調達・採算。たたら炭というのが相当いるわけです。たたら炭を作る木というのは、なら・まき・ぶな・くぬぎ。場所によっては松・栗などです。大体60年ぐらいになる木を伐採して炭にする。炭に作ったものをたたら窯の所に持って行くわけですから、これも相当な労力が必要です。砂鉄や炭は馬や人力で運ぶわけですが砂鉄は７里、炭は３里以内採算の取れる距離のようです。だから、たたら窯を作る所は川があって、そして山林が付近にあるというのが条件のようです。山林も一旦伐れば60年先でないと使いものにならないので鉄穴・たたら製鉄の場合は一旦伐ったならばそこを移動したというようなことですから広い範囲内でそういうことを繰り返す必要があったと思います。

たたらの地下構造。これは近世以降の構造じゃないかと考えます。下の方に炉の断面図が書いてあり、湯路穴（ゆろあな）というのがあります。これは湯が出るのじゃなくて、鉄滓の流れ口です。鉄滓を流して残った鉄の塊は「けら」といわれるものです。そして何トンもある「けら」を大きなハンマーで叩き割ると、その中から鋼が出て来る。鉄があり、鋼があり、そして中にきらきらした玉鋼というものが出て来る。その玉鋼でもって日本では刀を造っておった、と。

私は一遍聞かれたことがある。「たたら」というのは現在ありますか、と。どうお考えですか。実はあるんですよ。昭和８年の頃、靖国たたらという最後のものが出来て、昭和２０年に終戦で壊されてなくなった。ところが日本刀を造っている人たちが 250人以上おり、日本刀を造る材料がなくなって来た。そういうことから日本刀剣保存協会というのが、古来のたたらを作らなければならん、自分たちで作ろうということで「日刀保たたら」を現在作っているそうです。まだそこを見に行っていませんが、いつか見に行こうと考えております。

何％・何％と縦書きに書いてあるものは、鉄に関する本を見て「表」にしたものです。真ん中の工業上の分類のところ、工業で使うのは鋼だけだそうです。下の地鉄・生鉄というのは、鍛冶屋が使っている鋼です。刀の場合も地鉄・生鉄を中に入れると粘り気が出て、刀が曲がっても折れないものが出来る。折れない刀はこの地鉄と生鉄を中に入れてあるからです。

銑鉄を鋼にするような場合には、火に入れていわゆる焼きを入れる。鉄というのは炭素と鉄の化合物だから、火に入れて焼いて叩くと炭素分が脱けてしまう。そして炭素量がだんだん少ない鋼になって行く。あんまり焼き過ぎると固くなりすぎて折れ易いということになるようです。焼きが入るというのは、そこに書いてあるように「高温にした炭素鋼を急冷する時の現象」。急冷する時は水に入れたり油に入れて冷やすのだそうです。そうすると、鋼になって

強くなり、研いだ時に切れるようになる。刀の場合はマクリ法というのがあって、両サイド：脇の所に鋼を入れる。そして先と後と背中の方に鋼を入れ、真ん中の方に生鉄という粘り気のある軟らかい鉄を入れるのだそうです。そうして鍛造していくと、切れる・折れない・曲がらない刀が出来るのだそうです。

普通、刃物は焼いてそしてまた焼き戻しというのをやります。包丁なんかでも焼きすぎると刃がぽろぽろ折れる、と。だから焼き戻しというのをやるのだそうですが、あんまり焼き戻すとまた駄目だということです。そこのところは私は鍛冶屋じゃありませんので、よくは判りません。鍛冶屋の使う名前は包丁鉄といわれるそうです。

鉄穴流しは川を使ってやりますから、下流の田畑に影響があるので農繁期をはずしてやったと言われております。

社会史の立場からいうと、種子島では山を切り崩して砂鉄を取ったりしたからその跡が畑になり、水を引いたりして人々が潤って来たというようなことが載せられているようです。ところが出雲やその他の所ではいろんな業者が入って来て農民が搾取され、社会的な悲劇を生んだといわれています。社会史の立場から攻めて行くのも一つの方法じゃないかと思います。後10分です。10分ぐらいは残しとかにゃいかんでしょう。以上で終わります。

〔質疑応答〕

平田　どうも有り難うございました。そうですね。地名研究会ですので、今後タタラ地名を拾われる方があるかも知れません。最初に話された製鉄に関係する地名を、復習の意味で板書して頂けませんか。

永田　そうですね、先程あまり触れなかった製鉄と地名で「木屋（きや）」の付く地名があります。

三善　一字ですか？

永田　これにいろんなのが付くのです。木屋谷口とか上杉木屋とか樟脳木屋とか木屋谷迫。これが内山田にはあるそうです。それから津貫・万世にもあるようです。「藤」の付くもの。藤中島・藤平・下藤ケ迫・上藤ケ迫・藤山打越とか。それも多いと思います。亀藤、これは内山田にあります。津貫には亀藤とか藤葛・藤川・藤山。こういうのがタタラがあった付近の地名のようです。それから「崩（くずれ）」

平田　崩ですか。それは崩壊地名では？

永田　赤崩なんかというのがありますから、崩というのもあるようです。それから「釜」、崩釜とか崩釜土、後六釜、素釜、炭屋釜瀬戸、釜土坂。これは鍛冶との関係でしょうけど、鍋・鉄。金山がなくて「金」の付く所は鉄の意味ではないか、と思います。その他に「金糞」。これにはバケとか塚とか山が付く。それから、タタラの訛ったようなのもあるのじゃないでしょうか。そういうような地名を調べてみれば、鹿児島県も相当出て来るかも知れません。

平田　鍛冶・加治屋は関係ないですか？

永田　加治屋は同じですよね。もう一つこれに加治屋を加えて下さい。

平田　タタラ製鉄は鹿児島県では未整理のテーマですね。

納　地名は多いのですが、苗字で多々良というのを使った所があるんですね。

平田　多々良さんは多い。

納　私の知ってるのでは加治木町龍門司の下の所、あそこに多々良野という苗字があります。

永田　昔はそれに従事した人か、その地に居ってそれを名前にしたのか、いろんな関連がありそうですよね。

納　西田町の山形屋ストアの隣に、下多々良という焼酎屋があります。その少し向こうに行けば、この頃病院を開業した、あそこが下多々良じゃごわはんけ？

永田　何らかの関連は出て来ると思います。

平田　それはそうでしょうね。鍛冶屋の後は現在、○○鉄工所になってるはずですからね。鉄工所、鍛冶屋、そしてそれ以前はタタラ製鉄。ここに書いて貰った地名を小字から拾って現地を歩けば、タタラの手がかりが得られるはずですね。

永田　この神様は片目だそうです。目が悪いのだそうです。というのは火を見つめるからでしょう。

平田　神様は金屋子でしたか？

永田　金屋子神ですね。

平田　それから、目一個。メヒトツ、マヒトツですか？メヒトツノカミとかいう。

永田　マヒトツノカミ。

納　加世田鍛冶と言いますね。あれはこういうタタラとは？

永田　加世田もやっぱり関連が大いにあるのですよね。加世田、知覧。

大田　大口市青木の上の方に多々良石という所があります。祁答院町におられた市来家隆さんが調べられた所で、そこに随いて行ったことがあります。そこでは鉄滓は確認しませんでした。市来さんの話では祁答院町から蒲生に出る道、新留峠を越えて下って行くと、民家に入るか入らないかという所に田圃があります。そこで昔は鉄を取っておったのだということで場所は教えてもらいました。そこには大きな石がありましたが、今はないようです。また金糞ということで市来さんの家の縁側に並べてあったのを見せてもらったことがあります。そういうことで私も少々気にかけていました。

鶴田に薩摩町の方から流れて来る前川という川があります。求名の中福良という所の上流に搦（からげ）という所がありますが、その辺までその石（金糞？）を探ることが出来るのです。そしてその裏の方は浦川内川と言い、狩宿の方から鶴田に入って来ているのですが、その川では一つも見当たりません。先程樋脇町云々と言われましたが、市比野川でも鉄糞という石が流れているのです。

鶴田の大願寺に鉄を取り扱ったのではなかろうかと思う所があります。５８年に鉄柱を埋（い）ける時に出たのですが、砂に混じった塊があったのです。それを拾って帰ってはいます。磁石を近づけると鉄が付いて来るのです。宮之城の鍛冶屋に持って行って何かと聞きましたが、砂鉄ではないと言われました。時代の違いで判らないのかなと思っています。もし誰かが鶴田に来られた時、調べてもらいたいと思っています。

永田　鹿児島県の主な製鉄・鍛冶関連遺跡図というのを上田さんが作っているのです。それによると、厚地松山・後立・池之川内・内芫（おろ）・小坂ノ上・上茶筅松。火之河原もそうですね。上加世田・内布・鉄山・下木屋・ソウコウ寺。ソウコウ寺跡は発掘されています。尚古集成館反射炉：洋式高炉・鍋倉・二川・炭屋・内之浦・東谷・喜入浜・矢越浜・種子尾・建部・木山・桜山など。こういう所は大体発掘されています。しかし、こちらの方の資料にはあっても全国的な資料の中には鹿児島県は真っ白なんです。それだけ後れているということです。上田さんの地図でも大隅半島は鹿屋と志布志だけです。小園先生が佐多とかを言われますが、そこはまだ真っ白です。今から小園先生の働き場所が大いにあるところです。

大田　栗野町の幸田と薩摩町の間に鉄山という所があります。

平田　「鉄山」という地名は当然リストアップしなければね。

坂本　大隅半島では大根占町の山手の方に、半ケ石（はんがいし）という所があります。そこの北側の所に金山という所があるのです。山手入れの時に子供たちが金糞を拾って見せてくれました。昔は製鉄をしとった、と。その頃までは炭作りをしておりました。

今一つ、火之河原との関係だと思うのだけど坂之上からず一っと登った所にタタラ山という地名がある。私の家の山です。それから谷山の方に薬師堂という所があります。そこに、昔、金剛寺という寺があった。現在でもすばらしい薬師像；如来像があります。その寺の近くでは金糞が出るといわれています。相当古い話らしいです。もう一つは波之平の刀鍛冶関係だと思います。それから坂之上の西という所にやはり金糞が出ます。

村山　刀鍛冶が住んでいたのです。

小園　刀鍛冶が住んでいたこともありますが砂鉄は下の浜から持ち上げていた。水がないといけませんし、炭がないといけませんので山手に大体立地します。大隅半島の方はまだ上田さんも把握していないし、他にも沢山あります。ということは、中世・戦国時代はともに武器が必要なわけですから、鉄をどこからか持って来なければならない。・・以下録音不良。つなぎ部分の録音に失敗。64号までラジカセに欠陥があることに気付いていない。以下、要旨・・・そんな手づるはないから自分で作るしかない。大隅半島は花崗岩が基盤だから川には砂鉄が多

い。佐多町郡にも製鉄遺跡がある。種子島にも未知の製鉄遺跡が多い。

米原　2ページにあるタタールの語源の問題。これは当時、なんというか帰化人集団そういう流れの人たちが来たことから出て来たのですか？昔から山人ですね。山人的な集団が水神と鉄を持って来たという話がありますが、そういう学説とか研究はあるのですか。

永田　世界史の中に小アジアの方で制覇した話があります。後に中国の辺境に現れた騎馬民族と関係があるかも知れませんね。そして日本を征服した。

平田　今ヒッタイトの話が出て来ましたが、ヒッタイトは前２千年紀中頃にオリエント世界を統一する民族です。ヒッタイトが鉄器文化を持っていたことは高校世界史で教えることです。それから最近、始皇帝暗殺という映画が話題になっていますが、秦の始皇帝も鉄製武器を持っていたから中国を初めて統一出来たという視点があります。タイではスコターイ朝というのがあります。スコターイ朝が初めて国を創るのも鉄を持っていたからだと言われます。それからもう一つ大事なものに塩があります。塩と鉄を支配した者が古代では権力を握ったのです。古代から中世にかけては戦乱に明け暮れますから、鉄の産地を抑えた者が優位に立つのは当然のことです。鉄の歴史は大いに見直す必要があります。今日話に出たタタラとか金糞などの地名の分布図を作って、一つ一つを押さえていくことが必要です。タタラの分布はこうだ、金糞はこうだというようなことを遠慮なく発表して、みんなで分析していけばもっと違ったものが出て来るだろうと思います。

三善　それともう一つ・・（以下録音不良。要旨を紹介）・・串木野市周辺のタタラ地名を紹介します。冠嶽から阿母を通って樋脇に行く途中にタタラ地名があります。伊集院の神之川流域にもあります。また大量の木炭を必要とするので、樋脇では松山が禿げ山になったという話も残っています、と。（以下録音不良）

日本製鉄の歴史考　【たたら編】

永田典男

Ⅰ　日本の古来の製鉄法

1　古代からの製鉄の歴史

(1)　わが国の製鉄の歴史は古く、優に二千年に垂んとしている。　しかし主として利用されてきたものが国内産の砂鉄であるが、輸入鉄との関連で研究課題が多い。　製鉄がつとに古墳時代に始まっていいると推定されてはいる。

(2)　古い時代のことについては、まだよくわかっていないことが多い。　もちろん砂鉄の利用が多いが巌鉄の利用が全くなかったわけでわない。

(3)　一番はっきりしないのは、採鉱冶金と加工つまり鋳造ないし鍛造との関係である。　----（同一技能集団？－採取・熔解・加工）----

(4)　一つだけいい得ることは、その資源がわが国では古来ほとんど国内産の砂鉄であったということである。

2　古代・中世においても、国外から鉄の輸入がなかったわけではない。

(1)　わが国の鉄の歴史の三つの段階
----わが国の弥生時代中国・朝鮮半島は鉄の文明国になっている----

①　輸入鉄器の利用（大陸からの）
↓
②　輸入鉄素材の加工----「海を渡ってきた鉄」
↓
③　自前の鉄資源による製鉄----「知識・技術は大陸から」

(2)　『後漢書』の「辰韓伝」
「国、鉄を産す、濊・倭・馬韓並びに従いて之を市す。凡そ諸貿易皆鉄を以て貨となす」----鉄の交易が盛んであったことがうかがえる。

(3)　『魏志』の「東夷伝」----倭人の韓鉄採取の記事がみえる。

(4)　『日本書紀』や『続日本紀』----韓鍛冶や韓鉄師がいた記事がみえる。

(5)　中世末・近世初頭のいわゆる南蛮貿易時代の諸書----南蛮鉄献上の記事も散見しており、その製品も遺されている。
（わが国の製鉄史の全体から見るならば、いうに足らないほどのもの）

3　幕末の頃の日本

(1)　砂鉄でない巌鉄の利用については、まだよくこれを行うことはできなかった。

①　『和漢三才図会』　寺島良安＝浪花の医者・正徳三年（１７１３）
「按ずるに鉄と金銀と同根となすは非なり。　蓋し金・銀・銅・錫は皆岩石に附す。　鉄は独り土に襍生す」

②　『山相秘録』　佐藤信淵祖父不味軒の著校正　文政十年（１８２７）
「鉄は諸金中において別に一種の異物なり。　その仔細とは、諸金は皆必ず岩石の質の中に含んで生ず。　（中略）然るに此鉄は土砂の中に混じて生じて岩石中に生ぜざるを以て」の記事がある。

----【正徳。文政の頃には寺島良安、佐藤信淵ほどの博学、泰斗にしてすら巌鉄の存在を知らなかったようである】----

(2)　日本における製鉄の歴史は砂鉄の面から眺めるべきだ。

①　日本は火山国であって、花崗岩・安山岩の風化地域がすこぶる多い。砂鉄はそれを母岩としている。

②　砂鉱区の所在地はほとんど全国にわたっているが著名な鉄産地はとなるとまた限られてくる。

Ⅱ　「たたら」の語源

1　『日本書紀』が完成する（ＡＤ７２０）以前に「たたら」という呼び名は既にあって、後にその発音に合わせて漢字をあてはめたと考えられる。

2　『日本書紀』に「踏鞴（たたら）」の文字で表紀されている例がある。

(1)　「たたら」は足踏みの鞴（火力をあげるための送風装置）を指す意味であったと考えられる。

(2)　古代のふいごは文字の革偏が示すように革製であったらしい。
『日本書紀』神代編
「真名鹿の皮を全剝（うつはぎ）はぎて天羽鞴（あまのはぶき）につくる」

(3)　鎌倉時代になると「鑪（たたら）」の文字が登場する。
これは砂鉄を熔かして鉄を作る炉を指していたと考えられる。

(4)　江戸時代には「高殿」とかいた例もみられる。

①　製鉄炉やふいごなどを屋根で覆った建物を指すものと考えられる。
②　この他「００山たたら」のような呼びかたもある。　これは炉やふいごやそれを覆った建物だけでなく、職人やその家族の住宅をも含む、製製鉄に関連する諸施設全体を指した呼び名である。

(5)　現代
現代では「たたら製鉄」のように技術そのものを指す場合もある。

たたら製鉄

粘土で築いた炉に原料を砂鉄とし、燃料に木炭を用い送風動力に鞴を使用して、きわめて純度の高い鉄類を生産する日本古来の製鉄技術をいう。

3　「たたら」は部族の名「タタール」にその語源がある。

(1)　中央アジアで製鉄を最初に手がけたヒッタイト人から、その技術を受け継いだのがトルコ人で、そのなかでとりわけ製鉄技術にたけた部族の名「タタール」にその語源があるとする説である。

(2)　「タタール」に受け継がれた製鉄技術は南に下って、朝鮮半島から日本に伝えられとされ、この間に「タタール」が転じて「たたら」となったといわれている。

4 ----------鉄冶金のふるさと----------

ヒッタイト

・　紀元前二千年頃に小アジアのアナトリへ移住してきたアーリア系の民族で、ハッティを首都として紀元前十六世紀には小アジア、メソポタミア、シリアの各一部を征服した。

・　紀元前十三～十四世紀にはエジプトとアッシリアの間に大帝国を築いている。

・　この帝国は、きわめて高い文化とそれを支える豊富な鉱物資源に恵まれ、世界に先がけ鉄器がつくられた。

ヒッタイトの王墓

・　ヒッタイトのアラジャ・フオユク王墓から、紀元前二千三百年と推定される世界最古の鉄剣が発見された。

【トルコのアンカラ博物館所蔵】

a　黄金製の鞘に入った素晴らしい剣。

b　この鉄剣で注目されることは、その素材が人工によって作らたものではなく、自然界から得られた隕鉄であったことである

5　隕石の種類（外観の特長）

小さな天体

(1)　石質隕石

①　キ石、カンラン石を含む。

②　気仙隕石----日本一（１８５０kg）

(2)　石鉄隕石

①　石と鉄半分ずつ含んだもの。

(3)　隕　　鉄

①　鉄を主な成分とする。

②　田上隕鉄----日本最大（１４７kg）

〈１８８５年滋賀県で発見〉

Ⅲ　日本歴史大辞典にみる「たたら」

たたら　鑪

古来、出雲・石見・美作・備中・備後・安芸など、中国地方の山間で行なわれた砂鉄を原料とする和鉄製錬法をいう。

日本の鉄鉱業は近世に至まで鑪によるもので、明治中期までは、なお日本の産鉄量の六割までは中国地方の砂鉄より生産されたという。

鉄穴流（かんなながし）により採集した砂鉄は、鑪経営の鉄師(鉄山師)に売込まれる。

砂鉄は粘土で造った長方形の炉の中で、木炭と交互に投げ込まれ燃焼させて製鉄される。　この工程は３～４日を要し、これを一代（ひとよ）という。

この製錬に二法あり、

①　銑鉄を製する銑押（ずくおし）法

②　主として鋼を製する鋼押（けらおし）法

Ⅳ　神話と「たたら」・その歴史

1　記紀・出雲風土記と「たたら」

(1)　『出雲国風土記』に記された鉄生産』

「出雲国風土記」写本 ----　島根県安来市「和鋼博物館」展示

〈完全な形で残された第一級の歴史資料〉

「出雲国風土記」写本。

「出雲国風土記」写本。
仁多郡横田郷(現在の横田町)の砂鉄は良質で、様々な工具類を作るのに適したことが記されている。８世紀初めには製鉄がこの地で行われていたことがうかがえる。

①　仁多郡横田郷（現在の横田町）の砂鉄は良質で様々な工具類を作るのに適していたことが記されている。　８世紀初めには製鉄がこの地で行われていたことがうかがえる。

②　鉄に関連する記述があるのは飯石郡波多郷の条

「波多小川源は郡家の西南二十四里なる志許山より出で、北に流れて須佐川に入る。鉄あり」。

「飯石小川。源は郡家の正東方一十二里なる佐久禮山より出で、北に流れて三刀屋川に入る。　鉄あり」。

(2)　『古代製鉄炉模型』----島根県瑞穂町今佐山遺跡の資料をもとに製作

①　古代製鉄の模型　　②　同遺跡で発見された鉄滓（てつさい）

今佐屋山遺跡の調査データをもとに作られた古代製鉄の模型。

島根県瑞穂町の今佐屋山遺跡で見つかった鉄滓（てつさい）

2　金屋子神話と鉄人伝説

(1)　『金屋子神話』----《資料　①》

(2)　『神話の中の鉄人伝説』----《資料　②》

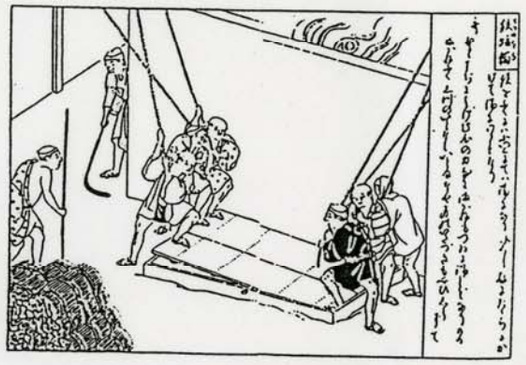
3　たたら製鉄の歴史

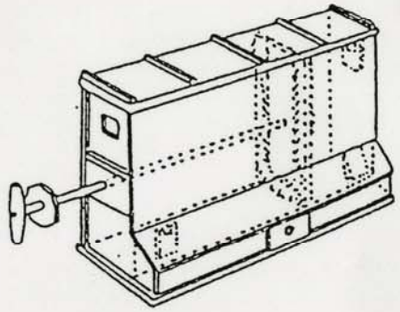
(1)　野たたら（露天）から高殿へ

(2)　吹子の変遷

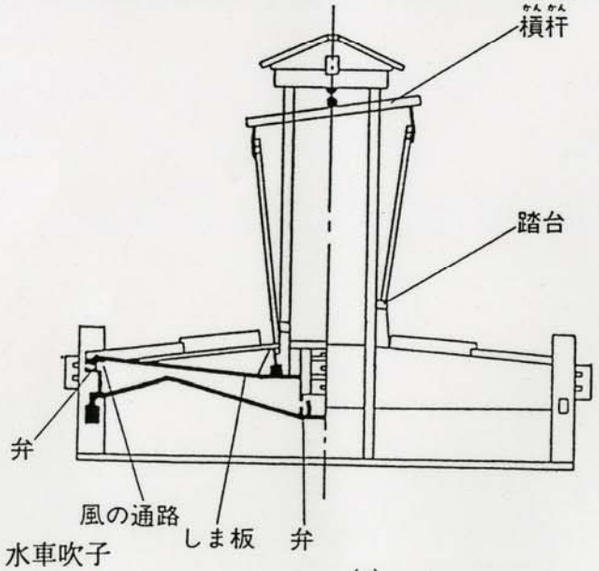
①　皮吹子

②　踏吹子　　③　吹差吹子





④　天秤吹子→「足踏み式天秤ふいご」
----たたら製鉄に欠かせない安定した空気の確保----



⑤　水車吹子

(3)　砂鉄の採取　「鉄穴（かんな）掘り」から「鉄穴流しへ」

①　鉄穴流絵図----《安政年間の「鉄山記」にみる貴重な資料》

②　鉄穴流しの本場

鉄穴場（かなばい）の本場。鉄穴場の下手にあるので下場、あるいは本場という。大池、中池、乙池、樋と順次水洗いによって砂鉄を比重選鉱する。

(4)　鈩（たたら）炭の調達と採算

①　砂鉄から鋼への還元剤としての鈩炭
「なら」「まき」「ぶな」「くぬぎ」、場所によっては「松」「栗」

・　炭焼き風景

炭焼き風景（仁多郡仁多町）。

・　炭窯から「炭だち」で運搬

炭窯（がま）から取り出された鈩炭は、茅（かや）で編んだ「炭だち」という入れ物につめて、鈩場、あるいは車や馬の通る道まで人の背で運ばれました。

② 砂鉄の種類の巧みな使い分けと操業

「山砂鉄」----真砂鉄ー鍛押法（玉鋼を造るには純度の高い砂鉄・花崗岩を母岩とする）

赤目砂鉄ー銑押法（鋳物、包丁鉄の原料を造る砂鉄で閃緑岩を母岩とする）

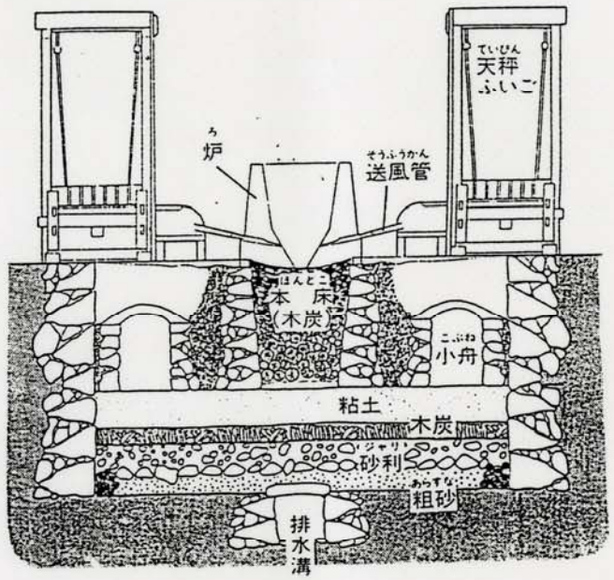
「川砂鉄」----《資料　⑤》

「浜砂鉄」

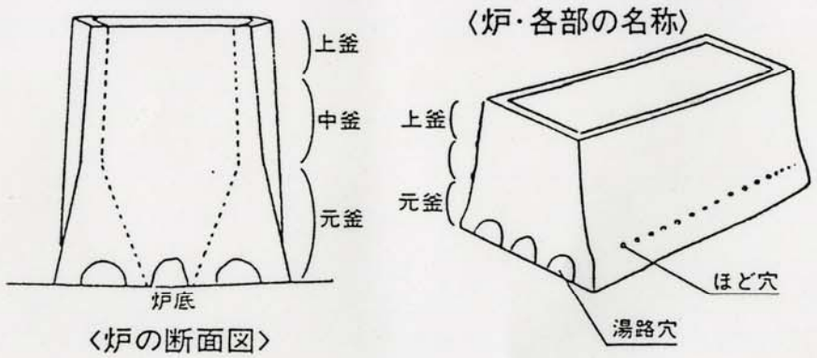
(5) 鈩の地下構造と築炉技術

① 鈩の地下構造

巨大にして、精巧な施設の地下構造は…



② 炉の断面図と炉・各部の名称



〈炉の断面図〉

(6) 鉄と炭素

----一般に鉄とよばれているものは鉄と炭素の化合物----

	炭素量	工業上の分類	鍛冶屋	備考
銑鉄（せんてつ）	6.7%〜2.1%（平均 3%）			古代たたら製鉄 ・真っ先に出来た。（湯） 鉄滓 ・融点の高い鍛や鉄・鉄滓（スラグ） 金母 →玉鋼 ・巨大な残滓をくだいて中に点在する鋼のちいさい固まりをとりだす。 ・日本刀にもつかわれた。
鋼（炭素鋼）	2.0%〜0.03）	最硬鋼（1.2%〜0.8%）	鋼（0.8%以上）	農具や刃物（切削性能） 「焼きの入る」 ・高温にした炭素鋼を急冷すると焼きの入る現象がおき刃物の切れ味となる 包丁鉄
		硬鋼（0.8%〜0.5%）		
		半硬鋼（0.5%〜0.3%）		
		軟鋼（0.3%〜0.15%）	地鉄・生鉄（0.8〜0.03%）	
		極軟鋼（0·15%〜0·03）		
鉄	0.03%以下			

(7) 日本独自の鋼をつくる技術

----鉄の摩訶不思議な性質は、すでに弥生時代からも知られ
日本オリジナルのものでなく大陸渡来のものと思われる----

① 鍛押（けらおし）法について

・ 記紀に登場する出雲地方の製鉄

・ 砂鉄から直接、鋼をつくる鍛押法

・ ３昼夜、７０時間の操業

② 銑押（ずくおし）法のついて

・ 銑鉄をつくる銑押法----赤目砂鉄がてきする（閃緑岩を母岩）

・ ４日間の操業でできた銑押法

4 「たたら」の発達の考古学的・金相学的研究

(1) 日本列島の製鉄炉の出現と遺跡の編年とその系譜

(2) 古墳後期〜平安時代の製鉄遺跡の分布

(3) 光学顕微鏡とＣＭＡ（Computer Aided X-ray Micro Analyzer)駆使研究

(4) 媒溶剤とその利用

① たたら製鉄の媒溶剤 ---- 炉材（粘土）・炉壁の溶蝕
〈本釜土は大切である、粉鉄（砂鉄）がいかによくても、本釜土が悪ければ鉄はできない。 釜土は良く吟味して使わなければならない〉 ---- 『鉄山必要記事』

「たたら製鉄とは砂鉄中のチタン分を鉄滓に移行させて、鉄分だけをとる仕事である」といえる。 チタン（TiO_2）除去
・貝殻入れる方法もある----砂鉄中の不純物の濃縮除去

② 現代の高炉製鉄の媒溶剤 ----- 石灰石

5 鉄鋌（輸入半製品）を使っての鉄の加工から自まえの製鉄へ（P1-2）

(1) 西国の鉄・東国の鉄（資料 別表）

(2) 鋳造鉄斧破片の部位と再加工品（資料 別表）

(3) 種子島の「たたら製鉄」

(4) 鹿児島の製鉄遺跡

6 製鉄の近代化

(1) 高炉製鉄への貢献

(2) 土着技術の近代化

V 参考文献

鉄砲伝来前後 種子島総合開発センター編 有斐閣
鑪と刳舟 石塚尊俊著 慶友社
鉄の社会史 斉藤 潔著 雄山閣
たたら製鉄と日本刀の科学 鈴木卓夫著 雄山閣
鉄の民俗史・鉄の考古学 窪田蔵郎著 雄山閣
古代出雲と風土記の世界 瀧音能之編 河出書房新社
西日本における初期鉄器製作・鉄生産に関する金相学的研究 大澤正己
考古学から見た、たたらの発達について 穴沢義功
鍛冶屋の教え かくまつとむ著 小学館文庫
韓国の古代文化（金属文明の展開） 韓炳三（ﾊﾝ･ﾋｮﾝ･ｻﾑ）
鹿児島県の製鉄遺跡調査の現状と課題 上田 耕 （鹿大史学会発表H10.2/7）
ｅｔｃ，

金屋子神社の本社

島根県広瀬町-----古代製鉄「たたら吹き」の盛んだった土地

① 戦国時代は、鉄の生産力を背景に中国地方で強大な勢力を誇った尼子氏の居城があった。
② 伝承によると、この金屋子神（金山彦天目一個神）は、播磨の国・岩鍋から白鷺に乗ってやってきた。 舞い降りた場所は、西比田黒田（現・島根県能義郡広瀬町西比田）の森の、大きな桂の木の梢だったといわれている。
「たたら」と「桂の木」

和鋼博物館

島根県安来市-----奥出雲では、古くから鈩による製鉄が盛んで、江戸時代から明治時代にかけて、全国の鉄生産高の過半数をこの地で占めていたといわれている。（鉄や鋼→安来港→日本各地へ）

① その後幾多の変遷を経て安来は特殊鋼の産地（日立金属）として世界に名を知られるようになった。
② 和鋼博物館は伝統的な鈩によって玉鋼の製造方法から特殊鋼の生産にいたるまで豊富な資料や模型、さらにはキャラクターロボットやハイビジョンなどで解説、紹介している。
③ また展示物のうち、天秤ふいごをはじめとする鈩関係用具２５０点は国の重要有形民俗文化財にも指定されている。
④ 安来市は民謡「安来節」街であり、発祥の地として有名である。

『出雲には神話や伝承の舞台とされる場所が数多くのこされている。これらの神話・伝承を歴史的事実と混同することは厳につつしまなければならないことだが、出雲を歩いているとそうした神話や伝承の世界がよりリアリティーをもってせまってくるから不思議である。』
-----瀧音能之-----

VI 資料 砂鉄の採取用具

1 吹子

(1) 差し鞴（ふいご）と小型の鍛冶道具

2 鉄穴流し用具 -----「鉄穴場」で用いる

(1) 柾鍬（まさぐわ） ----- 立木や雑草を取り除く、表土をはぐ。

(2) 打鍬 ----- 風化した母岩を打鍬という長い柄のついたつるはしのようなもので切り崩し、足下の水流の中へおとす。（穴夫）

(3) えぶり----- 軽い砂や粘土分だけが下流に流れるように水面をならす。

(4) 洗鍬 ----- 砂と混じっている砂鉄かき上たりして重い砂鉄だけが特定の場所に沈殿させる作業をする。（洗子・流夫・砂子）

(5) 征鍬（まさくわ）
『千駄祝』 ----- この方法で採取される砂鉄の量は現在と比べると比較にならないほど少なかった。 当時、採取量が１シーズンで３万貫（約１１２ｔ）つまり馬１頭に３０貫積んで千頭で輸送する、その量を越えると千駄祝いをする習慣があった。

3 川砂鉄採取用具

《江戸時代にもかなり利用されていた川砂鉄、鉄穴流しが姿を消すとともに少なくなった採取量》

(1) ジャリカキ----- 金網でできた鍬のような形のジャリカキで小石を取り除く。

(2) ジョレン ----- 次に川底の砂をかき集めた後、流れに対して直角に交叉する土手状の高まりをつくる。

(3) すき ----- 次にすきと呼ばれる雪かき用スコップのような木製の大きな鋤で、下流から上流に向って川底の砂鉄をすき取る。

(4) 川舟 ----- この砂鉄は近くに浮かぶ川舟へと集められる。

(5) 洗い舟（小鉄舟）----- その後、岸辺にすえられた洗い舟（小鉄舟）へ運ばれる。

(6) ヒシャク ----- 洗い舟では川の水をヒシャクで砂鉄に注ぎ、砂をさらに分離するための洗い流しが行われる。

・「鉄穴流しの方法」の制限
　鉄穴流しの方法はその流水が下流の農業用水に悪影響を及ぼすとして作業は秋の彼岸から春の彼岸までと制限されていた。

・「川砂鉄の採取の方法」
　コストも低く、１年を通して採取でき、江戸時代にもかなり利用されていた。
・「昭和４５年・水質汚濁防止法成立」
　古来からの鉄穴流しは姿を消し、これとともにかっては１日１ｔも採取できたといわれる川砂鉄も現在では少量であるといわれている。

4　運搬用具・計量用具

(1) 『こがねおいこ』----- 古くは中国地方では砂鉄を小鉄（こがね）（粉鉄）と呼んでいた。　この小鉄の運搬には普通、牛馬が使用されていたが、それ以外に「こがねおいこ」という運搬具で人力によって行われることがあった。
　「小鉄七里に炭三里」

(2) 『こがねます』
① 「鉄山必要記事」　天明４年
「荷駄の重目凡そ三拾貫を壹駄と定ムリナリ、伯州日野郡計は升にて計る也。納升弐斗四升を以壹駄と定るなり。」

② 「鉄山記」
「鉄山記」に描かれている鉄穴師諸道具之図の中に、「コガネマス」がある。

日本最古の鉄製冠

京都の椿井大塚山古墳
〝卑弥呼の鏡〟に副葬

日本最古と確認された椿井大塚山古墳から出土した鉄製冠　＝24日午後、京大文学部博物館

〝卑弥呼の鏡〟といわれる三角縁神獣鏡の大量出土で知られる椿井（つばい）大塚山古墳（京都府相楽郡山城町、三世紀末）の出土遺物を調査していた京都大学文学部考古学教室（小野山節教授）は二十四日、これまで甲（よろい）と考えられていた鉄製品が、日本最古の鉄製冠だったことが分かった、と発表した。

（４面に関連記事）

日本の冠の歴史は五世紀後半に始まるとされるが、それより百五十年以上も古く、鉄製は東アジアでも出土例がない。

同教室では、同古墳の被葬者がかぶっていたと推定。冠を飾る花弁形の立ち飾りが中国の神仙思想における神の冠に類似しているため、冠は中国から伝わったもので、神仙思想が既に当時の日本に入っていたことを示すものとしている。

三角縁神獣鏡は、卑弥呼が中国・魏の王から贈られたとして邪馬台国畿内説の有力根拠になっているが、その説のきっかけとなったのが同古墳。宗教色を添えた権力者の持ち物とみられる冠が同じ古墳から出たことで、邪馬台国論争にさらに拍車が掛かりそう。

同教室は昭和二十八年に同古墳を調査。竪穴式石室から三角縁神獣鏡や鉄剣などの副葬品が出土した。今回、改めて調べ、これまで甲の肩部分かとみられていたものが、破片をつなぎ合わせ復元したところ、鉄製冠と判明。

冠は約四分の三が残存。下方に向けて小さくなった円筒の上に、七枚の花弁形の立ち飾りが帯金で付いていた。全体の高さは二十三㌢で円筒部分の周囲は上部が七〇・三㌢で底部が四九・五㌢。金張りや文様などはなかった。このような鉄製冠は、日本だけではなく東アジア全体をみても類似の出土例がない。

H4.12.25

南日本新聞

中世の製鉄炉遺構？

宮之城町 松尾城跡 県内では初の出土

薩摩郡宮之城町教育委員会が発掘調査を進めていた同町虎居、宗功寺公園内の松尾城跡から、中世のものとみられる製鉄炉かかじ炉の遺構が見つかった。二十二日現地調査した鹿児島大学教養部の新田栄治教授（考古学専攻）は「この種の中世の遺構が発見されたのは鹿児島県内では初めてで、歴史的にも重要」としている。

調査は町道新設工事を前に実施。道路新設にかかる約三百六十平方㍍を今月十二日から二週間の予定で発掘している。

見つかったのは長さ約二・八㍍、幅約一㍍の細長い遺構一つと、周囲に石を並べた直径約〇・五㍍の丸型の遺構四基。製鉄炉かかじ炉かはっきりしないがいずれも炉の底の部分らしい。

周辺から鉄分を含んだ鉄さい（鉄くず）なども多く出土した。

同町教委は江戸中期の歴史書「宮之城記」に「鍛冶石神氏」の記述があることなどから十四世紀末から十六世紀までの間の遺構とみている。当時宮之城を支配していた松尾城の渋谷氏の下に、農具か武器を作る製鉄なり、かじなりの集団がいた可能性が大きい。

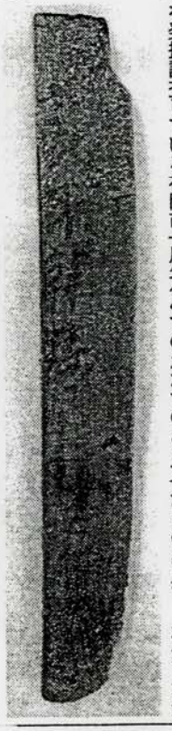
新田教授は「南九州ではかなり以前から製鉄なり、かじなり行われていたと思うが具体的に遺構が発見されたのは初めてだ。隣の畑地などからも同様の遺構が発見されるのではないか」と語っている。

南日本新聞 H.10

木簡に「鉄」の文字

福岡で出土 7世紀末の荷札か

福岡市西区の元岡遺跡群教育委員会は二十九日、「壬辰年（みずのえたつのとし）」を発掘調査している福岡市



福岡市西区の元岡遺跡群から出土した木簡

韓鐵（鉄）」と記された荷札とみられる木簡が出土した、と発表した。

出土層が奈良時代より前の地層のため市教委は壬辰年は六九二年である可能性が高く、鉄に関する木簡だとみている。

市教委によると七世紀終わりころは、北部九州で製鉄が本格化する時期。木簡の出土した場所からはほぼ同時代の製鉄遺構が発見されており、同地方の製鉄技術の状況を知るうえで重要な手掛かりになりそうだ。

木簡は、左端の三分の一が欠損しており、現状は長さ二一・八㌢、幅三㌢、厚さ五㍉。先端は丸く、頭部にえぐり込みが入っており、形式から荷札用の木簡とみられる。川の埋没部分からの出土で、水分で木質が保護されたため保存状態は良好。ヒノキらしい木材に墨で書かれた七文字のうち五文字が読み取れた。

市教委は「韓鉄という文字からの推測だが、鍛冶（かじ）集団が鉄製品につけた荷札で、どこかから現場に送られてきたものとも考えられる」と話している。

南日本新聞 H.10.10.31

古代製鉄法を復元

西之表市の鉄砲館前庭で三十一日、市民らが砂鉄を原料にした「たたら製鉄」に成功した。種子島の古来の製鉄技術を復元しよう、と挑戦。苦労の末にできた約一キロの鉄に歓声をあげた。

砂鉄6キロから鉄塊1キロ

火入れから約5時間後にノロが流れ出し、製鉄に成功

西之表市民ら

鉄づくりは鉄砲館職員や学校の先生、一般市民ら十五人が参加。内側を粘土で厚さ約五㌢に塗った直径約三十㌢、高さ約三十五㌢のオイル缶を三個積み重ねた簡易溶鉱炉を使った。これに炭を入れ着火。製鉄実験に成功している大分県の中津工業高校と電話で情報交換しながらの挑戦となった。

「空炊きに約二時間、本だき約一時間」の予定が、空炊きが長引き、電気掃除機で二カ所から送風するなど悪戦苦闘。約三時間後によようやく「溶鉱炉」の煙が無色透明になり温度も一五〇〇度に達し、本炊きが始まった。木炭と同市下石寺で採取した砂鉄、不純物が分離しやすいように砕いた貝殻を二分おきに約三十回入れた。火入れから五時間後、ようやく下部から真っ赤に溶けたどろどろのノロ（鉄かす）が流れ出た。やきもきしていた参加者は思わず拍手。

それから三十分後、灰の中から鉄の塊二個約一キロを取り出し、製鉄に成功した。使った砂鉄は約六キロ、木炭は約五十キロ、貝殻約四百㌘だった。

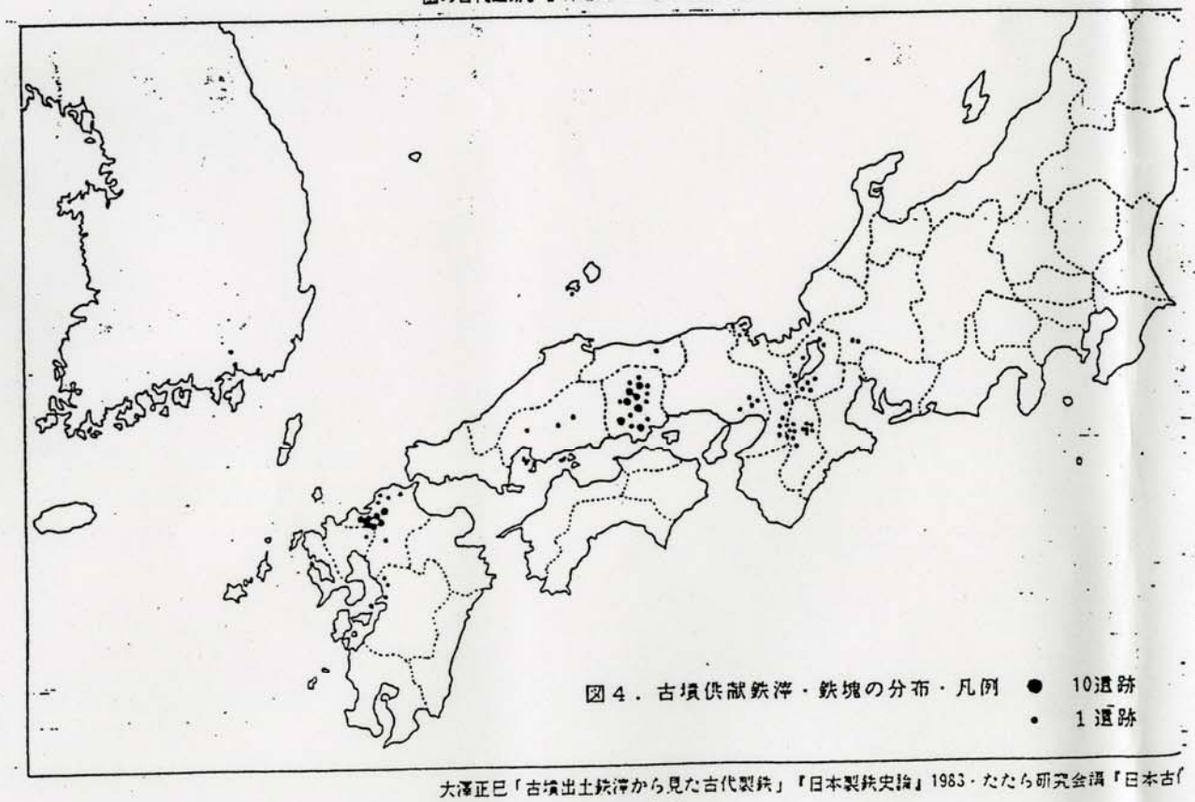
鉄砲館の鮫嶋安豊館長は「空炊きに時間がかかったが、歩留まりもよく大成功」とニコニコ。

今夏の種子島鉄砲祭りで再度、古代たたら製鉄を実演する。また、子どもたちに製鉄体験してもらう「アイアンスクール」も六月下旬に開く。

今夏、鉄砲祭りで再現

図　朝鮮半島から列島への鉄文化の流れ（鉄廷・供献鉄滓）

瀬見治『東アジアの初期鉄器文化』1982・東潮「鉄鋌の基礎的研究」1987・東潮・田中俊明『韓国の古代遺跡』Ⅰ新羅編1988などを元に作成



大澤正巳「古墳出土鉄滓から見た古代製鉄」『日本製鉄史論』1983・たたら研究会講『日本古代の鉄生産』1991などを元に作成

表　日本古代の製鉄遺跡の編年と系譜関係

凡例：鍛冶址＝（鍛）／製鉄遺跡名－炉形式（箱Ⅰ・竪Ⅱ）／―― 系譜関係強：---- 画　期／★は鉄鋌造址共伴例

地域	東日本					西日本			
地方	東北北部	東北南部	関東	北陸	中部 東海	近畿	中国 山陰	四国 山陽	九州
年代									
100 (A.D)						扇谷（鍛）			赤井手（鍛） 安武深田（鍛
200			岩井安町（鍛		※【『魏志』「東夷伝弁辰条」「国出鉄、韓・濊・倭、皆従取之」】286年			門前池前（鍛	二子塚（鍛）
300			沖塚（鍛） 千代南原（鍛 山崎山（鍛）			中海道（鍛） 小戸（鍛）			博多59次（鍛 博多36次（鍛 松木（鍛）
400		南小泉（鍛） 山王（鍛） 永作（鍛）	尻替（鍛） 中山（鍛） 武田西塙（鍛	石川条里（鍛 曽根（鍛） 北野（鍛）	土田（鍛） 吉田奥（鍛） 法海寺（鍛）	芝原（鍛） 大県（鍛） 南郷（鍛） 市留（鍛）	長瀬高浜（鍛 岩吉（鍛）	津寺（鍛） 窪木薬師（鍛 大成（鍛） 出作（鍛）	長野A（鍛） 潤峰（製鍛滓
500		正直A（鍛）	雷沢海道間（鍛） 中道（鍛） 武田石高（鍛 谷中島（鍛）	供献鉄滓 2例 勅使（鍛） 長屋（鍛）	供献鉄滓 2例 市道（鍛） 北田（鍛） 下舞台（鍛）	供献鉄滓40例 古橋 Ⅰa 遠所J Ⅰa	供献鉄滓 7例 羽森第3Ⅰy 今佐屋山Ⅰa	供献鉄滓83例 総社千引Ⅰy 小丸 Ⅰy 鉄塊 Ⅰ?	供献鉄滓80例 柏原M16Ⅰy 瀬戸 Ⅰ?
600		向田E Ⅰc	市場台（鍛） 三ケ尻西Ⅰc 大六天 Ⅰa	柿原 ? 蓮代寺4 ?	石附 ?	金屋 Ⅰa 源内峠 Ⅰc 木瓜原 Ⅰb	玉ノ宮DⅡb	大蔵池南Ⅰa 緑山 Ⅰa 古池奥 Ⅰy	コノリ池Ⅰ? 松丸F Ⅰb 池田 Ⅰb
700		洞山D Ⅰc 柏木 Ⅱa 武井B Ⅰc 向田D Ⅰc 向田A Ⅱa 長瀬 Ⅰz	上郷深田Ⅰc 宮後原 Ⅱa 二重山 Ⅱa 清水西 Ⅱa 東台 Ⅱa 宮脇 Ⅱa	南大閤山ⅡⅠd 安田 Ⅰd 石太郎CⅠd 赤坂CⅠd 藤畑 Ⅰd2	狩山戸 Ⅰc	野路小野山Ⅰc 西下野 Ⅰb 黒部 Ⅰb	板屋Ⅲ1Ⅰb	高本 Ⅰb 一貫西 Ⅰb キナザコⅠb 須内 Ⅰb	藤原 Ⅰb 敷町 Ⅰb 野方塚原Ⅰb 八熊 Ⅰb 大原D Ⅰb 門田 Ⅰb
800		大船迫 Ⅰz ★山田AⅠz ★向田AⅡa 向田F Ⅰz 横山C Ⅱb ★大船迫AⅠ	★花前ⅡⅡa ★大山ⅡⅡa ★台耕地ⅡⅡa ★押沼KⅡa	居村E Ⅰd2 小杉丸山Ⅰd2 椎土 Ⅰd2 ★上野南ⅡⅠb? 南大閤山ⅡⅡb			玉ノ宮DⅠⅠb	石生天皇Ⅰb	丸ケ谷 Ⅰb 大藤1号ⅡⅡd
900	李沢 ⅡⅡe 寒川Ⅱ ⅡⅡe 大館野 ⅡⅡe2 大平 ⅡⅡe 山ノ内ⅢⅡⅡe3 上村 ⅡⅡe3 鬼沼沢 ⅡⅡe 李沢 ⅡⅡe	★猪倉BⅠz	菅ノ沢 ⅡⅡa 多摩246 ⅡⅡa 台耕地 ⅡⅡa 蒲見北 ⅡⅡa	石太郎GⅡb 大入C ⅡⅡb 貝木山BⅡⅡb 貝木山CⅡⅡb	岸 Ⅱ? 清水 ⅡⅡc 松原 ⅡⅡc				大原D Ⅰb 湯ケ浦 ⅡⅡa 内野原田ⅡⅡd
1000	竜毛沢館ⅡⅡe 十二林 ⅡⅡe3 はりま館ⅡⅡe3? 白長根館Ⅱ?		有馬条里ⅡⅡc 稲荷屋敷ⅡⅡc 伊勢崎東ⅡⅡa2		★金山Ⅰx				祝子 ⅡⅡd
1051									

図　古墳後期～飛鳥時代の製鉄遺跡の分布（発掘調査済み）

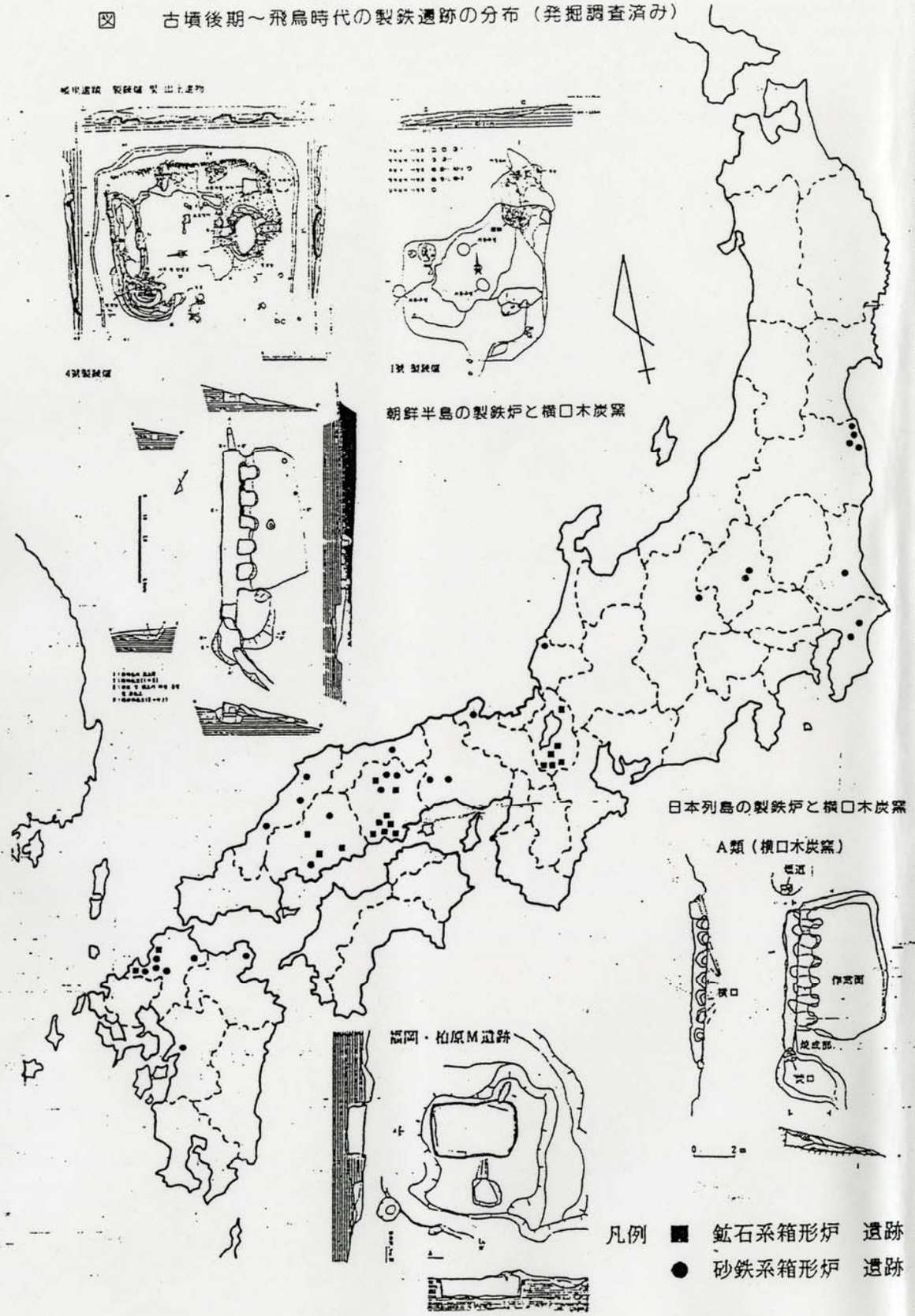
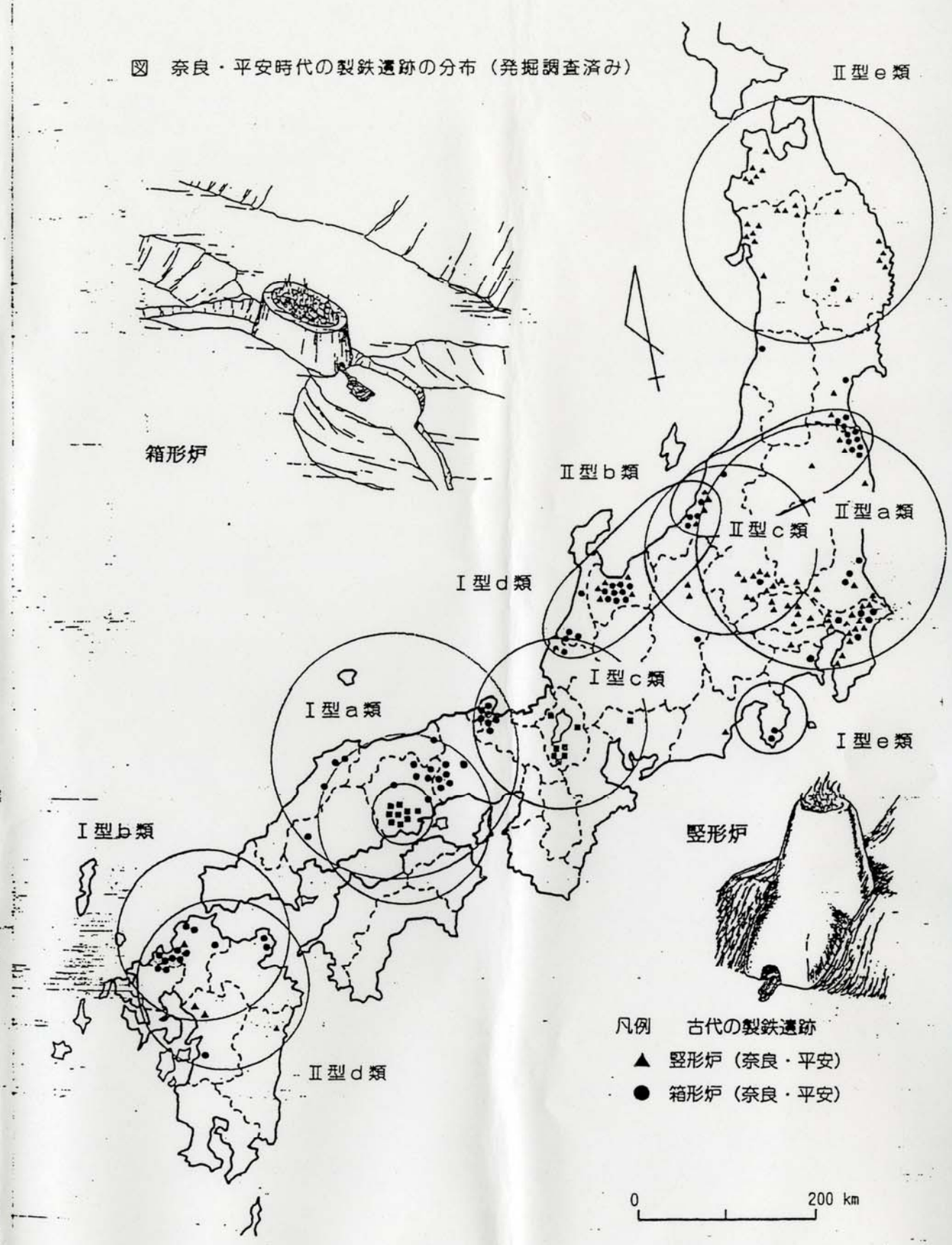
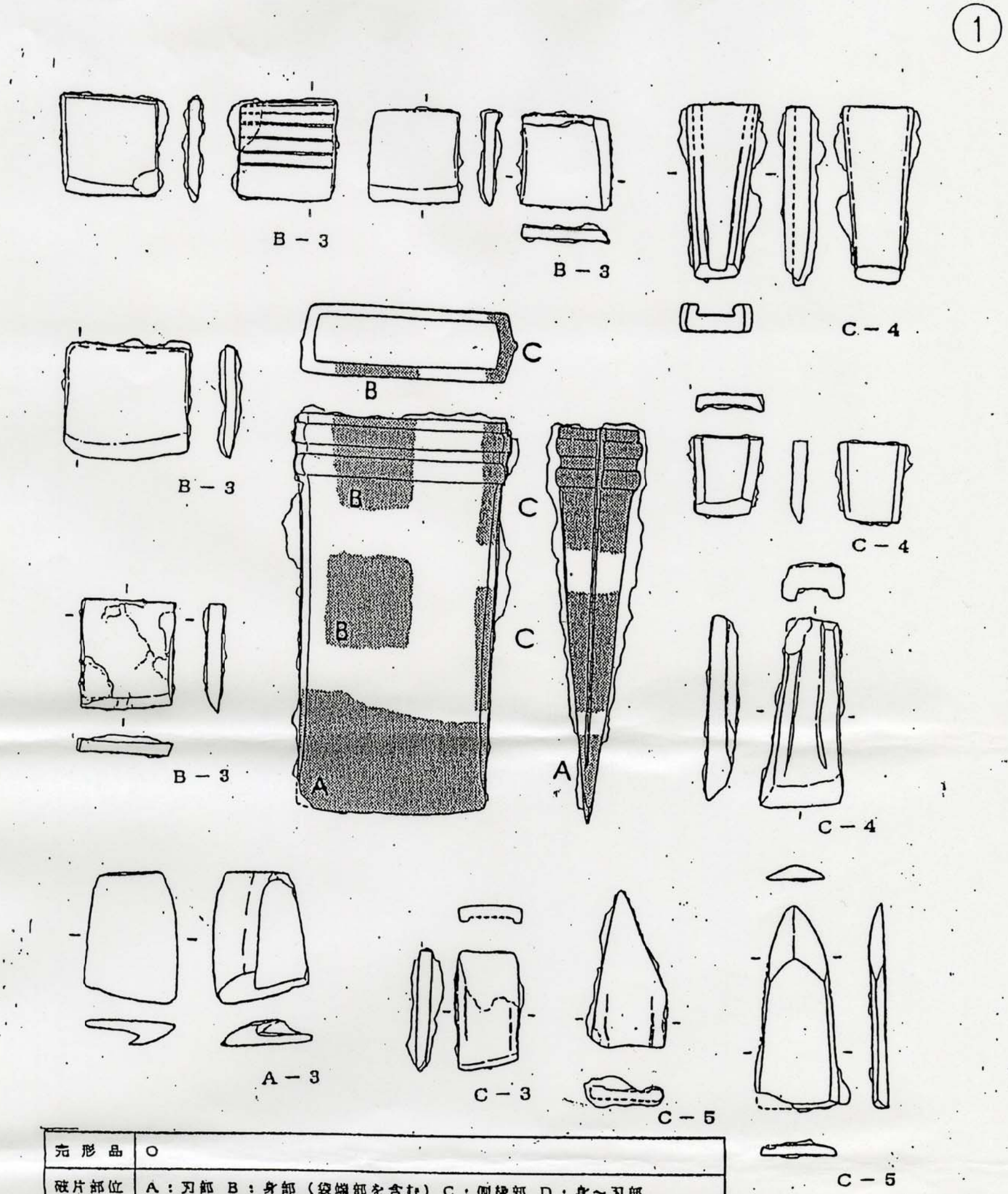


図　奈良・平安時代の製鉄遺跡の分布（発掘調査済み）





完形品	○
破片部位	A：刃部 B：身部（袋端部を含む） C：側縁部 D：身～刃部 E：側縁～刃部 F：その他（不明を含む）
機能	0：加工なし 1：周縁に加工あり 2：両刃斧 3：片刃斧 4：鑿 5：鋸・刀子状 6：その他

村上恭通氏作図

Fig.1 鋳造鉄斧破片の部位と再加工品（縮尺 1/2）

可鍛鋳鉄(Malleable cast iron)

KANAYAGO

金屋子神話

かなやごしんわ

能義郡広瀬町西比田、金屋子神社に
伝えられる製鉄と鍛冶の神々の神話。

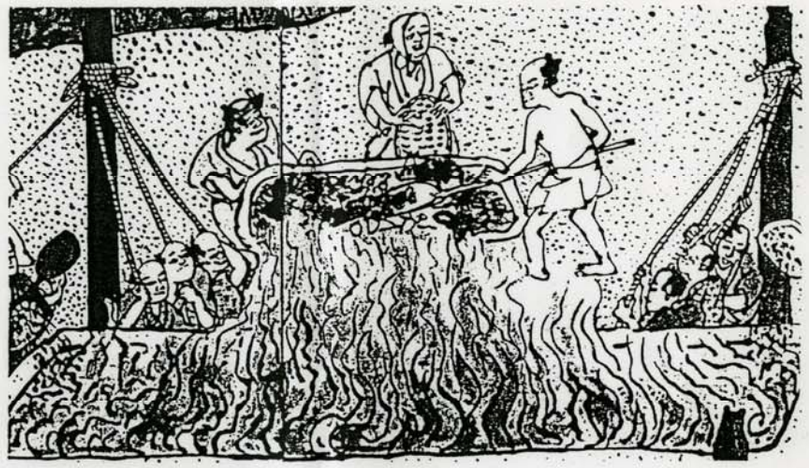
大昔のある年の夏のことです。播磨の国岩鍋（今の兵庫県と岡山県との境）という山の谷あいにある村あたりいったいは、何日も雨がふらず、太陽が毎日ぎらぎらと大地をこがす日が続きました。村人たちは、このままでは川の水も干あがってしまい、田畑の作物もすべて枯れてしまうと、山に集まって雨が降るよう天の神に祈ることにしました。

村人たちは、奥深い谷川の岩かげのふちで、まわりを清めて火をたき、村おさが岩に向かって手を合わせ、呪文を唱えていっしょうけんめい神に祈ると、不思議にも空にはにわかに雲がわきおこり、大つぶの雨がふってきました。「雨だ、雨だ。」、「これで畑の作物も枯れずにすむ」、村びとたちは雨にぬれながら、鉦や太鼓をたたいてよろこびの踊りをおどり始めました。

たかぶる雨乞いの祭りのなかで村おさは、自分のこころにひらめいた神に、「私たちの願いを、このようにかなえてくださったあなたは、いったいどなたさまなのか教えて下さい。」と、感謝の気持ちをこめて聞きました。

神は、「わたしは、金山彦天目一個神ともいう金屋子の神です。生き物に生命をよみがえらせたり、田畑の作物を豊かにみのらせるためには、水は最も大切なものの一つです。私は、この地ではさまざまな人びとの幸せをまもるために雨を降らせましたが、これからは遠く西の方へいき、そこで鉄を吹き、道具をつくることを多くの人に教えなければなりません。」といって、白鷺にのって天空高くに飛び立ちました。

金屋子神は、出雲の国の上空までやってきました。そして空から鉄づくりに最も適した地をさがしました。昔から『たたら』と言い伝えられてきた鉄づくりには、山や川でとれる砂鉄と、鉄をとかすのに必要な大量の木炭と、炉をつくるのにふさわしい粘土がなくてはなりません。金屋子神は、その三つの条件をかねそなえた地として能義郡西比田を選びました。そして、西比田黒田の森の桂の木に降り立ちました。



金屋子神を最初に見つけたのは、山に犬を何匹もつれて猟に来ていた、安部正重という人でした。犬たちは、白鷺のからだから放たれる神の光明（ひかり）をみて、身をちぢめて吠えています。正重は、犬たちをなだめて神におそるおそる問いかけました。「あなたはこの地に何をしに来られたのですか。」と。すると神は正重に、「われは金屋子の神なり。このところに住いして、『たたら』を仕立て、鉄（かね）を吹くわざを広むべし」と告げ、自らも神としてその仕事がうまくいくよう協力することを約束しました。

天然の桂の木（かつらのき）
桂と椿の巨木。昔の製鉄地跡であることを物語る。

神からのお告げをつつしんで受けた正重は、近くに住む長田兵部朝日長者にこのことを伝え、ふたりはまず神がおりた桂の木のわきに金屋子神のお宮を建てることから仕事をはじめました。そして、安部正重はその宮の神主に、また長田兵部朝日長者は、これからつくる『たたら』の村下（技師長）をつとめることになりました。

『たたら』の高殿（施設）の建設には、金屋子神をとりまくおぜいの神々が天から地上に来てかかわったと伝えられています。

建設現場に最初にあらわれたのは、なんとおどろくことに七五人の子供の神々です。子供の神々は、まず七五種類の仕事に必要な道具をつくりました。始めは自分たちが村下となって土地を整備したり、杉の木を伐って『ふいご』をつくったりして、建設の総指揮にあたりました。

一方、朝日長者は山に入り砂鉄と炭を集めています。高殿では炉がつくられ、そのまわりには、建物の中心となるたいせつな六本の大きな柱が建てられ、その柱を金屋子神をはじめ、木の神、日の神、月の神が、東西南北の方向を分担して守っています。

このほか屋根を火災から守る神、炉に風を送る風の神、風を送る『ふいご』などさまざまな道具をつかさどる神々、また、『たたら』には、数ぞえきれないほどおおぜいの神々が参加し、協力しています。

金屋子神社「奥の宮」（明治から昭和初期）も杜の木の下にまつられている。

金屋子神は、奥出雲一帯に次々とたくさんの『たたら』の施設をつくりました。金屋子神がかかわると、どこの『たたら』でも質のすぐれた鉄が限りなく産みだされるので、金屋子神に対する信仰が、『たたら師』とよぶ、たたらで働く人たちのあいだにひろまっていきました。

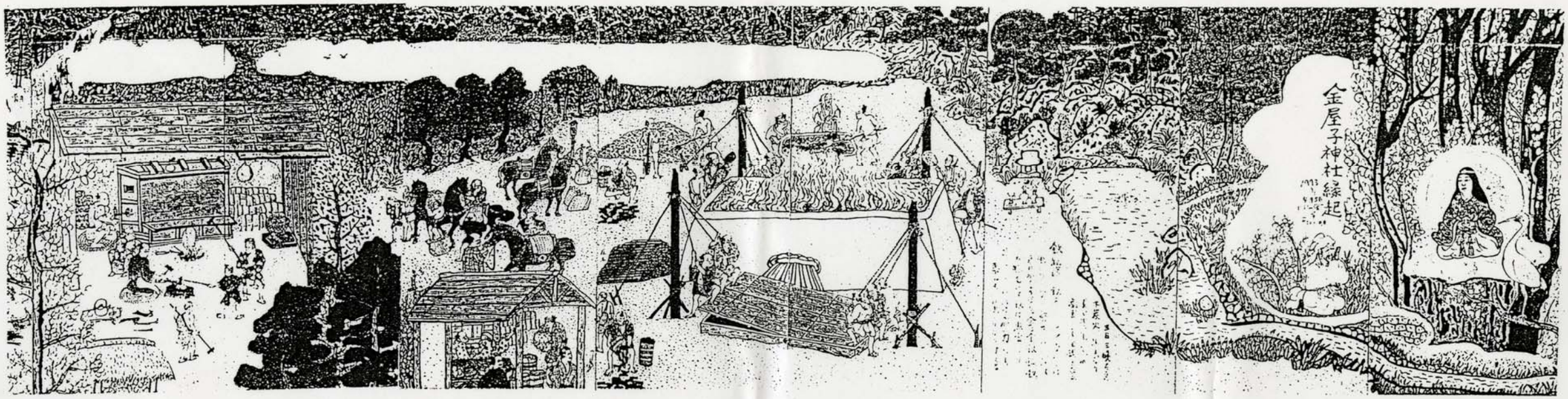
たたら師たちからは、「金屋子さんは、生産を高める女の神さまだ。」と信じる人も出てきました。また、人によっては「いや、金屋子さんは男の神さまだ。いつも炉の中の強い火の光りばかり見ているので、片目をとられてしまった。一つ目の神さまだ。」という人もあらわれました。

ある年の冬、金屋子神は村下をつれて『たたら』に向かう途中、高殿の前でとつぜんとびだしてきた犬に吠えられ、ふたりはなんとか逃げようとしましたが、びっくりした村下は、地面に落ちていた麻緒に、足の小指をとられて転んで死んでしまいました。

金屋子神は、集まってきた『たたら師』たちに、「村下の死骸は葬ってはいけません。そのまま高殿の元山柱にくくりつけて鉄を吹くのです。」と、教えました。

「たたら師」は、神のいわれるままにして仕事を続けると、いままで以上によい鉄を大量につくることができたということです。

金屋子神は、このように「死のけがれ」を好む不思議な性格の一面をもった神でもありました。



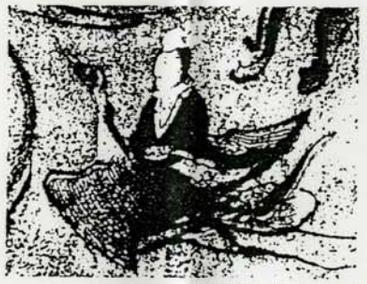
神話の中の鉄人伝説

鍛冶神や鉄人がやってきたはるかな道。

「弁慶の鐘を負う図」
鉄人伝説の弁慶。安芸・厳島神社絵馬(江戸時代)に描かれている。

世界の国ぐにの神話の歴史のなかでは、金屋子神のような製鉄の神は、金や銀や銅などを加工して溶かしたり、さまざまな製品に加工する神々、「鍛冶神」として位置づけられています。アフリカの「オグン」とよぶ火と金属の神は、大地で生活をはじめた人間たちを助けるために、天界から地上に降りて、人間に鉄鉱石から鉄を溶かし、鉄器をつくることを教えますが、オグンは、先に野に雨を降らせた金屋子神とは反対に、人間に鉄づくりを教えた後は、農神に変身します。

また、アフリカには、頭に大きな両刃の斧をつけた、「シャンゴ」という雷神(水神)がいますが、この神は頭の道具が示すように鍛冶にかかわる神とも言われ、もとは鍛冶神と農耕神が近しい関係にあったことを物語っています。


「乗鶴神」(じょうかくしん)

北朝鮮・高句麗古墳(6世紀)壁画。白鳥に乗って飛来した金屋子神話を思わせる。

ギリシャ神話の鍛冶神、「ヘファイストス」は、金屋子神とおなじように目や足の不自由な神でした。このように、日本の鍛冶神のはなしとよくにた神話は、このほかにも、ヨーロッパや、中国など、さまざまな国々に数多くみられますが、特に、北朝鮮で発見された6世紀の古墳の壁画には、白鳥(鶴)に乗った神を中心に、道具をつくる鍛冶神の姿が、青竜(水神)とともにあざやかに描かれており、日本とアジア大陸との文化の交流の歴史を色濃く物語っています。

世界の国々の鍛冶神話の性質をくわしく調べることによって、鉄をつくる技術や文化がどのようにして生れ、どのように伝え広まったかを知ることができます。

❖

はじめごろまでは、昔の物語や伝説は、一般の人びとには、歌舞伎で演じられたり、浮世絵などに描かれて伝えられてきました。

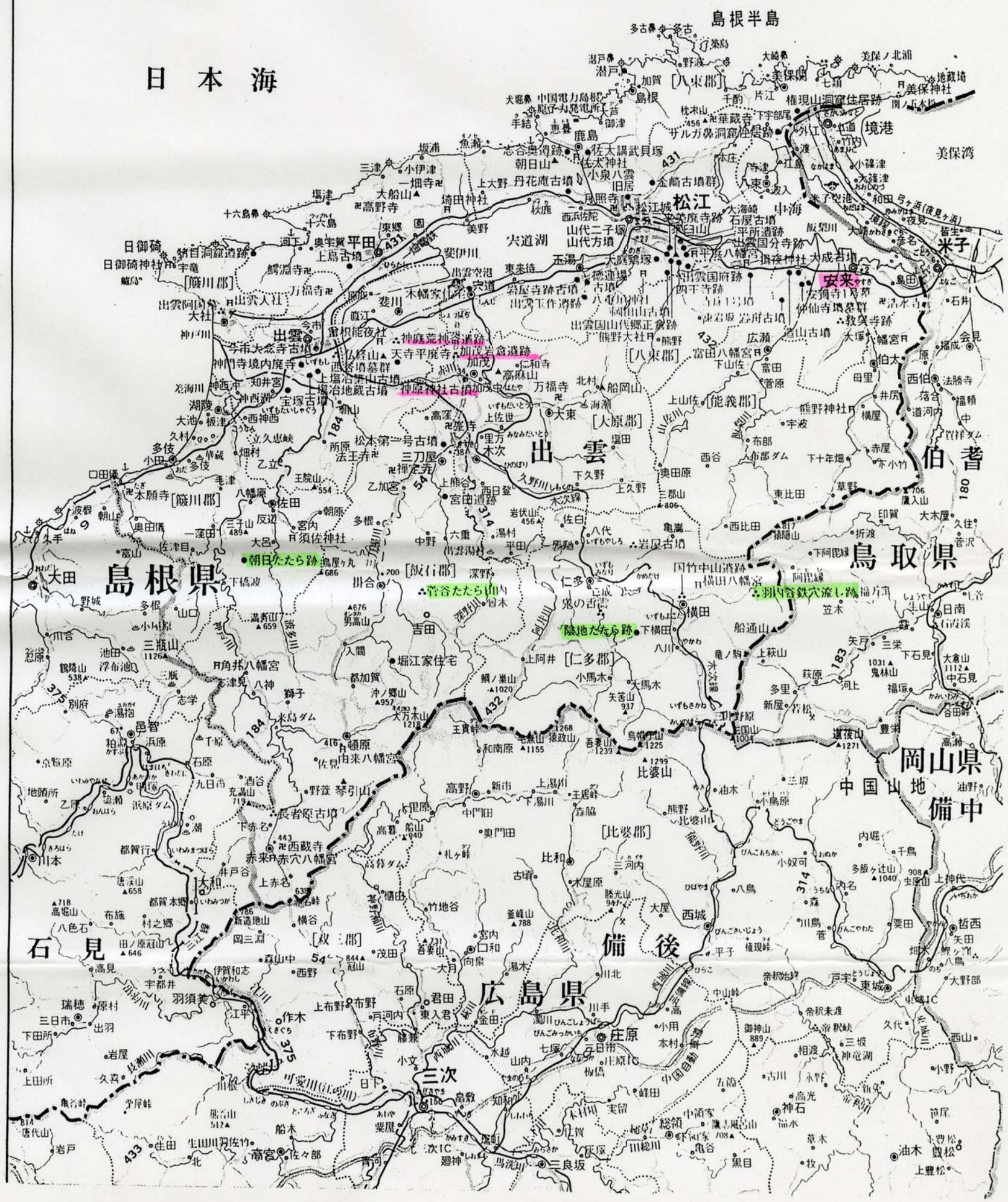
民俗学者谷川健一氏は、日本の古代金属史研究のなかで、鍛冶神の足跡の延長線上にある中世の「鉄人伝説」について、くわしく調べています。

伯耆国大山寺から出雲国鰐淵寺まで、一晩のうちに大きな釣鐘を背負って歩いたという「弁慶」は、島根県『八束郡史』や『出雲鄙』にみられる典型的な鉄人の一人です。

鉄人にはこのほか、酒呑童子(越後)、伊吹童子(近江)、平将門(信濃)などがいますが、弁慶をはじめこれらの鉄人たちには、母親が鉄人を身ごもったとき鉄を食べたり、生れるのが異常に遅れたり、体のつくりに一部人間

出雲国全図

0 5 10 15km



地名研究会報

第６４号

平成11年９月５日
鹿児島地名研究会

Ⅰ 第６３回例会　平成１１年３月７日（日）　於教職員互助組合会館和室

（出会者）上野堯史・小山田稔・大田照夫・納栄蔵・小園公雄・坂本誠・園田尚志・永井啓介・永仮芳彦・永田典男・西田春人・肱岡修一郎・平田信芳・福元忠良・松田誠・三善喜一郎・村山喜一・山崎盛隆（計１８名）

Ⅱ 「大日本地名辞書」読会　P1740～1742

［問題となった地名および事項］　可愛岳，西南戦争の状況，今後の研究課題等

平田　今日読んだところで何なりと問題を出して下さい。なかなか，興味がありながら，長井村可愛岳という薩軍最後の地には行けないんですが，この中には誰か行った人がいらっしゃいますか。どんな所ですか。

小山田　えー桐野利明がおった所との最後の軍議を開いた所が残っています。これくらいの部屋ですかね。昨年いや一昨年か，水害にあって資料が相当痛んだらしいです。また町の方で，北川町ですが，元は長井村でして，今は資料館としています。

平田　まあ，小さな村にとっては観光の目玉でしょうからね。

小園　可愛岳というのはどの位の高さですか。

平田　可愛岳，７３０ｍくらい。７２７．７ｍ。

小園　高いですね。

平田　うーん，あの辺で７００ｍと言うのは高いですよね。

小園　地形を見て逃げる方向はどっちか，敵の方向はどっちか見たんでしょうね。可愛岳が西郷の最後の決戦，敗戦の場所で…。

平田　結局，延岡というのが豊後に通ずる道があり，また五ヶ瀬川を遡ると肥後高森につながる。ですから，あそこは古代からの交通の要衝だから，そこに追い込められたという訳ではないかな。西郷軍は。

小園　海からは艦砲射撃があるし，豊後の方からは官軍が来るという形で，熊本から入って，結局軌道修正をしなければならなかったわけですけど。

平田　豊後道の方が，指揮官は誰かな，河野主一郎が率いる薩軍は優勢だった訳ですよ。鹿児島を追われて，国分が最後で都城に逃げて，宮崎，延岡と，逃げる一方ですから，追い込められる所は延岡だった訳です。だから，豊後におった元気な薩軍を呼び寄せて，最後の抵抗をやったのが延岡の戦いです。

小園　一応鹿児島には帰ってきたけど官軍が固めていたんで逃げたというわけですかね。

平田　西南の役の時に，田原坂の戦いが，

３月２０日突破されるでしょう。四月中旬には熊本城の包囲を解いて人吉に移動します。人吉にこもっている間に体制の盛り返しをするわけですよ。その間新しく兵を募って５月・６月鹿児島奪回戦をやるわけです。だから，５月６月当時，城山は戦場になるわけだけれども，その時官軍が城山を守って薩軍が攻めるわけです。鹿児島攻略に失敗して逃げる。それを先ず重富で叩かれる。官軍は陸軍と海軍が呼応しながら艦砲射撃でやっているわけです。そして国分での抵抗が最後で都城に逃げて行くが，都城ではもう何も抵抗しない。宮崎へともう逃げる一方で，最後が延岡の戦いになるわけです。結局延岡で薩軍の解散を西郷が決意してほとんどは降服した。生き残った決死隊だけが可愛岳を突破して山脈伝いに鹿児島に帰る。その後はどういうことになるかというと，運がよかったんですね。台風が近づいていて，嵐の中をほとんど九州山脈の尾根伝いに西郷軍は鹿児島に駈け戻ってくるわけです。

小園　　西郷は籠に乗って。

平田　　という話があるけれども

一同　　(笑い)。

小山田　西郷と別府晋介が籠に乗ってですね。

平田　　え一別府晋介は怪我してましたからね。

小山田　可愛岳からは籠が２つあったことになりますね。

平田　　籠を担いだのが加治木の小杉恒右衛門という人物。そのころ２０才くらいです。彼だけが岩崎谷で別府晋介の籠を担いでいたから西郷の最後を見たという。西郷が弾に当たって倒れて別府晋介を呼べと言われて，別府晋介は籠から下りて介錯しますよね。それを見ていたのが小杉恒右衛門という人ですよ。その子孫は加治木にいるはずです。薬屋ですね。

上野　　はい，今閉まっているようです。

小園　　可愛岳というのは平坦でなく，急峻な所ですか。

小山田　山はずーっと繋がっています。そこに行って見ると周りがよく見える山だという程度で。

小園　　連山ですね。

平田　　九州山脈に繋がる連山ですからね。

小山田　傾山からずーっと九州山脈に流れて行っています。しかし，可愛岳に上るには現地の案内人がないととても無理です。

平田　　そりゃそうでしょうね。もう今はだれも入らんでしょうからね。

小山田　現地では年に一回は壮年の連中が登っているそうです。西郷が突破した道を。しかし今は日曜日しかできない。皆勤め人ですからね。

平田　　なるほど。

小山田　そういう話です。

小園　　西郷札の話が出るのはそのころじゃないですかね。

平田　　その前だね。財政的に苦しくなって行くのは。西南の役の検証というのは案外なされてないのです。普通田原坂の戦いと熊本城の包囲とその次出てくるのは可愛岳突破の話でしょう。そして岩崎谷の最後で，その途中が抜けているわけですね。

小園　　まあ，霧島町の郷土史を見てみると，ほとんど西南の役の回想録：「薩南血涙史」を引用したんでしょうけれど，霧島町でも牧園の方から西郷軍が踊，持松を通って霧島に入って来る。霧島の川北で桐野利明の指揮で負けて，結局，霧島神宮の前から西崎に流れるというルートがですね。いったんは，国分に下りようとしたけれど官軍が多くてとてもだめだというので，引き返してというようなことが書いてありますね。

平田　　国分では春山原(はるやまばる)の戦いというのがあって，まだ牧場の馬が逃げないための堀があるんだけれどもね。そこを塹壕にしての戦いになりますね。

小園　それは狼を入らせないためのものだと言ってますが。どっちが本当か分かりませんが。

平田　まあ自然の堀を利用したんでしょうね。まそこで官軍に一泡吹かせたぐらいで，あとは総崩れですよね。

上野　　加治木では郷土史に出兵した人の名前がすべて出ていまして，死んだ人・場所とか出ています。そういうのはちゃんとした資料があって載ってますが，しかし，他の所は郷土史にほとんど出ていないですね。だれが出て行ったとか載っていない。日清戦争から後はですね，どこの郷土史も戦死場所まで特定して書いてありますね。西南戦争についてはどこも記念碑みたいなのがあってそこにずら一っと名前が載ってはいますけど。

平田　　磨耗してしまってですか。

上野　　はい，磨耗して見えない感じですけど。郷土史に不満なのは，国内最後の内戦を戦史の引き写しみたいな感じになっていて，あなたの村の人はどこで戦ったのかということは明確に書いてないというのが目立つような気がします。私の知る限りでは加治木は‥‥

平田　　割に書かれている。

上野　　はい，割合よく書かれていると思います。

平田　　というのは，やっぱり負けた方だから，無念だったわけですよね。また冷や飯を食わされたわけだからそれだけのゆとりもなかったと思う。

村山　　今，言われた加治木にＳさんという方がおられますが，その先祖が行かれたそうですが，負けいっさ（戦さ）じゃったでと言って，死ぬまで語られなかったということです。

平田　　ほとんど悔しくて書けなかったと思いますね。だからまだ地方には仏壇の下とか箪笥の底にはですね，従軍日記が隠されているはずですね。そういうのをやっぱり拾い出して発表していかなければしょうないでしょうね。まだ出て来ると思いますよ。

上野　　西南戦争の時，何を食べ，どこをどう歩いたのかという細かいことは書かれていないようです。今，後を辿って歩いていますが当時の道がもう分かりませんね。食料や歩く草鞋をどう準備したのかも考えますね。

平田　　大荷駄・小荷駄がついていますからね。相当準備していたはずです。話は別ですが，彼は今西郷軍が歩いた道を歩いていますから，６月の例会には話をしてもらうつもりです。

小園　　それからさっき西郷の業績について話があったのですけれども，中には言いたくないと，憎いということもあって話し

たがらないと。もう一つは官軍の探索が厳しくて，逃げて帰ってきた人達は，国分では敷根の山のガマに入って，そこに食料を運びおったという国分の人達の話もあります。相当連れて行かれたのでしょう。西南戦争の処理において。だから向こうの方に墓があると。

平田　とにかくね，西南の役に参加した人達の名前が，国分の金剛寺跡には灯篭に各中隊，小隊毎に全部名前が刻んで載っている。そして，何分の１ぐらいですかね，相当数アメリカに渡っている。日本では面白くないから，アメリカで生活を立て直そうと考えたのでしょう。その人達が灯篭を寄付しています。

小園　それじゃ建立は後ですね。当時参加していた人達は優秀な青年達ですからね。

平田　そうです。

小園　学問をしていた人達ですから。決して私達はあれこれいうことでもないのですが，ただ戦争を引き起こした原因についてはもう少し知っていかなくてはいけないのではないでしょうか。西郷さんだけを称賛していては，こう言っちゃいかんのですけど，もう少しそうかなという形で，大久保の大義とか日本の政治の発展とかという形で検討して行って正しい西郷像というものを作って行かないと，何か偶像化してしまっているようなというのが，これは私の考えですが。

平田　いやー，若者を相当死なせたわけですからね。そしてみんな貧乏垂れたわけだから。子供を死なせた母親なんか西郷を恨んだと思いますよ。これは素直な気持ちだと思うんですがね，恐らく西郷の馬鹿が

と叫んで泣いたと思うんですよ。そんなのが郷土史で検証されてないのですよね。

小山田　そんなのは今でこそ言えるが，絶対語られんかったですよね。

平田　まあ，でしょうね。

小山田　私は他県から来て，そう思いますよ。

納　戦時中も軍隊が強くて，あれは負けるということを思っていてもまた知っとっても，口に出していえば，あれは……。

平田　非国民と言うような。

納　それと同じ気持ちでしょうよ。

平田　鹿児島の人達の気持ちは色々複雑だったと思うんですよ。それが検証されていないのは事実ですね。

小園　平田先生がいつかおっしゃった征韓論についてもですね，やっぱり西郷を美化する方向だけではなく，本当は西南戦争の後の鹿児島の状況では西郷に対する非難というのもあった訳ですからね。そして大久保に対する批判もあったし，逆になったんじゃないかな。最初西郷の批判が強くなったのがやがて西郷称賛という風になって大久保批判となって。士族階級の人達がそういう盛り返しをしたというふうな風に私は考えていますよ。

平田　もう一つね，西南の役の話が出たけど，久光・忠義など上級士族は全部桜島におって中立を守らされた訳でしょう。で，下級士族ではいわゆる城下の城下士と麓の郷士と対立するような形となる。桜島におった上級武士は一体何なのだということですね。

永田　話は飛躍するようですが，西南の役を見るのなら水戸の天狗党の道も歩いて

下さい（笑い）。比較して似ている所もあるし，違う所もある。住民の違いにですね。西郷軍が上がった所は大藩の所でしたが天狗党のそれは小藩があって，小藩は自分の所を通ってくれるなと献金したり，間道への道案内をつけたりしています。西南の役を検証するなら，水戸天狗党，会津の問題まで検証しなければほんの片方だけになってしまいます。

小園　五稜郭まで行かなければいけない（笑い）。

平田　やっぱり日本の近代史はまだまだ分析の必要がある。

上野　近代史も庶民の姿という点では分らないのが実際です。

永田　桜田門外の変も美化されるが，あれも彦根藩，幕府の側からも見なければその意義は分らない。あの変で死んだ藩士は明治になって勲章を貰っている。攻撃した側も勲五等など貰っています。ところが井伊直弼を守って生き残った者は切腹したり，斬罪になっている。井伊をやったというけど，藩の者にとって君主ですからね。久光の首を取られたら鹿児島藩の人はどんな暴動を起こすでしょうかね。そういうのも考えなければ日本の近代史は分らないと思うのです。可愛岳を歩かれるなら，天狗党の方も歩いて見て下さいと，提案したい（笑い）。

上野　私は一応川尻までを考えています。

永田　私の一族の中にも従軍して帰って来たのもおるんですよ。

上野　私の曽祖父もそうです。宮崎の藤野の戦いの後に帰っています。ところがその戦いは見えないのですが。それが。

平田　歩く動機ですね。

永田　歩く時にどこでどんな人が死んで埋められているかを調べられたらよいが。

平田　まあ，過去帳やら調べて歩かなければいけないでしょうね。

上野　本当はそうしなければいけないでしょうけど，先ずは歩こう，ルートを知ろうと。

平田　鹿児島の人達がやっぱり一人一人がどこで死んだかということを調べるエネルギーを持っているんですね。他の県の人はそう簡単に調べないと思うんですよね。そういう動機付けがなかなかできないと思う。

小園　戦争があっても，どこに埋めたか，どこにしたかと，いうことは調べるのは至難の技かも知れませんが，或いはお寺にそういった墓地があれば‥‥。

永田　私達は戦時中，軍神のお参りなんかもして来た。今，全く忘れられているんですよね。ところが，やっぱり土地の人は国のためにと戦ったんだけれど，今度は一方の方は顕彰され，一方の方は忘れ去られてしまう。もう，今，太平洋戦争で戦死したような人達は賊軍みたいな風に……。

平田　そんなことは。（笑い）

永田　忘れ去られ。

平田　鹿児島の歴史で一番重要なことは，西南の役の薩軍でどれだけの人間がどこで死んだか，ということを検証することが一つですね。第二次世界大戦の特攻基地はほとんど鹿児島ですよね。17ヶ所から飛び立っている訳ですから。それを知覧だけで宣伝している訳ですね。特攻隊が，何月何日飛び上がってどこでどれだけの戦果を上げ

たか，アメリカ側の資料と対比するのは残された大事な仕事なんですね。ところがなかなか，そこまでやらない。

上野　死んだ人の数すらはっきりしていないですよね。鹿屋で調べたんですけど，正確な数は分らないということです。それもちょっと残念ですよね。

小園　とにかく戦死者の場合は，ソロモン沖とか太平洋においてとか，太平洋のどこか分らない。

永田　陸軍のある部隊の冊子を持ってるのですよ。事実，私のすぐ上の兄貴が航空兵で戦死したんですよね。その戦死する時もですねやっぱり僚機がいっしょにおって戦死を確認してくれるんですね。

小園　ああ，らしいですね。

永田　やっぱり西南の役の場合も行った友達が，だれがどこでどんな死に方をしたというのを帰ってきて記録せんかれば，記録にならん訳ですよね。

平田　薩軍は，一人当りあの当時の金で50円ぐらい持たされている。それは何かというと，埋葬料という形で渡されてる訳ですよ。西郷軍というのは相当用意がよかった。熊本じゃ，官軍より薩軍の方が人気があった。何故かというと墓石屋にポンと金が払われたから。それで友達が，どこで埋めたというのを，生き残ったら記録している訳ですね。だから割によく分っているはずなんです。けど，やっぱり，負けたらまとめがつかない訳ですね。官軍は靖国神社に祭った訳ですから，全部整理しています。薩軍だけが分らない。

小園　いま，永田先生がおっしゃったように僚機がと。中世の文書の中で，矢傷を負ったと，それを誰々が見てるということをちゃんと軍忠状に書いて。

平田　馬鹿な（笑）

小園　恩賞をもらわなくてはいけない。

上野　それはもらわんないかんから。

小園　誰々が何のためと。

永田　県の方に亡人録というのがありますね。それには，ちゃんと，誰々がどこで戦死をしたと，誰が確認したというのを書いてありますよね。ああいうのが西南戦争の時にあったかどうかですね。

平田　あったでしょうね。

永田　あったですよね。

小園　あったはず。（2,3人）

上野　それ専門の人がおったはず。それが破棄されたか。まだ隠されているか。

永田　やっぱいなければ戦った勲功は与えられませんからね。

平田　はい，じゃ，前半はこのくらいにしましょう。他にないでしょうかね。

納　すみません，あの，可愛岳というのは可愛と書きますね。２字でもって１字の発音ですけど，昔は発音は違ったんでしょうか。

平田　あの「エ」というのは，これは誰かやったこともあるんですけれども（会報25号　浜崎盛雄「地名顕娃について」），「エ」はいわゆる江湾の「江」ですね。だけど，奈良時代には地名は２字で表せという命令ができますから，無理矢理漢字２字で作る訳ですよ。そして，愛すべきは「エ」ともいいましたから，そういう風に慣習的になってきている。

納　そのついでにですね。ここに出てるのは，鹿児島の川内の可愛という漢字ですね。「可」「愛」」と書くんですね。どうして「エノ」はですね。「ノ」はまだ分るんですよ。これは上の言葉と下の語をばつなぐための，そうすると助詞じゃなかろうかと。可愛と何で「エ」と読ませるんだろうかと。それからあの，これも万葉だったと，日本書紀あたりにね，書いてあるのにね，「エノ」というのはやっぱり，「可愛」と書いてですね，「エノ」と読ませているんですね。今さっきおっしゃった，土地名の場合は２字にしなさいと，こういうことからしてもどうも「エノ」とはどこから，どう出来て「エノ」で「可愛」と書いたんだろうかと思うんですがね。教えて下さい。

小園　日本語じゃないのかな。

平田　いいや。

小園　日本語じゃないのかな。愛す可きですよね。

平田　いや，古事記にあるよ。イザナギ命とイザナミ命が，八尋殿の周りで出会う時に「あなにえし，えおとこよ，えおとめよ」というでしょう。だから愛す可き対象は「エ」といったわけですよ。

小園　おまえは何て美しい女だというのが，今おっしゃたような，あなにえしですね。

納　万葉ですかね。とくに「お」の段にですね。「おこそとのほもよろを」の「お」の段にですね。甲類と乙類と読み方が２つあるんですよ。で，さっき言った本に書いてある「エ」がですね。「可愛」と書いて「エ」としてあるんですね。どうしてこげんなったっじゃろうかと。他の字は全部１字で書いて，「エ」だけがこの「可愛」と書いてあるんですね。

平田　じゃ，ちょっと休憩しましょう。

佐多の製鉄

小園公雄

今日は，小園です。資料をお渡しましたが，実は私は佐多の中世の水田を研究するということで，この1年調査をやってきたわけです。その際に佐多氏が平安末期から種子島の支配もしていた訳で，1300年代の建武年中には祢寝氏と種子島の肥後氏が争っている。現和村をなぜ祢寝氏が最後まで肥後氏，まだ種子島氏とは言いませんが，と争っていたのかということで現和村を，4，5回，いやそれ以上実検したわけです。

現和村というのは非常に広大な水田でして，湊川とか浅川川によって形成された広大な，国分平野とは言いませんが，そのような水田があるのにびっくりしました。武部というところがあります。武部（ぶぶ）はお分かりと思いますが建部（たけべ）なんですね。上流には，西俣，川氏（かわうじ），近政（ちかまさ）という所があり，こういう所に取り囲まれています。これらの地名は明らかに平安末期から鎌倉時代にかけて祢寝氏と関係が深かったことを示しています。川氏というのは佐多に河内（かわうち）という所がございます。西俣という所もございます。近政というのは，ここを支配していた領主に佐多近政という人がいました。そういうことで中世との関係が強くて，ここを祢寝氏と肥後氏が争っているわけです。種子島の人は種子島氏はずーっと古代からいたんだといっているようですが。

争っている理由は何か，一つは水田だということで調査を始めたわけです。確かに広いということは分かりました。川氏，現和と山を挟んで武部という平野がありまして，ここの川には支流がいっぱいありまして，その中流はもう農業はできません。こういった地域に武部があり，西俣があり，川氏があり，近政があるんですよね。これと山一つ隔てて庄司浦（しょうじうら）というのがあります。この庄司浦は東海岸の浜辺です。ここも佐多に関係あるのです。それは，ここに市来川というのがあります。大川というのがあります。市来川というのは佐多の郡に流れ出る川です。市来山があります。市来という地名があります。それから根占と佐多の堺に大川というのがあります。こう言ったことを考えますと祢寝氏といわゆる佐多氏と種子島氏との関係は非常に非常に親密であったということは事実であります。従って祢寝氏と肥後氏との争いは水田をめぐる争いであったと今までは考えておったわけです。

ところが，水田だけではないのじゃないかということに気がついたんです。と言いますのは，現和は，種子島は，ご存知のように砂鉄が豊富で，弥生時代から鉄製品のつり針・鏃が出てきまして，昔から砂鉄による製鉄・鍛冶があったんだということは推定できるわけですね。種子島に中国の人が持って来たんじゃないかという考え方もあります。何百個も何千個も持ってきたということであれば理解できますが，それは考えられない。種子島は砂鉄が非常に豊富な所であり，この海の作用によって「カンナ」流しのようなことが行なわれて非常に厚い鉄の層が海岸にあったわけですね。たとえば有名な武部の製鉄所とそれから最近新聞出ていましたが，古田の製鉄所，大田の製鉄所，この資料の右の所に種子島で作られた表があるんですけど，こういった所ですが，あちこちにあるんです。それから海岸線の細長い所，浜辺のある所では砂鉄が一杯採れる。その中に増田という所も海岸線がありまして，非常にたくさん砂鉄が採れた。しかも製鉄の跡もあり，金くそも沢山出るということで知られている訳です。最初は武部だけだろうと思っていましたら，最近の新聞報道に古田が出ていました。この前，古田に行ってきましたが，古田は比較的に新しい製鉄所でして，規模もまあまあの所だったのですね。大田は歴史的に古い製鉄所なんです。大田は東海岸です。まあそのようなことから，私は鉄製品・製鉄，いわゆる鍛冶鉄，鍛冶屋の存在ということに気がついた訳です。と言うのは，このように祢寝氏が支配している所で製鉄・鍛冶があるとすれば，この本家である佐多はどうなのかということを考えた訳です。佐多氏は祢寝氏の一族，つまり佐多は祢寝氏の一族の支配でして，やがて，1069年が一番古いですが，北俣と南俣に分れます。ここがいわゆる根占町，ここが田代町，こっちは佐多町です。これらはみんな祢寝一族でした。そして大体，建久図田帳の1197年頃分家しております。そういう訳で祢寝一族だった訳です。そこに表がありますが，○の2つついた所ですが，ここが佐多，田代はここなんです。これは根占で，ここが南俣です。この佐多岬が佐多氏です。もともと祢寝氏の領地でしたが兄弟の佐多氏に佐多岬が渡されて支配するようになる訳です。これが郡（こおり）で，こちらの湊の方を伊坐敷と言います。今，役場とか中学校はこちらに集中していますが，昔はこの郡川辺りが，いわゆる郡ですから,本家がいた訳で，佐多氏総領がおりました。さっき申しましたように，これは佐多氏が支配していたんじゃないか。祢寝氏が支配していて佐多氏に移されたと。そして佐多氏との関係も非常に濃密で，色々な伝承があります。では佐多氏はどうかということで今度は佐多方面に鉄に関することを見ようとした訳です。佐多の郡に川，ここに郡川が流れています。ここを横切るように，このように流れています。これが伊坐敷，こっちが大泊です。竹之浦，間泊とかあります。この郡川を地元の人は宮元川とか古園川（ふるぞんかわ）と言っています。古園というのはここです。ここの，たまたま水田の調査で道案内を頼んだ町の文化財の委員長が「ありますよ，300軒ぐらいの鍛冶屋さ

んがおったそうですよ」と。それを聞いたもんですから，おやっと思いましてその人の案内でこの川の流域を見させてもらったんです。色々聞いてみますと，ここに浜尻という所があります。この地図を見て下さい。浜尻の砂浜は砂鉄の山なんです。浜尻の砂鉄を運んで，この砂鉄を利用して製鉄を行なったようです。この川の付近に河ケ原とか古園とかあります。付近の山はこのような渓谷，Ｖ字形のですね，でして照葉樹林がいっぱいある。松・杉じゃなくて官山にあるような照葉樹林で，樫とか楠とかいろんな雑木がいっぱいあるんです。私がハッと気づいたのはですね。ここには製鉄の時の条件があるのです。１番目は先ず砂鉄，２番目は水で，３番目が木炭なんです。この佐多を見た時合致するんです。この宮元川の水は，甲突川ほどとは言いませんが，稲荷川に匹敵する水量でして延々 12 キロぐらいあります。この周囲には照葉樹林がいっぱい，今は営林署が管轄しているんですが。そしてこの流域には伝承では 300 軒の鍛冶屋があった。その炉の跡が，その案内された方は，狩猟や木こりもされる物知りですが，「小さい頃からこれで遊びおった」と。これが炉なんです。今のところ町が文化財としていないので持ってきましたが（笑い）。その方がいうには，木炭は一町歩の照葉樹林を買って作ると 3000 キロできるといいます。大木がいっぱいありますから。先ず砂鉄を運んできてカンナ流しをする，まあ自然の流れの中である程度カンナ流しは済んで，この地に堆積していると考えられます。木炭は一ヶ所切ったらすぐは生えませんから，次ぎへ移動して行く訳です。その炭焼きですが，その方法もがまを作って炭焼きをするのではないんです。ある程度燃やして，突如パッと上から土か莚か砂をかぶして不燃焼の状態にする。燃えきった所をすばやくパッとしなければいけないんです。灰になるとだめなんです。そして私も専門ではないのでよく言えませんが，粘土を固めて，高さ１ｍ５０ｃｍぐらいの炉を作って，下には火の焚き窪を作って，ここに羽口（はぐち）を，鞴(ふいご）を作ります。この取付ける鞴，羽口がこれでして，これが川にごろごろしています。羽口は初めは人力で送風したろうと言われますが，次には水車が使われます。このような所は今は大きな蛇でもいそうなジャングルになっていまして，大変な所です。永田先生も経験なさったと思います。この炉に木炭を入れて，鞴でじゃんじゃん燃して 1200 度から 1300 度にもって来ます。ここに砂鉄を入れる訳です。大体，鉄１キロを，この前の種子島での実験では，作るのに砂鉄１０キロが要ったと言ってました。そして２～３日間，出雲では２～３日間と，焚き続ける。そしてそれを壊して水で冷やす，金池に入れる，というような過程だと思います。そのような条件を佐多は持っているんです。で，問題となるのは，誰がしたか，技術者のことです。恐らく専門の技術者がいないとこれはできないと思います。技術者を呼んだ，だれが呼んだかということになります。資料がほとんどありません。技術

者も炭焼き専門の技術者もいたし，順序よくいうと，砂鉄を運ぶ人，恐らく馬で運んだでしょう。例えば浜尻から出発すると，ここまで２キロぐらいですが，ずうーっと川沿いに運ぶ，炭を焼いて製鉄すると，さらに上流に行く。炭を焼いて運ぶのではなくて炉は一回一回壊すのですから，新しく窯を作ってそこで炭を作って製鉄をする訳ですから簡単ではないです。はい次，はい次とはいきません。実際行って見ますと，この辺りの道路にも砂鉄やたたらがあり，道路脇の崖にも積んであるということです。たたらの取り除ける所は取って，取れない所は土を入れて田んぼにしたと言われ，「ここもだ，あそこもだ」という風なんです。写真を回して見てください。佐多の製鉄はかなりの時代のものと思いますが，各地に，松山とか折山とか川内とかいう所にも，たたらが山積みしてあり，鍛冶屋跡もあった，単なる製鉄ではなくて，鍛治もしていた，と。この鉄は，まだ錬鉄状態で色々な不純物が混じっている。これを鍛冶屋がトッテンカン，トッテンカンと叩いて不純物をはじき出す。知覧が有名ですけども，これは野尻野（のじんの）のもので，昨日採ってきたんですが，知覧の製鉄滓なんです。知覧の方は 200m あるかないかの規模ですが，こちらは６ｋｍ，場合によっては，もっと散在しています。資料３を開いて下さい。根占の「ふたつがわ」，昨日行きましたが地元の人は二川（ふたがわ）と言いました。さらに辺田（へた），それから炭屋があります。炭屋は製鉄に関するいわゆる炭専門の業者ではなかったか。実は昨日登尾小学校に行きまして，「理科室に何かあると聞きましたが」と。そして「これは製鉄の」と説明しましたら，校長先生達がもうびっくりされまして，一緒にと校長先生も佐多を廻られました。これからの地域の社会科学習にとお願いしましたら喜んでおられました。そのように江戸時代の資料にもない，明治にもない，江戸時代の資料はわずかに根占にありますが，郷土史或いは三国名勝図会に若干あるというです。

こういった鉄をいつ誰が作らせ，どうしたのかと考えました。種子島の現和村にある製鉄と佐多の製鉄が全く同一の目的でなされたはずで，従って現和村は水田だけではなかったのだ，それは製鉄，鉄資源だと考えを変えた訳です。佐多氏はずーっと種子島の現和を支配していた訳ですから。この佐多氏は 1450 年頃佐多島津氏というように呼び変えています。その佐多島津氏は島津５代の島津貞久の孫なんですが，佐多に居住したということが島津国史に載っていますし，祢寝文書には佐多合戦としまして，島津・祢寝両氏の激戦を記しています。その後この佐多島津氏は知覧に移された訳です。知覧には，松山・厚地がありまして，皆さんご承知のように鉄が発見されてセンセーションを巻き起こした訳です。私が考えるに，佐多氏は祢寝氏の持っていた製鉄業の知識を得て，知覧に転封された時にその技術を持っていったとすれば松山のあの製鉄業もすんなり引き継げると考えます。松山の場合どこから入ってくる

かというと，喜入と頴娃からなんです。どちらも測りますと大体 13km ぐらいです。ここの製鉄も中世に遡るかも知れない。まだ鹿児島のたたらの研究は全然と言っていいぐらいで，わずかに知覧ミュージアムの上野さんが若干されるぐらいで，私は今月，たたら研究会を発足させようと思っています。知覧ことを考えると話が一致してくる訳です。佐多を中心とした製鉄が知覧にも種子島，種子島はどっちからか分かりませんが，技術が移ったことが分かります。技術者ですが，薩摩にはいないか未熟であったと考えると，島津氏は伯耆・出雲・備前，今の島根・岡山県から招いたのではと考えているんです。あの辺り，中国山地には鉄が採れますから，その技術者を呼んでいるんです，江戸時代に。伝統的な技術者との交流もあったのではないかとも考えられる訳です。

では何の為の製鉄かというと，一つは武器，刀・槍，その他の武器があります。祢寝氏は，ご承知のように，中世，大隈半島ではその力は島津どころじゃなくて，島津氏・肝付氏，それから伊東氏，南北朝期には志布志の楡氏などと戦って自分の力で出世しているんです。その軍事力はなんだったか，戦争は，行った人に武器を与え，食糧を与えて，死んだ人には補償もしなければいけない訳ですから。武器は材料・鉄がないと作れない，材料がないとどうするか，買わなければならない，買うにはお金がないといけない，自分で持っておれば出来る。島津氏もこの祢寝氏には苦労した訳です。従って 16 世紀後半だったでしょうか，吉利に転封させた訳です。

もう一つは，ここは国分正八幡宮領の荘園です。ここから貨幣の雑税が，銅貨と思いますが，来る訳です。これを済物（さいもの），中世では「なしもの」と呼んでいますが，雑税です。また，鳥居の修理とか廊下を作ったから負担しなさいという貨幣の負担があり，その貨幣は 10 貫，20 貫という負担です。ただでさえ小さな領域の根占で米を売るだけでこれだけの物を負担できるかなという疑問があると考えたんです。板を，木材を，米を出しなさいというのならいいですが，造営のための貨幣を出しなさいという記録が祢寝文書に出てきます。これは鎌倉時代のことです。祢寝氏も佐多氏もどのように負担できたのだろうかと考えます。それを交易，貿易に使った可能性はないのか。

この本は「李朝実録」と言いまして，1392 年成立の朝鮮の王朝，李成桂の王朝，それの日本関係を集めた史料です。この史料にいっぱいあるんです。私が紙を挟んだ所を見て下さい。交易ですね。その交易に銅・鉄が出てくるんです。最初は銅です。銅であったのが後には鉄を出して来る訳です。これを出すのは九州の戦国大名です。朝鮮半島に朝献として持っていくんです。朝献という言葉があります。いろんな意味がありますが，朝貢することです。そうするとお返し，返礼として，例えば絹製品とか，木綿とか，布とか貴重な物を，時には布千反ぐらい貰うことがあります。最初は銅だったものがそのうち鉄が沢山出てくるようになります。鉄の 300 斤とか，1 斤は 600 g ですから，計算して見たらわかりますが。そのように祢寝氏には交易があったのではないか。

それを裏付けるものを考えます。ご承知のように 1543 年ポルトガル船，じゃなくて中国船ですが，種子島に来航します。種子島は，例えばこの伝来時の種子島時堯はすでにインドネシア，ジャカルタの記録に交易に来たという記録があるようです。だからすでに東南アジアとの，アジアとの貿易があったんだというようなことが言われている。従ってポルトガル人が来航したのは，私は偶然ではなかったんだと考えるんです。その頃はこの本を読みますと倭寇が出て来て，とにかく，沢山の倭寇が殺されますし，向こうの人も沢山殺されます。色んな記録が載っています。倭寇が蟻が砂糖にたかるように行っています。で，向こうも困ってしまう，一方では貿易も行なう。対馬の人が一番多いのですが，その対馬の人が侵入して略奪をする。しかし，最初は対馬は小さな山の島だから開発する所が少ない，食糧がない，そのため朝鮮半島の李氏の所へ，高麗王朝にもでしたが，行って，大豆をもらったり，米を貰ったりした。朝鮮の方でも初めは情けをかけてくれていましたが，後には「くれ」「やれ」という態度になりまして，困ってしまったとの記録もあります。そうした東南アジアとの貿易で，特に中国辺りの後期倭寇には日本人は一人か二人乗っていて，後は中国人，ポルトガル人，スペイン人が乗っているんですが，そんな船が鉄など運び出すなどして徘徊していた。それがたまたま台風があって門倉岬に漂着したということも私は想定する訳です。その証拠には，1544 年，根占に雄川という所がありますが，南蛮船がやって来て祢寝氏と戦闘している。そして祢寝重久というのが死んでいる訳です。祢寝文書にあります。こういったこともたまたまやって来たというのではなくて，何か計画的で，胡散臭い，そういった行動の結果ですね。大体南シナ海で，倭寇は交易船を略奪するようなこと，スペイン船みたいなこともあったんじゃないか，ですからこういう形で鉄も出されていたんじゃないか。

佐多の人がこれは密貿易に使っていたんじゃないかと私に言われまして，そういうことも考えられると思いました。さっき申しましたように，鉄を武器にしたこと，その武器を貨幣に換えるために交易したということも考えられると思うんです。種子島にポルトガル船が漂着したというのは実は偶然ではなくて，種子島の鉄ということも理由にあったのではないか。またそのことが，種子島と佐多は近いから同じことで次ぎの春来たというようなことです。しかしながら史料がないのがもう本当に歯がゆいんですが，いつだれが何のために作ったか，作った製品をどうしたかということです。江戸時代であればある程度地元の人も，例えば，弘化年間に，浜崎太平次が山川の岡児ケ水の浜砂，砂鉄を炭屋に持って来て製鉄したという記録がありますが，それ以前

のことが全然載っていないということは謎です。江戸時代であればもっとくわしい記録が，今後記録が出るかも知れませんが，今のところ，近世ではないのでないか。墓が四角であれば元禄とか，慶長とかになりますが，その墓は五輪の塔とか或いは板碑です。その板碑が，私は松山と言いましたが，折山ですが，折山と西方という所にもあります。それから竹野（たけんの）という所にもあります。資料の地図番号19番です。五輪の塔と板碑，厚さ20㎝，幅が30から40㎝ぐらいの，その写真にあるようなものです。五輪の塔もここはあるんです。こんなのがあるんです。西方，折山，竹野にです。探せばまだありそうですねと聞きましたら「ある」ということでした。折山の場合は地中に埋まっていたのを，公民館を作るというので大地を掘っていたら出て来たんです。埋まっていたのをブルドーザーで掘り出したということです。ここに人骨が２，３体あったというようなことを地元の人は言っていました。台地の上で，窯土の中ですから保存が良かったということです。その近くに鍛冶屋があったという所がありまして，鋳場（いば）と言いますが，その人は「昔は水が非常に豊富で，水車も廻っていたし，小さい頃は泳いでいた」とおっしゃるんです。そこの石垣にも遺物みたいなものが差し込んである。

このように私は江戸時代以前であると思います。場合によっては，例えば宮之城の松尾城のような中世的遺跡や熊本県の遺跡をもっと研究しなければいけないのですが，ここは炭素の関係の研究で現象上はっきりすれば出てくるでしょうけれども。ここの貴重さは知覧の古田どころじゃない，新聞には大きく出ていましたが，佐多はもっと大きく書ける(笑い)。ここは本当に，私も行きましたが，規模が小さくて，大正時代のもので，川もいくつかありますがせいぜい100mぐらいの感じですから。だから佐多町の人達も認識を新たにしていただきたいと思う気持ちです。私は中世の史料研究者ですがたまたまこういうことで発奮してしまいまして，発表してみたいと思った訳です。今日はこの程度で終らせてください。

（質疑応答）

平田　どうもありがとうありました。時間が来ましたが，何なりと質問して下さい。

納　佐多，種子島は，昭和20年代から３０年代初めごろまで砂鉄を採っていたのを見ています。それに砂鉄はどのようにしてできたかとう点ですが，種子島，屋久島，佐多は花崗岩質の岩ですね。

小園　種子島は……。

納　花崗岩の中に砂鉄が入ってるんですかね。

小園　種子島の場合はちょっとちがうようですね。

納　種子島は西海岸の能野で砂鉄を採っていましたよ。

小園　知っています。東邦金属がやっていましたから。そして戦後，八幡製鉄がたたらにまだ鉄が５０％も含まれているということで相当数持って行ったと。種子島も佐多も根占も大根占もそうなんです。昭和30年ごろじゃないかと思いますが。

納　30年の初め頃までです。

小園　佐多のことについて向こうの博物館長に質問したんですよ。同じことを。花崗岩の中に入っているものではなくて，山自体の自然のもので海岸に打ち寄せられたのがカンナ流しの作用で吹き返されて砂鉄の層が出て来たんだと言われまして。たしか種子島は花崗岩の山というのは余りないでしょう。

平田　うーん，花崗岩は……。

小園　佐多はですね。それはあるんですよね。

平田　あの登尾辺りから。

納　種子島は山らしい山はないんですよ。その先の屋久島は花崗岩がごろごろしてうるんですがね。

平田　屋久島の花崗岩と根占登尾辺りの花崗岩は同じ質ですね。

小園　私は昭和32年ごろ佐多などに行っていましたが，東邦金属が入っていましてね。浜尻の場合は特に黒い層があったそうですね。それも八幡製鉄が戦後鉄滓を山から運び出して，例えば竹野からは昨日聞いた話では荷馬車で30台くらいは運び出したと。浜尻は最近まで東邦金属がｼｮﾍﾞﾙｶｰを入れまして運びだした，残ったのは滓だと冗談言ってましたけど。

平田　砂鉄はね，単なる鉄ではなくて，チタンの含有率が高いというんで，それを狙っているという。

小園　なるほど。たしか種子島の場合もチタンがたくさん含まれているというようなことを言っていました。後は科学的な地質学的な調査しかないんですよね。

私が中世というのは江戸時代の史料でもあればですがないし，類推すると，祢寝氏の軍事力の強大さ，正八幡宮に対する財政負担をどう運営したかと見たら，水田もそう沢山収穫のある所じゃないし，谷田でして，雄川の近辺，山本地方に入り組んだ所などでして，後はもうないんです。瘠せた土地です。鎌倉時代には20町ですから。

納　もう一つ教えて下さい。種子島の東海岸にある武部，その上流に「たけべ」という集落があるらしいですね。それで西駅の裏の，３号線のトンネル，あの辺りに……。

平田　建部神社。

納　「たけべ」，このつながりが何かあるのでしょうか。

小園　調べて見ますと，戦国時代の史料には建部とか建部大明神とか，滋賀県にもありますし，各地に建部，「たけるべ」という武具を扱う集団というか，役所と言いますか，それがあるんです。大宰府にもと思って調べるがなかなか出てこない。それがあればですね。建部氏がこちらに下って来た経緯もわかるんですけど，ただ1069年の頃の例えば在庁官人というのがありますが，その中に建部というのがいるんです。やがてそういう人達が不毛の土地であった大隈半島，まだ人がそんなに住んでなかったでしょう，そこを開墾して，そしてその中に祢寝院が出来る，下大隈郡にですね。郡の下に院がありますから。新しく入植者が来てそして生産物を入れる倉庫ができる，事

務官が来て，院というのが見とめられる，そこに院の司というのがある，というふうに言われています。ただ建部というのは難しいです。

納　建部というのは三国名勝図会にあったような気がするんですよ。

小園　全国的な建部大明神の信仰がありますし，建部という軍事集団ですね。

納　軍事集団な。

平田　佐多に郡というのがあるでしょう。三国名勝図会で見たんだけど，あそこに十三所神社というのがあるの？

小園　十三所神社……。

平田　で，これは憶測にすぎないが，確かめてはいないが，肝属の総社は四十九所神社ですよね。肝属郡はその四十九所の神社をつきとめれば範囲が分かる。十三所というのは，「旧記雑録」の最初に出てくる平安時代の神名があります。その十三ヶ所を押さえたら馭謨郡（こむぐん）の範囲が分かるんですよね。だから種子島と佐多が結びつきが強いというのは十三所神社の分布をなどを調べたら分かるのではないか。馭謨郡というのは案外，佐多と種子島とか屋久島と結びついた範囲じゃなかったか，と。これは単なる想定にすぎませんけど。裏づけはまだできませんけれども。そういう疑問を持っています。

小園　佐多岬から種子島を見るとかすかに見えるのですけどね。種子島から，喜志度崎灯台の所に行って見ると大隅半島は目の前に見えるのです。

平田　しかし，その間を黒潮が流れているからね。

小園　西之表から大泊まで60km。最初，伊坐敷の島津氏が種子島を支配していたのですが，伊坐敷から来るには 80km ぐらい。ところが大隅半島の大泊からは 40 km ぐらい。あちらの方は潮が非常に激しい。こちらの潮はそうはきつくない。大泊から私は種子島との交流が有り得ると考える。だけどしょっちゅうはいけない。旦那さんがいない留守に女房を押し盗られたという話が佐多辺りでは出て来たもんですから（笑い）。余計なことを申し上げましたが，そんなことです。

平田　大田さん，鶴田の砂鉄の塊を持ってきているとのことでしたが，ちょっと見せて説明して下さい。

大田　今日，この話があるとのことで見て頂きたいと思って持って来ました。これは，今の話から中世のものじゃないかと思うのですが，鶴田の大願寺という所にあるのです。その脇の田で昭和 58 年の頃見つけました。何があるのかわかりません。鍛治屋に持っていきましたが違うと言われました。そうであるかないか判らないので，皆さん，検討して見て下さい。

平田　石にしては重いけどね。

大田　この前ちょっと歩いてみましたが，もと求名村役場があった付近まであるようです。大体，2km から 2km 半ぐらいの範囲になります。

小園　普通の石じゃないかと思うけど。いつか現場を教えて下さい。

平成１１年３月　７日

於 鹿児島地名研究会（県教員互助会館）

題

大隅半島佐多地方の中世製鉄所・鍛冶場跡について

小　園　公　雄

１、種子島の砂鉄と製鉄所について

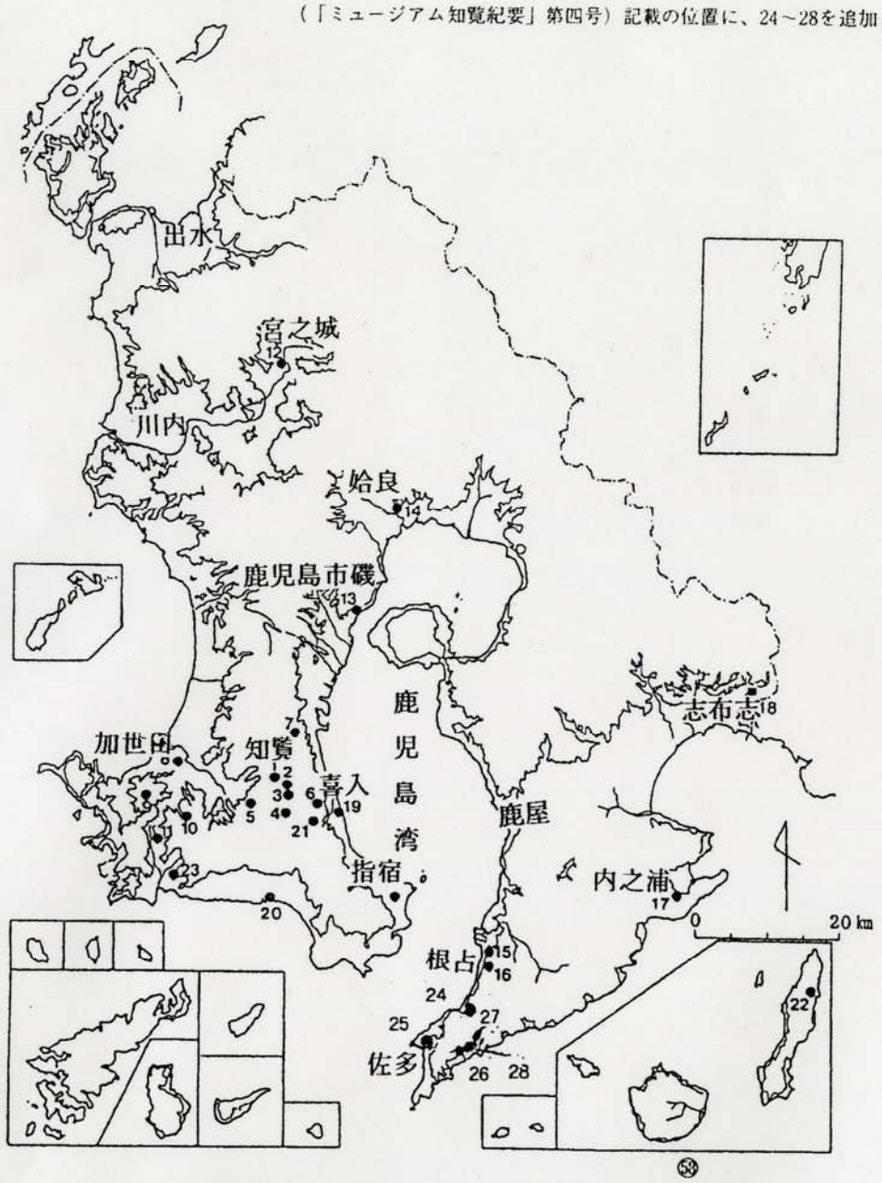
２、佐多・根占地方の製鉄所と鍛冶場跡について

３、中世佐多氏・禰寝氏と種子島肥後氏との相剋・・・・鉄資源の介在

４、中世鉄の交易

1．厚地松山
2．後岳
3．池ノ河内
4．牛芫
5．小坂ノ上
6．上茶筅松
7．火の河原
8．上加世田
9．内市
10．鉄山
11．下木屋
12．宗功寺
13．尚古集成館反射炉・様式高炉
14．鍋倉
15．二川
16．炭屋
17．内ノ浦
18．東谷
19．喜入浜
20．矢越浜（穎娃）
21．種子尾
22．武部
23．木原櫻山
24．大川
25．佐多西方
26．郡
27．宮本川流域
28．川田原

（「ミュージアム知覧紀要」第四号）記載の位置に、24～28を追加した。



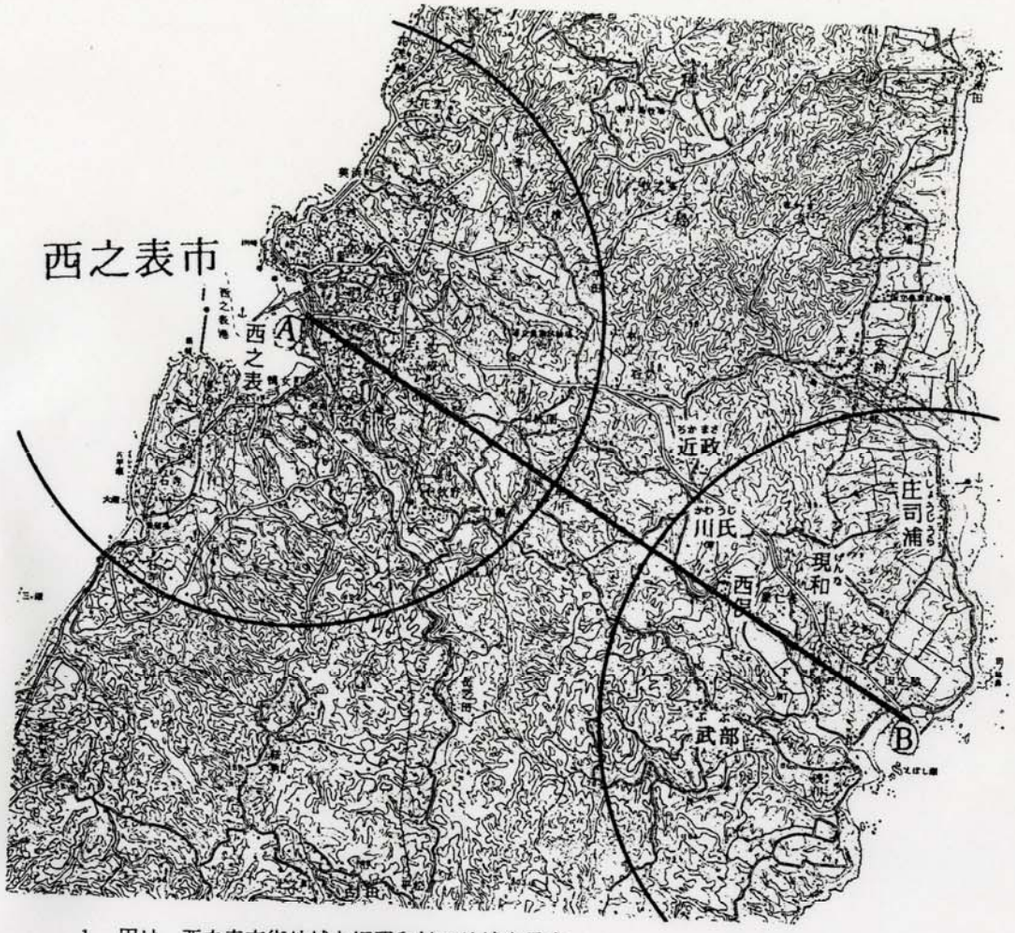
鹿児島県の主な製鉄・鍛冶関連遺跡位置図

種子島鉄砲関係遺

1	西之表市	ずくざん	
2		古田製鉄所跡	
3		太田（製鉄所跡と伝承）	※
4		西　俣	※
5		武部製鉄所	
6	中種子町	野間横町	※
7		町山崎－図ケ久保	※
8		町山崎大門	※
9		中　山	
10		増　田	※
11	南種子町	平　山	※
12		松　原	※
13		雨　田	※
14		かじやの関	
15		西野本村鍛冶屋跡	

16 広田遺跡（弥生）
製鉄鏃出土
17 上能野貝塚（弥生）
製鉄鏃
製鉄釣針 } 出土

種子島総合開発センターの資料

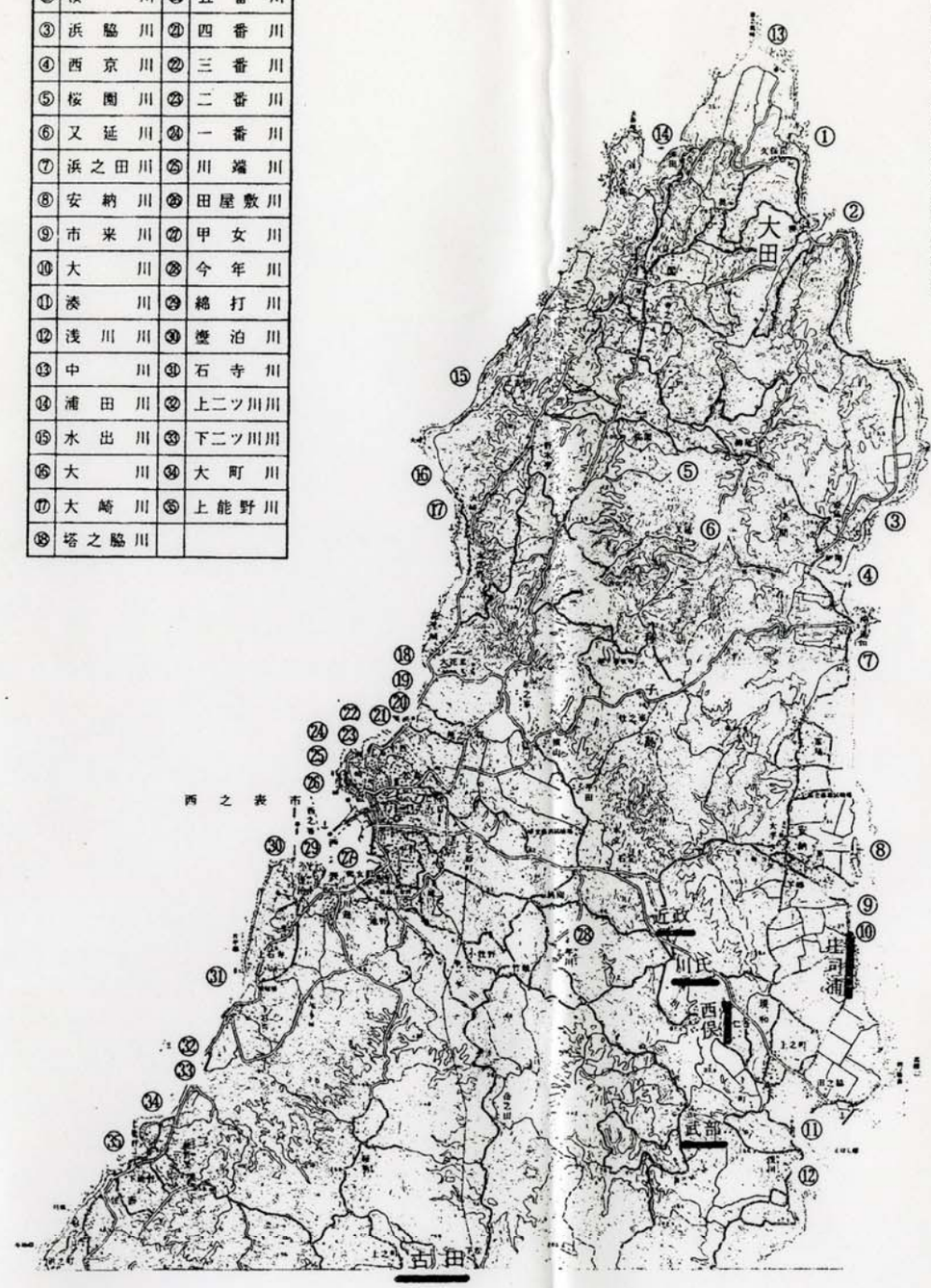


1．円は、西之表市街地域と旧現和村の地域を示す。
2．Aは、甲女川・Bは湊川の流出口を示す。
3．A～B線は、西之表と現和との直線距離（約8km）を示す。
4．中間点あたりが相論の地域と想定される。

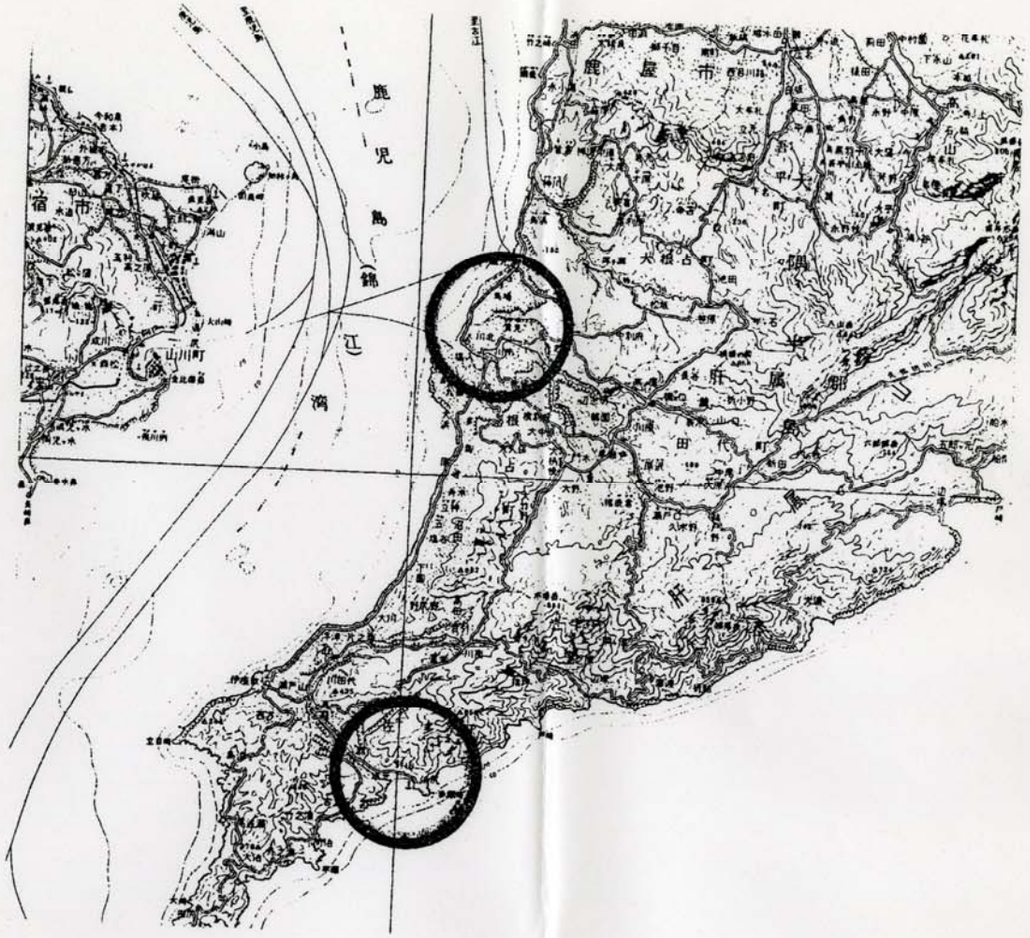
①	久保田川	⑲	六番川
②	湊川	⑳	五番川
③	浜脇川	㉑	四番川
④	西京川	㉒	三番川
⑤	桜園川	㉓	二番川
⑥	又延川	㉔	一番川
⑦	浜之田川	㉕	川端川
⑧	安納川	㉖	田屋敷川
⑨	市来川	㉗	甲女川
⑩	大川	㉘	今年川
⑪	湊川	㉙	綿打川
⑫	浅川川	㉚	塗泊川
⑬	中川	㉛	石寺川
⑭	浦田川	㉜	上二ツ川川
⑮	水出川	㉝	下二ツ川川
⑯	大川	㉞	大町川
⑰	大崎川	㉟	上能野川
⑱	塔之脇川		

種子島の河川

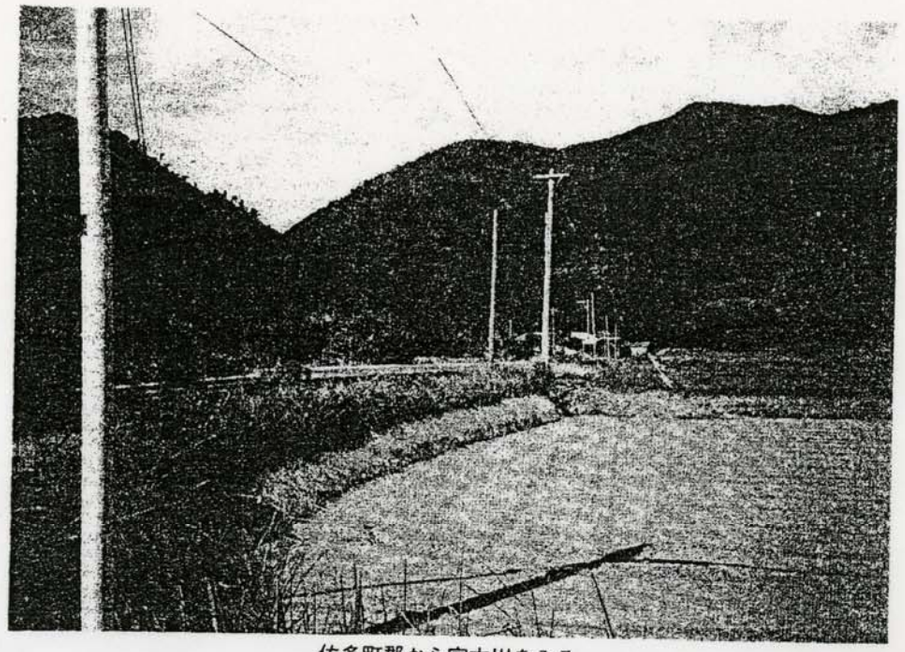
(1) 西之表市の全河川の名称と所在地



※根占町の近世製鉄炉や鉄滓の遺跡を□で示す。黒線は、町界、野尻野の下竹野に大川流る。



○丸印上が小祢寝港（雄川河口）
下が佐多氏本領の郡（こおり）一帯・砂鉄・製鉄・鍛冶鉄所あり。

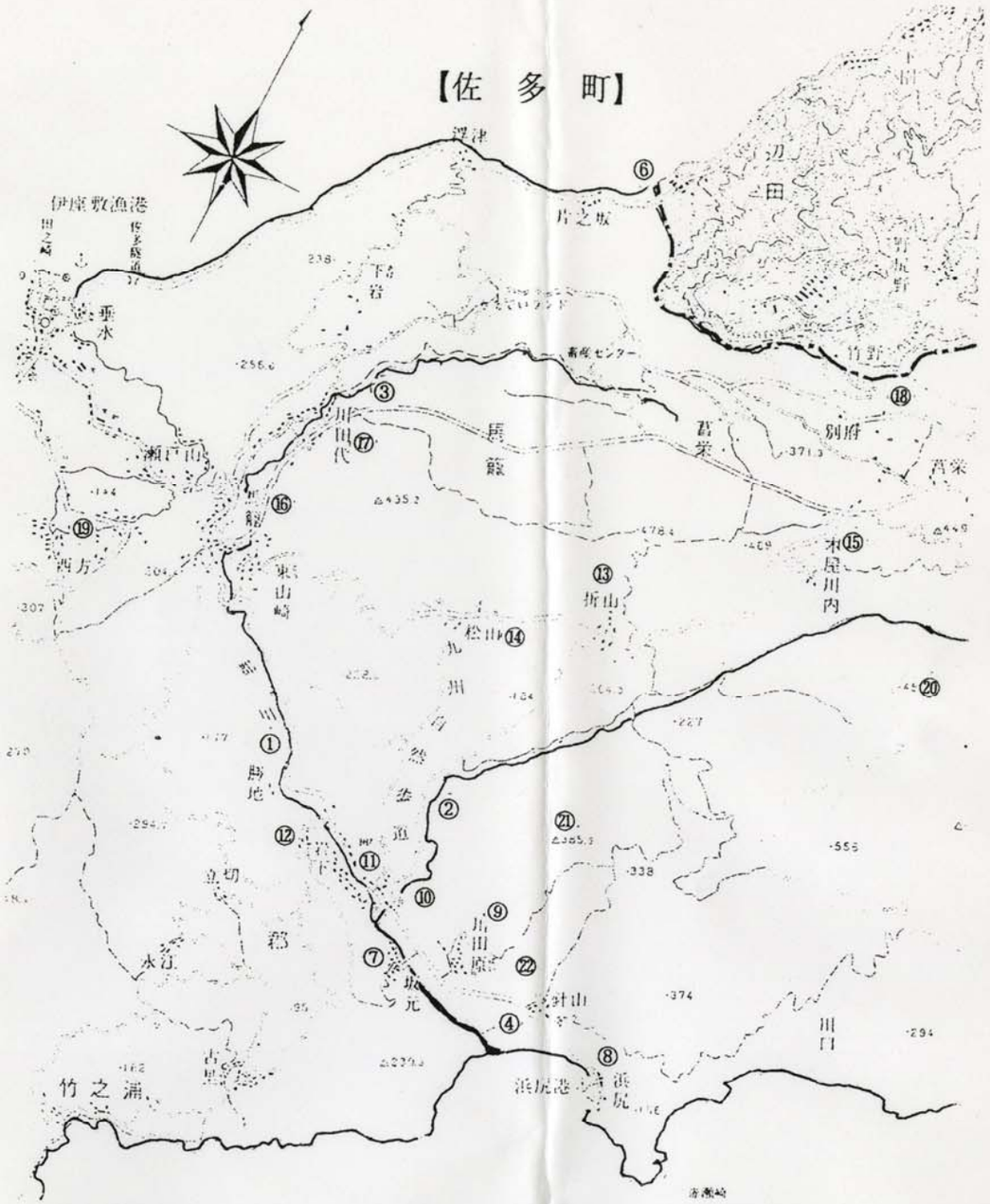


佐多町郡から宮本川をみる

（前面民家の裏山も鉄滓・鍛冶滓が山積）

宮本川中流より河口をみる

（この谷に鉄滓・鍛冶あり）



① 郡川（思川）
② 宮本川（古園川・郡川）
③ 川田代川
④ 針山川（浜尻川）
⑤ 浜尻砂丘
⑥ 大川
⑦ 坂元
⑧ 浜尻
⑨ 川田原
⑩ 古園
⑪ 郡
⑫ 岩下
⑬ 折山
⑭ 松山
⑮ 木屋川内
⑯ 馬込
⑰ 川田代
⑱ 竹野
⑲ 西方
⑳ 鎮守山
㉑ 市来山
㉒ お天道山

注　①～⑥河川・砂丘
　　⑦～⑲地名
　　⑳～㉒山